コンタクト

サンバシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コンタクト

【Ｎコード】
Ｎ３８６４Ｏ

【作者名】
サンバシ

【あらすじ】
コンタクトをなくした。
携帯も忘れた。
そんな時親切にされたら、本当に助かります。
そんな声だったとしても。
妙に不器用な薮田和子（やぶたわこ）は、嫌味な言葉しか出さないように思える人間とはどうやって仲良くなれる？　どこで折り合いをつける？
そんな係長と課長のお話。（完結済み。拍手にて御礼話公開中）

第1話

滅多にない事というのは、意外と連続して起きるものなのだと、達観してみる。

コンタクトレンズを片方無くした。右目。

それはバスから降りている最中で、一瞬何が起きたのか分からなかった。

だから排気ガスや周りの空気を巻き込みながら離れて行く無情なバスをぼやけた視界で見送った。

心臓三拍ほどの間に自分に何が起きたのか把握した。

これだけ風が強い中、あんな薄くて小さいコンタクトを見つけるなんて無理だと一瞬にして結論を出しかけた。普段の私なら諦める。

でも今日ばかりはそう簡単に希望を捨てられず、屋根のあるバス停で一人、心にも風が吹き荒ぶ中、確認を始めた。

両目を開けているとあまりの視力の違いに脳が気持ちが悪くなる。片目を瞑りながらそっと見た体にも服にも、手鏡で見た顔にも緩いパーマをかけたばかりのミルクティ色の髪にも、望む存在はいなかった。耳横で緩く結んだ胸までである髪を何度か手で梳いても、気配すらない。

そんな最中再び突風が舞い込み、残された左の視界をまたさらっていく。もう色々な意味で、痛い。

ゴミでも入ったのか、我慢できないほどの刺激を脳にまで伝えたため、冷静になれないまま、けれど片隅で気をつけなければと思いつつ、左目のコンタクトを外す。

そんな軽い配慮も空しく、もしやと想像した通り左目のコンタクトもあっという間に風にあおられどこかへ消えた。

打ちのめされるとはこういうことを言うのだろうか。

いま友人にメールを打つなら、ｏｒｚの絵文字を絶対入れる。件名にも入れて、本文にも連打する。滅多に入れない絵文字という記号は、私の自暴自棄になる前兆を友人に示すことだろう。酒でも準備して待っていてくれるに違いない。頼むから、笑い飛ばさないでくれ。せめて最初の三十分は。

でもきっとそんな私の思いは届かない。

こんな日に携帯を家に忘れてきた。友人は抱腹絶倒するに違いない。

玄関先に置き去りにした携帯の絵が浮かんだのは、バスに乗った瞬間だ。バスの運行間隔を考えると戻ることもままならず、まあいつものように何とかなるかと気楽にバスの乗客をウォッチしていた数十分前の自分は愚か過ぎて記憶を失いたい。

行きつけの眼科にしても近くの眼科にしても休日の今日は定休日。コンタクトレンズセンターなどのソフトコンタクトを販売しているような店も、こんなビジネス街には無い。ネットで検索すれば近くの店くらい見つかるかも、と思う有能検索端末の携帯は、だからいま手元にないんだって。

人為的検索として友人に助けを求めようにも、電話番号は携帯の中。覚えている番号なんて、実家の家電と職場の代表番号くらいだ。有能な携帯は、人間から何かを奪ったのかもしれない。と、哲学ぶってみても、何も浮かんでこない。――不毛だ。

手持ちの存在から何か得られるものを、とカバンの中を探してみるものの、財布とハンカチと街頭で無理やり渡されたティッシュ、そして休日用カバンなのに何故か入っている名刺入れ。何を考えているんだ、自分。

予備の眼鏡なんて寝る前と起きてしばらくしか掛けないし家から持ち出しなんてほとんどしない。だから期待などしていないのに、ここに入っていてくれたらと埒もないことを考えて、またあの例の記号が脳裏に浮かんだ。挫折感はもうお腹いっぱいだ。

であれば、手書きのアドレス帳さえ持っていればと思うが、どう

して休日にあの分厚いビジネス手帳を、この自分にしては可愛い選択をしたベージュの小カバンに入れなければならない。
と、自分を妙に弁護して、相反する自分と戦っても無いものは無いのだから、これもまた虚しい。

そうして混沌としてきた思考を風に流しながら、やっと周囲に目をやる。
先ほどから分かってはいたけど、視界ゼロ。まあ言い過ぎだけど、それくらい見えない。遂には視力の悪い自分自身をけなしたくなる。ああそうさ、とどこか自虐的にもなる。
どうして、よりにもよってこんな日に。
コンビニの看板の色くらい見分けがつく視力のはずだけど、そもそもこの通り沿いにはコンビニ自体無い。しばらく歩いた先だ。公衆電話の存在も諦める。
そしてこんな視界で歩くスピードを考えると、待ち合わせの時間には間に合わない。第一、初めて行くその店の看板は判別できるのか怪しいくらいだ。
ふと時間が気になった。バスを降りてからまだ数分のはず。時間は、とカバンに目を向けて携帯を時計代わりにしていたことを思い出し……人間は無力だ。虚ろな目をぼやけた空間に向けて、誰かに表現してみる。誰にだ。誰もいない。
色々選択肢を考えては、携帯が無くては駄目、あれを知らなければ駄目、と複数の道は生まれては消え、というか初めから分かっていた事だが、選べる道は一つになる。
待ち合わせしていた相手には無断キャンセル、段取りを組んでくれた相手には帰宅後謝罪だ。

無力感に苛まれていると間近にあったバス停の電子掲示板が光った。次のバスが来る。
別に、乗りませんとひとこと言えばいいのだろうけど、そんな性

分でもない。バス停からよろよろと離れ、すぐ前にあるビルのシャッターに近づく。
不審に思われない程度に手をうろつかせながら、距離を詰めて灰色の冷たさに手を触れようとしていたら、ちょっとした段差が足元にあったのが見えなかった。
思い切り蹴つまずいてシャッターに両手から飛び込んだ。何か言葉にならない音を口から出しながら。

ダッシャンというかガシャガシャという蛇腹の鉄が揺れる耳障りな騒音が響き渡り、体も勢いで跳ね飛ばされてまた段差に足を取られてお尻から転んだ。
ここで、きゃあなどと言うのが女性として可愛いのだろうが、そんなうちの受付嬢のようないろんなパーツが小さくて可憐な顔立ちという訳でもなく、背が高くてカッコ良い女性などという雰囲気の持ち主でもない。身長１６４センチのいたって普通の２８才、独身だ。

「いー、いたた」

結構痛い。鈍痛だ。出さなくていい言葉をわざと出して年より臭いと思ってみたりして意識を外に向けてみる。我ながら必至だ。
しかもこれくらいの年齢かつ独身一人暮らしとなると、転んだりぶつけたりした痕は消えにくかったり処置がめんどくさかったりして大変なのに。
流石に周りに誰もいないとしても公衆の場でお尻をさする訳にも行かず、何となく腰付近を抑えて痛みを逃がしながらじりじりと姿勢を変え、ビル前の段差付近に腰を下ろす。
こんな自分を誰かに見られていたら本当に恥ずかしい。でも誰か見ていたのだろうかなどと周囲を窺う気にもなれず、というか見ても視界ゼロだから、一人顔が熱くなる思いをしつつ膝丈のＡライン

スカートの裾を両手で巻きこんで膝に顔を埋めた。
……今日という日は何なんだ。

「大丈夫か」

随分しわがれた声が聞こえてきて、余計にそう思った。

第2話

視界ゼロだからといって、誰もいない理由にはならない。
分かってる。分かってはいるが、声を掛けられるとより恥ずかしい思いが募る。こんなビジネス街なら、休日でもサラリーマンは出社している。バスにだって何人か乗っていたし、道中歩いている背広の人間をポツリポツリと見た。
心配してくれるのは有り難いが、理由を説明する気にもなれないからほっておいてくれて構わないのに。
でもそれは自分の言い分だ。もし私がこんな人を見たら冷たい都会だと評されていても声はかける。だからある程度常識的な行動なのだ、相手からしたら。

そう自分を奮起させて埋めていた膝から少しだけ顔を上げると、予想通りサラリーマンだと分かる黒のズボンと黒の皮靴がぼんやりと見えた。

「あ、大丈夫、だと思います」
「――本当に？」
「あ、はい。すみません、騒がしくしてしまって」
「いや、ちょっと気になったから。……怪我など無くて良かった」

随分としわがれた声だったから年長のサラリーマンかと想像したが、思ったより若い人間の声質だ。合間に咳き込みそうな雰囲気からすると風邪でも引いたのだろうか。そんな体調の悪い人間に配慮して頂くほどの怪我は無いので、恥ずかしいからもう行ってくれと言う気持ちを込めて、頷くように無言で頭を下げた。
でも黒のズボンは動かなかった。

「――先ほどからお困りのようでしたが、誰か人を呼んで来ましょうか」

恥ずかしさも痛みも随分和らぎ、熱くなっていた頭も冷えてきた。このままここにいても仕方ない事は分かっている。それでもこの状態で男性から手助けしましょうかと言われると正直動機を疑いたくなるが、人を呼んで来る、という提案には心が揺らいだ。彼女か女性の同僚でも近くにいるのだろうか。

兎にも角にも結構ですと言ってしまう事は簡単だけど、折角誰かに連絡を取れる文明の機器が近くに来たのだ。これ（人を含む）を使わない手は無いかもしれない。

でも誰に連絡を取るのだ。記憶しているのは県外にある実家の家電と職場。とりあえずこの年齢不詳の男性に携帯を借りて職場に電話をしたとしても、今日出社している親しい同僚は恐らくいないし、いたとしても職場は反対方向だ。来てもらうにしてもわざわざ休日出勤している人間を呼びだすほど図々しくもなれない。

風邪を引いている（予想）この人間が別の元気な男性を連れて来られても困るが、こんな白昼のビジネス街で拉致などという物騒な事は聞かないし、スーツ姿の人間で偶然自分のドタバタ劇を見て純粋に助けの手を差し伸べようとしてくれているのであれば、何かあったとしてもこの近辺の職場の人間なら足はつくだろう。

そんな失礼な算段をしているとは思ってもいないだろう目の前の人間に、正直に自分の状況を説明してみよう、と思うまでにそんなに時間はかからなかった。わらをも掴む心境とはこういうことを言うのだろう。

コンタクトを無くし、携帯も忘れて困っている事を伝えると、ほんの少し笑う様な咳き込みが頭上から聞こえてくる。人の不幸を笑ってくれるな。

「いや、失礼。携帯がないと困るのは分かります。でも、そうですね、とりあえず視界が悪いのはお困りでしょう。眼鏡ショップがこの通りの反対側にあった気がしますが、今日開いているか検索してみましょう」

実際的かつ第一に解決したい問題を処理してくれる素早さに恐縮しながらも、お願いしますと声をかけた。

男性がビジネスバッグを私から適度に離れた距離に置き、携帯を開いて操作する音が少し和らいだ風の音の合間に聞こえてくる。立っている位置も、女性に不快感を与えない距離だ。この人、女慣れしてるな。

まあそうにしても、体調悪いだろうに親切な人もいるものだ。どんな人だろうかと黒いズボンの膝辺りにあった視線を上げる。

黒の背広は手に掛けているように見え、白いシャツに薄い色のネクタイ、その上に黒い頭がぼんやりと見える。視線は合わない、というか見えないのでまた視線を下げ、意味のない事をしてしまったと少し顔がまた赤くなるのが分かった。

「――今日は休みのようです。やはりこの辺りで今日開いている店を探すのは難しいかもしれません」

予想はしていたが、やはり結果にはガックリくる。

「すみませんでした。……今日はもう諦めて帰ります。ご親切に、ありがとうございました」

「大事な用事があったのではないですか？　お仕事ですか？」

「いえ、その、待ち合わせをしていたのですが」

「ご友人ですか」

違います、と端的に答え、個人的な話を初対面の人間にするつも

りはないことを示すと、やはりそこは休日にも出勤しているビジネスマンだからだろうか、空気を読んでくれてそれ以上聞いてはこなかった。助かる。
それでもここまでしてくれているのだから、ある程度質問に答えなければ失礼な気がした。

「携帯番号も知らないので連絡も取れませんし、きっと時間も過ぎていますから」
「――何時の待ち合わせですか？　今は、十時半を過ぎたところです」

待ち合わせは向こうの指定に合わせて十時四十五分。チェックした場所までは大体十分かかると予想していたけど、余裕を持って着いていようと思って一本早いバスに乗ったらこの有り様だ。この騒ぎで随分時間をロスした。それでもまだ間に合う時間だったけど、この視界の無さでは通常のスピードでは歩けない。

「コンタクトが無いのでほとんど看板とか見えないんです。だからもう間に合いませんから、」

大丈夫です、と言う言葉は思わず飲みこんだ。
男性が適度な距離はそのままに、膝を曲げ腰を落として同じ目線まで降りてきた。
ネクタイは緩めているのだろうか、そんな首元が目に入る。顔の造作がどうかは分からないけど、前髪は案外長いのか、目の上にまできているような風貌がぼんやりと見えた。結構、いや若いかも。同じ位？

「顔、見えますか」
「いえ、どこに目があるかとかそれくらいしか」

「この距離で見えないか……」

少し考えるように顔を傾げて手を口元に持っていくような動きが見えた。そしてまた男性が少し咳き込んだ。

ああ、もし風邪がひどくなっても責任取れないし、何より初対面の人間にそこまでしてもらう義理も無い。

「体調悪そうですね、もういいですから。バスはこの道路の反対側に来ますし、降りれば家はすぐなんです。声をかけて下さっただけで嬉しかったんですから」

自分の感想は言わなくても良かったのかもしれない。でも男性の言葉の端々に感じる優しさやその声は下心があるようには聞こえなかったし、凹んでいた自分には心から有り難かったし嬉しいと言える。

だから私には相手の顔は見えないけれど、相手には私の顔は見えていることを意識しながら、笑って立ち上がる。ぶつけた所ももう痛くなかった。

相手も私に合わせてゆっくり立ち上がった。そうして相対した相手は私より頭一つ分背が高いのだろうか。ぼんやりと見える目の辺りを少し見上げながら見つめる。

「お店を検索してくださってありがとうございました。あの、また機会があったらお礼をさせて下さい。これ」

見えないながらも小カバンを探り、使えないと思っていた名刺入れから一枚出して、腕を伸ばす。伸ばした手も届かない距離。いい距離だ。

「いえ、そういうことをして欲しくて近づいた訳ではありませんか

ら」

男性が焦ったように声を掠れさせながらも頑張って声を出して否定した。この人、本当にいい人だなあ。

「私もそういうつもりでお渡ししているのではありません。でも、本当にさっきまでどうしようかって情けなくて恥ずかしくて困ってたんです。だから社会常識として名乗らせて下さい。私は薮田和子と言います。いつか気分が乗られたら、彼女とかあなたの友人と一緒で構いませんからご連絡ください。勝手な言い分とは思いますが、お礼をする機会がある、と思えればそれでいいんです。あなたの名刺が欲しいと言っているわけではないですから安心して下さい」

伸ばした手を戻すつもりは無かった。相手が名刺を出さなくても良かった。ただ受け取って欲しかった。

私の名刺は捨てられたって、別にいい。それは相手が選ぶことだ。でも、もし相手が望んで私のお礼を受け取るために連絡をくれたなら、コーヒーの一杯でも奢らせてもらえればいい。

初対面の相手にそう思うくらい、突然差し出された助けの手は有り難かった。

ただ、相手と何らかの繋がりを持つという意味にはなるので誤解されたくはないけれど、恋愛なんてする気は無い。

初対面でこの男性の事なんて何もかも分からないのに、ただいい人と言うだけでそんな感情に踏みこめるような性格でもない。

でも、これくらいはさせてよ。いい人なんて、久しぶりに会うんだから。あれだけ凹んでいた気分だって、風と一緒に吹き飛ぶ気分なんだから。

男性はまた咳き込みながら、でも笑っているのだろうか。体を一瞬クの字に曲げて、またまっすぐに姿勢を正して言った。

「興味深いお礼の言葉ですね、薮田さん。……私は鈴木と言います。私の名刺は最初の自分の気持ちを尊重させてもらうためにも、お渡しするのを控えさせて、ください」

笑ったような雰囲気で鈴木と名乗った男性は、最後の言葉が妙に高い音で裏返ったのが気になったのか、少し咳払いをしながら続けた。

「でもこれを受け取る前に、薮田さんの待ち合わせの場所まで送らせて下さい。そうでないなら受け取りません」

「……ちょっとずるいですね」

「そうですか？　お互い、それくらいは歩み寄れそうな雰囲気がしますが」

少し首を傾げたように見えた鈴木さんは、調子を整えようとしてか手を喉に当てたまま動かず、私の名刺を受け取ろうとはしなかった。

これは分が悪い。鈴木さん、なかなかやるな。仕事、何してる人だろうか。

「分かりました。じゃあお互い歩み寄って……誘導、お願いできますか？」

「喜んで」

視界は相変わらず何もかもがぼやけていたけど、相手の心遣いも自分の気持ちも、クリアに見えた。

第3話

待ち合わせの店の名前を伝え、自分も教えてもらった通りの道順を伝えて歩きだす。
腕を伸ばしても届かない距離だけど、後ろを気にしながら先を歩いてくれているというだけで随分心強い。
ここに段差がある、少しずれた方がいい、などとたまに声をかけて誘導してくれるその声はずっと掠れていたので、数分が経って何となく話題を探していた私はこれだとばかりに尋ねた。

「お風邪ですか？」
「いえ、違います。昨日スポーツ観戦をしまして、少し盛り上がり過ぎてしまったようだ」

また何度か咳払いをした鈴木さんに、何のスポーツかと聞くのも個人的な話になり過ぎるかと思って控えつつ、スポーツは気分が盛り上がりますよね、などと無難な返事を振る。
鈴木さんは首の後ろを掻くように腕を回しながら言った。

「体を動かすのも好きなんですが、見るのも好きなんです。最近、週中ずっと机に向かっているせいか週末は動きたくなったのですが時間が無くて、テレビ観戦だったのに叫び過ぎました」
「……じゃあ、今日は背広で残念ですね」
「本当です」

溜息と一緒に出した返事に思わず笑い声を上げる。テレビ観戦でそこまで声を嗄らすって、どれだけ熱狂したんだ。すると前を歩いていた鈴木さんが急に止まった。
ぼやけた視界では一瞬反応が遅れて、ぶつかりそうになる寸前で

私も足を止めた。何か障害物でもあったかな。

「どうされました？」

「――ああ、すみません、車がこちらに曲がって来そうだったので、言い遅れました」

少しだけ近づいた背中が振り返らずに返事をした。通りを見ても、車のライトが光っているのか太陽の光で反射しているのかなんてこの視力では分からない。本当に先を歩いてもらっていて助かるな。また歩きだした鈴木さんの背中をまた同じ距離だけ離れて追う。

他愛のない話をしながら幾度か道を曲がって、どうやら待ち合わせ場所に近づいたようだ。もうすぐです、という声がかかった。

「本当にここまですみませんでした。鈴木さんのご用事には差し支えないですよね」

「大丈夫でなかったら、正直申し訳無いですが声をかけていません」

「私もそうすると思います。でも鈴木さんのご親切には本当に感謝していますので、これ、受け取ってくださいね」

そう言うと、歩きながら鈴木さんが振り返った。少し歩くスピードが落ちる。そんな動作に今が押し時だろうと感じ、歩きながらで申し訳ないとは思ったがもう一度名刺を差し出した。

また少し裏返った音を混ぜながらしわがれた声で鈴木さんは言った。

「受け取らない理由が見当たらなくて、困ります」

「お約束でしたから、よろしくお願いします」

今度は足を止めて、微笑みながら両手で名刺を持つ。鈴木さんも足を止め、体ごと振り向いた動きが見えた。

「ありがとうございました」

お礼の言葉の後、軽くお辞儀をしながら両手を前に出すと、近づいて来てくれた鈴木さんが両手で名刺を受取ったのが見えた。一瞬見えた、男らしくて大きな手。左手に指輪のない事を確認した私は、一体なんだろう。

「お預かりします。――もう少し前に黄色の看板が見えますか？あの喫茶店のようです。今……十時五十分を過ぎた所です。女性のこれくらいの遅刻は許されるでしょう」

「だと良いのですけど。……鈴木さんに言うようなものではないんですけど、実は、上司からどうしてもと勧められた軽い見合い話みたいなものなんです。連絡もせずに約束を破ると双方に迷惑をかけてしまうところだったので、正直助かりました」

話さなくてもいい個人的な事だと思いつつも、口を突いて出てしまった。ここまで送ってもらうとは思っていなかったから、ただの“いい人”に名刺を渡すだけで終わりのつもりだったのに。何の防御線を張ろうとしているのか、自分には分かる。

――恋愛モードには入らない。

最初に声をかけてもらってからここまで、嫌な気分にほとんどなっていない。最初こそ疑ったりしたが、それは昨今の社会情勢からしたら一般常識の範疇だろう。

一目ぼれ、なんて言葉で一括りにされたくはないけど、この少しの時間でも大体の人となりは分かるつもりだ。仕事柄それなりに大勢の人を見てきている。私の嫌な気分がしないという評価は、私を知る人間からしたら良い評価に入る範囲だと知っているだろう。

だからこそ、今はここで一区切りつけておきたい。もしも、――もしも鈴木さんから連絡があったら、またその時に考えよう。

その間に私のこのあやふやな気持ちだって、この視界と同じように明日にはぼやけるかもしれないのだから。

一拍の後、鈴木さんがそうですか、とあまり感情の読めない返事をしてまた咳き込んだ。自業自得だとしてもやはり苦しそうだ。喉にいいものを何も持っていないのが少し歯がゆい。

「ごめんなさい、飴でも何かあったらいいんですけど」

「だ、大丈夫です。――その、帰り道は大丈夫ですか？」

「あ、はい。あの、よく考えれば、タクシー呼べば良かったんですよね。あの時は電話が無かったので出来ませんでしたけど、帰りは喫茶店から電話しますので大丈夫です」

今気付いたように話したけれど、本当は途中で車を見て気付いた。鈴木さんの携帯を借りてタクシーを呼んでもらえば良かったのだ。そこまでは考えが回らなかったんだなと鈴木さんは思ってくれるだろうか。

ここまで送ってもらう時間が惜しくなったとは、伝わって欲しいけど、伝わって欲しくない。

「じゃあ、本当にありがとうございました」

返事が返ってくる前にもう一度お礼を言って鈴木さんに向かって歩きだす。少し縮まった距離、でも先ほどから変わらない視力で表情はほとんど見えないけれど、今日一番の笑顔を心掛けながら顔の辺りを見上げて、鈴木さんの横を会釈しながら通り過ぎる。

気をつけて、という掠れた音が風と一緒に私を追ってきた。

＊　＊　＊

店に入って教えてもらった相手の風貌を探したいけれど、相変わらずぼやけた目では分からなかった。
いらっしゃいませ、と近づいてきた店員に、短めの髪で眼鏡をかけた三十才くらいの男性を探してもらうと、奥の窓際に該当者はいた。少し手を振っている雰囲気がした。

「すみません、遅れてしまって」
「いえ、ほんの十分の事です」

恐縮しながら言った決まり文句への返し言葉を聞いて、瞬時に気持ちも表情も営業モードに切り替える。穏やかに言っているような声に聞こえるが、内心は違うのだろう。漏れてますよ、気持ちが。十分待った、と言いたいのだね。
近づいてきた店員にお決まりのコーヒーを頼む。その後相手が待ちかねたように口を開いた。

「初めまして、株式会社エーラインの木田と言います」
「こちらこそ、株式会社ＰＡＪの薮田と申します」

何となく名刺交換という雰囲気になり、お互い名刺を出して交換する。偶然にも持ってきて良かったというべきか。まあ会社絡みの紹介で会うと言えばこんな滑り出しか。
同業の航空会社系列の営業三課係長、木田。名刺に書いてある下の名前は画数の多い漢字でしかも小さくていまいち見えない。でも知る気も無い。聞いた話では確か三十二才。

「ＰＡＪの前田部長とは何度かお付き合いで飲む機会があったんで

すよ。色々と懇意にしていただいて、こんな風に女性まで紹介して頂くなんて、ちょっと恐縮していたんですよ」
「そうでしたか」
「薮田さんは僕の事を何か聞いて来られました？」

何故まだ目の前のぼやけた短髪男性が独身なのか、そしてこうして紹介されてまで会うことになった理由が少しの言葉で分かる。
前田……例のごとく酔った勢いで約束して、その後何度かせっつかれて断りきれなくなったな。部長のくせに係長に押し負けるとはどういう腰の低さだ。
しかも女性を紹介、と来たか。どこかの客引きが連れて来た男性と私は会っているのか？

「営業がとても熱心だとお伺いしております」

前田部長から聞いた言葉の通りだが、迂遠の表現を直球で受け止めた木田。そこ、褒められたと勘違いしないで欲しい。照れるな。大変失礼なこととは思うが、その年齢でまだ係長というのは、まだ課長になれないのか？　それともやっと係長なのか？
そんな疑問をおくびにも出さず、こちらに向けられる視線を外したかった良いタイミングでコーヒーが来た。この店員のマナーを少しは見習ってほしい。
初対面の人間と話す時、しかもどういう理由でこの場にいるのか分かっているのに、紹介する人間が紹介しづらい言葉など言う訳が無い。聞くな。
そして前田部長、人格面の紹介の言葉を何故隠していた。しかも何故私も面倒臭がって聞かなかったのか。またあの記号が、コーヒーを飲みながら落とした視線の先にぼやけて並んだ。
「じゃあ、お昼で混みあう前に次の場所へ移動しましょうか」

いまコーヒー来たばかりなの、一緒に見ましたよね？　私と違って眼鏡をかけてる木田よ。

第４話

何とかコーヒーを飲み終えるまで適当な話題で引き伸ばし、職場の情報を適度に引き出す。

エーラインはうちが事務系の用品を発注している会社だ。こんな時代だから事務用品などはカタログやネットで注文できるお手軽な会社に頼みたいものだが、航空会社系列のしがらみだとかで未だにこの会社と取引をしていると先輩から聞いたことがある。ならば、もっと価格に挑戦してみたらどうだ、などと分野外の話をしたくなる。

そうでなければこんな相手とこんな場の話、もう持たない。

さっきまで聞こえていたしわがれた声との会話が妙に懐かしく思えた。

「じゃあそろそろ」

私の飲み終わったカップを見たのか、こちらの意思など構わずに木田が立ちあがった。待て待て、私はここで帰る気でいるんだ。私の表情を読んでくれ。

あなたの表情は、コンタクトなくとも分かったから。というか、コンタクトしてなくて良かったと正直思ってるから！

「木田さん」

「何でしょう」

何と言ったらよいのか分からず思わず名前を呼ぶと、それに親しみを感じたのか、木田は座ったままの私に一歩近づいてきて嬉しそ

うな表情を向けてきた。……そんな表情をしてくださって大変申し訳無いけど、近過ぎるから。かなり引いてるから。

「あの、正直申し上げますと前田部長からどうしてもと依頼があってこちらに参りましたが、このあと所用がありまして、」

「そうですか、じゃあそれまでなら大丈夫ですよね」

「いえ、その」

今の台詞が断り文句と読まない君は、私には無理だ！　他を当たってくれ！

困ったように見上げてみたけれど、木田には通じなかったようだ。じゃあ少しでも早めにランチに行きましょうなどと言いながら、多分嬉々として自分のレシートを持って会計に向かった。

……自分のだけか。もう無理。ほんと無理！　まーえーだー！

このまま席を立ったら巻き込まれる。どうしようかと固まって席を立てずにいると、会計を終えた木田が戻ってきた。来なくていいから！

「あ、もしかして」

気付いてくれた！？

「緊張してます？　大丈夫ですよ～リラックスリラックス」

軽めに、しかも心底楽しそうに話す声を聞いているのがキツイ。年上としてペースを取ってあげようとか無駄な事考えているのかもしれないけど、違うから。その方向からして違うから！

あの例の記号が、今日何度目か分からないほど思い描いているあの記号が、目の前を踊る。どうしよう、この記号が気に入ってしまった。

あまりの展開に現実逃避をしかけた私の左腕を、急に木田が取った。
瞬間、鳥肌が立つ。
条件反射で勢いよくその手を跳ねのけると、不機嫌そうに木田が言った。

「そりゃないんじゃないの」
「……あの木田さん、大変言いにくい事なんですが、」

急に触れられるのも座っている人間に立ったまま話し続けるその神経もこの距離も、何もかもがもう我慢ならなかった。立ちあがって一歩後ろに下がって距離を取りながら、初対面の女性にその態度は無い、と言い放ってやろうとした時、店員の恰好ではない誰かが私と木田の間に入った。
こんな視界では周りの動きもいまいち分からない。誰と考える間もなく、先ほどまで聞き慣れていたしわがれた声が前から聞こえてきた。

「冷静な話し合いには見えないので、失礼だが間に入らせてもらう。――まだ誰にも言ってなかったからこんなことになってしまったが、薮田と私は付き合っているんだ。悪いが引いてくれないか」
「す、鈴木課長！　――やっ、別にそこまで話が詰まっているわけじゃないんで、僕も前田部長が紹介して下さった手前、会わない訳にもいかなかったものですからっ」
「なら良かった」
「あ、じゃあ僕はこれでっ」

急にテンションを上げて焦ったように言葉を出した木田は、今度こそ私のレシートを持って離れていった。会わない訳にもいかなかった？　なんだそのいかにも押し付けられた的な捨て台詞は！

でも、しわがれた声が、出るぞと言って店を出ていっても、それ以上は上手く思考が働いてくれなかった。

鈴木さんだった。さっきの声は、ここまで私を連れてきてくれた、鈴木――――課長？　どこの。

先ほどまで追いかけていた白いシャツの背中を店内から窓越しに眺めた。離れているから余計ぼやけて見えないけれど、外にいる鈴木さんに誰かが近寄っている。同僚だろうか。ぼんやりと見える同僚らしきその男性の背広の持ち方、両手をズボンのポケットに入れて背中を丸める姿勢に何となく見覚えがあった。

一度自分に関連がある人間かもしれないと認識すると、はっきり顔が見えないとしても声が違っていても、誰なのかくらい分かる。

――鈴木、課長、ね。冷静さを閉じ込めるように目を閉じ、開けて、店から出た。

「あれっ、人事の薮田係長じゃないですか～。どうしたんすか、こんな所で」

「プライベートです。加賀君こそ、背広でどうしたんですか？　休日なのに営業回りですか？」

「そんなわけないっすよ。朝から営業の研修に行けって、鈴木課長と組まされたんですよ～ひどいっすよね、たかが一時間くらいのものを休日潰してまで」

姿勢の悪い加賀君は両手をポケットから出して、首の後ろに回した。コンタクトを入れてなくても離れていても、その仕草で、一昨年新卒で採用した加賀君だと分かる。

これだけで加賀君だと分かったのに、――どうして気付かなかった。

「お疲れ様でした。課長に聞いて必要なら代休はきちんと申請してください。――鈴木課長も、お疲れ様です。加賀君と組むと道を間違えられて大変だったでしょう。よく勝手に迷子になったと他の営業の方々が言っていましたから」
「薮田係長、そりゃないっすよ。今日勝手に迷子になったのは鈴木課長っすよ～」
「この辺りの地理にはまだ詳しくないんだ。研修後、何も言わずにいきなり外に出たお前を追って出ただけ感謝しろ」
「その声で言われても、今日は全然迫力ないっすね～」

けらけらと笑う加賀君に合わせて少し微笑んだ後、ぼやけて見えない鈴木課長に営業モードで、ではこれで、と軽くお辞儀をして背を向けて歩きだす。表情筋が、もう限界だ。
背中にしゃがれた声が飛んでくる。

「薮田係長。――タクシー呼ぶか？」
「何の事でしょう、鈴木課長。――失礼します」

顔だけ振り返って返事をして、前を向きながら笑顔を捨て去る。あまりの気分の悪さにしかめっつらになるのが分かる。歯を噛み締めて、叫びたい気持ちを抑えた。
視界は相変わらずぼやけていて足元も正直覚束ないけど、それを気取らせるつもりは無いし、頭の中までぼやけたつもりはない。
何とかビルの角までいつもの歩調で辿り着き、曲がって身体がビルで隠れた途端、熱さと冷たさの混じる腕を握って、一瞬立ち止まる。

余りのショックに、もう、どうしてやろうかと混乱する頭の中は、ビルの谷間に吹き荒ぶ風より大嵐だ。

ビルの影が落ちた道路はぼやけた視界にはより見えにくくて歩きづらかったけど、ゆっくり確認しながらバス停までの道程を歩きだす。数十分前に通り過ぎた道に、数十分前まであった背中が記憶の中からチラつく。

鈴木。どこにでもある名字だ。

まさか、あの鈴木課長と同一人物だとは考えもしなかった。

休日の、職場でもない場所で、少し髪型が違うだけで、聞き覚えのない声で親切な言葉で近づかれただけでは一致しないほど、彼の事は何も知らなかったのだと、嵐の片隅で気付いた。

第5話

鈴木課長と初めて会った時の印象はあまり良くなかった。

彼は今から半年ほど前に、通常の異動時期ではなかったけれど別の支社から本社に異動してきた。

そんな彼の本社への出勤初日、社員ＩＤの不備で中に入れない、と内線で人事に連絡が入った。

その内線を取ったのが私だった。受付の女の子も困り果てた様子だったため、大至急代わりのＩＤを持っていくのでもう少し待って欲しいと伝えた。

人事のシステム関連の更新が間に合わなかったのかを確認したくても、皆の出社時間にはまだ少し早かった。担当者は不在で、情報課の人間も内線を鳴らしても誰も捕まらなかった。仕方が無いのでとりあえず探し当てた異動者の書類と来客用のＩＤカードを持って、受付に降りた。

受付の子が困り果てた声を出していたのも頷けた。カウンターの横で待つ男性は書類の写真とはかなり表情が違っている。

黒髪を後ろに軽く撫でつけているところまでは同じだが、真顔の写真とは違って今は随分しかめっ面だ。ここに来るまでに見ていた写真はちょっと彫が深くてかっこいい顔してると思ったけど、即座にその考えは捨てる。そんな不機嫌な顔をした男性に小走りで近づくと、遅い、と低い声で言われた。

「申し訳ありません、人事の薮田です。担当者が不在でどうして鈴木課長のＩＤが通らないのかまだ判断しかねますので、とりあえず来客用のＩＤを発行してきました。今日はこちらをご使用ください。そちらのＩＤを一旦お預かりしてよろしいですか？」

丁寧な受け答えをしたつもりだった。でも一度不機嫌になった人間の機嫌は予想通りそんなすぐには回復しない。

「異動してきた人間に初日から随分な対応だな、本社というのは」

「本日中に対処いたします」

短気な男は苦手だと思いながら本人のＩＤを受け取りつつ、代わりのＩＤカードを出した。奪うように持っていかれ、ＩＤを読取装置に当て中に入っていく彼を念のため追う。歩きながら来客用のＩＤを首から下げた彼に声をかけられた。

「営業フロアは七階で変わっていないな」

「はい、営業一課への配属ですので変わりありませんが、一課の部屋はエレベーターを降りて右手ではなく左手奥の部屋に変更になっていますが、よろしいでしょうか」

「分かった」

硬い声も表情も変化しないまま彼はエレベーターに乗り込んだ。これは一緒に乗っていくには息苦しい。

正直そう思って書類を抱えたまま軽くお辞儀をして見送る姿勢でいると、エレベーターのドアは閉じていかない。

まさか故障？　と思って頭を上げると、開くボタンを押し続けている姿勢で鈴木課長が眉をひそめてこちらを見ていた。

「君はこれを届けに来ただけだろう。受付に用事があるとも思えない。乗ったらどうだ」

言い訳をして受付に残るのは簡単だが、こう言われて断れる性分ではない。失礼します、と小さく会釈して入った瞬間にドアが閉まる。危なげなそのスピードに思わず眉をひそめた。

そんな顔を見せる訳にも行かず、けれどこの雰囲気でボタン前にいる人間の前へ手を出す気持ちにもならず、一歩奥に下がってじっとしていると、低い声で問われる。

「人事は何階だ」

「すみません、十一階です」

再び、沈黙。でも居づらいと思う間もなく七階に到着した。エレベーターの扉が開く寸前に、ＩＤは後でお届けしますと伝えると、口元に手を添えていた彼からは軽い頷きで返事があっただけだった。

＊　＊　＊

「そうよ、あの口元に手を持ってく癖、見てたのに！」

「いやー、普通興味のない人間のそんな癖、覚えてないから」

あれから何とか家に辿り着いた私は靴を脱ぐ間も惜しくて玄関で置いてきぼりを食っていた携帯を開いて松下育子を呼び出し、メガネをかけて落ち合った喫茶店で遅めの昼食を取りながらこうなった顛末をざっと話して、予想していた爆笑を受け止め、話し終えてもまだ収まりがつかなかったから近所の居酒屋になだれ込んで――――飲み食いして今に至る。

「でも珍しくワッコにおもしろい反応させた人間が、いい印象のなかった鈴木課長さんねえ」

ぶつくさと言う私を昔からの愛称であるワッコと呼んで、にやりと笑ってビールをあおる育子はいい飲みっぷりだ。もっと飲んでく

れ。私も最後の一口を飲みきって、ビールジョッキを強めにテーブルに叩き付ける。女の力じゃそんなに音が大きく出ないのがちょっと悔しい。

こんな飲み方をする私を知っているのは、最近では高校時代からの女友達である育子くらいかもしれない。

淡々と仕事をこなしている私のことを融通がきかない女と言う人もいる。それくらい堅い判断をすると思われているのだろう。だからかあまり職場の女性陣とは一定以上仲良くはなれない。でも学生時代とは違い、社会人になったらそんなものだろうと思う。

それにしても企画や営業でもあるまいし、人事で融通きかせてどうする。何か事を起こした人間の理由は一応聞くけれど、ある程度規則で判断して社内規範を破った人間を扱わなければ妙な前例ばかりができる。どうでもいい前例ばかりが並んだ日には、その隙間を狙ってわざと規則を破ろうとする人間がでてくるのは当然だろう。そうして社内はぐだぐだになる。そんなんでやっと苦労して入った会社を自ら潰してどうする。

そんな考えの私を、課長も部長も泳がせて使ってくれてるからうちの会社のこと気にいってたのに。なのに転勤してきた人間に、か、からかわれ！　男のくせにぐちぐちぐちぐちと！

「いい印象どころじゃないわよ。さいっあくな印象よ、ねちねちねちねちと！」

「ああ、あれ。フォルダ紛失ねちねち男ね」

育子の言うフォルダ紛失の件はもう二か月前のことで、その時のやり取りは育子にもう話したのに、酔った勢いで同じ話を繰り返す。お互いほどよく酔っ払っているから、もう聞いているんだか聞いていないんだか分からなくても、どちらでもよかった。

＊　＊　＊

あまりいい印象が無かっただけの鈴木課長とはその出勤初日以来接点が無かった。

人事と営業なんて、事務処理が発生して接点ができるくらいだが、いまやメールやウェブシステムだけで事足りる時代だ。

たまたま帰宅時間が同じになるとか、食堂で休憩時間が同じになったなどと偶然出会う以外、殆ど会わないし、知りあわない。よほど好きな人ができて、周りの情報を集めて時間を同じにするとか一緒の飲み会に行くなどの工作をしなければ。

事務方の人事は書類のやり取りが主のため、いまや必要書類はネット上の共有フォルダに置かれている。でも、パソコンを介さずに動く仕事も結構ある。

新入社員を迎える春が代表的なものだが、社員の離職や人事考課、社内問題などを扱う時には、データだけでなく直接担当者や当事者とやり取りをする必要がある。結局は人と人が仕事をしているのだから、メールやデータだけでは味気ないと思うこともあった。

そうした混在するやり取りの中で、ある日、起きるべくして事は起きた。

「薮田係長、朝から営業一課の共有フォルダがネットワーク上から消えてるんですけど、何か聞いておられますか」

各部課に大体一人ずつ事務処理を行う担当者が決められているが、営業一課と二課を担当していた赤堀さんから昼前に突然そんな話を向けられた。何度確認しても、何も見えないと言う。

自分のパソコンから念のため確認したが、確かに一課の分だけ消えている。情報課に問い合わせるよう赤堀さんに指示して他の作業を続けていると、ええー！　という可愛らしい声が聞こえてきた。

先日終業後に軽くお茶した時には「私ももう社会人二年目ですから、そうそうの事では叫びませんよう」などと言っていたのに。あとで冷やかそうと思いつつ少し慌てたような声にどうしたのかと耳を澄ましていると、電話を切った赤堀さんがパーティションにぶつかりながら私の席まで小走りに駆けてきた。

「どうしましょう係長！　情報課の方で、誤ってデータ消しちゃったみたいですってー！！　今私が言って気付いたっぽいので、昨日の夜に触った担当に確認するって言ってました！」

内緒話のように喉を使わずに音を出してひそひそ声を目指したようだけど、それだけ勢いつけて発声してたら意味は無い。

予想通り私たち周辺の皆には聞こえておりどよめきが広がっていく。また情報課かーとか、かわいそーなどという言葉が聞こえてくる。確かに情報課は主要なデータを扱っているだけあって、何かある度非難を浴びやすい。

「それで、復旧ははいつになるって？」

「担当者が今日休みみたいなので、そっちに確認しつつも、すぐ復旧かけるそうです。でも少し時間くださいって」

「そう。じゃあ今からなら早いうちにデータは戻るわよ。前あった時もそうだったでしょ」

確かにデータが飛ぶのは困ったことだが、メインが飛んでも別サーバーにバックアップが立てられていたはず。それで何度か人為的なミスを乗り越えてきたから、今回も大丈夫だろう。

そう思って気軽に言ったのだけど、赤堀さんはまずい、という表情で眉間にしわを寄せた。小さい顔がより小さく見えた。

「係長ぉ、今日の午後一番で一課に回答するはずのデータが飛んで

るんですけど……」
「……それは急ぎなの？」
「朝から一課の課長さんに言われてて、それでフォルダを探してたんですけど」
「じゃあ今すぐ、どうすればいいですか？」

赤堀さんの新入社員時代の教育課程を担当した事もあって、私が答えを出さずに赤堀さんに対応方法を尋ねると、ええとーといういつもの前振りの後、口に出しながらメモを取りだした。

「まず課長に電話、内容は情報課によるデータ吹っ飛びで朝から言われた処理ができないことと、復旧についてはまだ情報課から連絡が無いこと、あとはー、あっ電話の前に私の所にデータが残っているかどうかもう一回確認っ」

以上でどうでしょう、という雰囲気でメモを取りながら視線をこちらに寄こした。

「もう私に聞かなくても大丈夫そうね、その通りやってみて」

そう言って微笑んでみると、嬉しそうに、はいと照れながら返事をした赤堀さんは慌てて自分の席に戻って行った。
何度か一課と二課の課長と電話のやり取りをしているし、赤堀さんなら大丈夫だろうと考えて手元の処理を終えた後、休憩に入る皆と合わせて食堂に向かった。

第6話

昼食後、置いてきた赤堀さんが気になって少し早めに部屋に戻ると、まだ休憩には行けないようだ。必死にパソコンと向き合っている。

どうなったのか確認するために机に近づくと、赤堀さんは係長ぉという可愛らしい声を出しながらもパソコンから目を放さなかった。

「やっぱりデータが私の所には無くて、情報課の件を一課の課長にお電話したら、どうしても午後一番に欲しいって言うんですよ。私のせいじゃないのにー。だから二課のデータをひな型にして、データを入れ直してるんですけど、時間までに間に合いそうにありませーん！」

ダカダカとキーボードを打っている赤堀さんに改めて内容を聞くと、そんなに急ぎの書類でもないように思えた。「係長、申し訳ありませんけどもう少し時間が欲しいって電話して下さいませんかー」と泣きつかれると、私も断れない。休憩返上で頑張っているから手助けしなきゃ可哀想だ、とはちょっと甘いかもしれないが仕方無い。

そう思って営業一課の課長直通の内線番号を押すと、一回のコールで出た。早い。

すぐ名乗って、依頼のあった案件はもう少し時間が欲しい事を伝えると、嫌そうな溜息を聞こえるようにわざわざ出してきた。……思い出した。この人、異動してきた時もこんな感じだった。

「ですから、申し訳無いですがもう少しお待ちください」

「こちらは朝から頼んでいるのに、それでまだだと。データが飛んだのは聞いた。情報課のせいですぐデータを回せなかったのは仕方が無いだろう。でもこちらとしても午後一番で頼むと言ってあるの

だから、他の案件よりもそれなりに早めに対応してくれても良かったのではないかと言うのは勝手か？」

理詰めで言われたら何も返す言葉は無い。

課長の言うとおり、赤堀さんが私に報告したのは依頼があってから随分時間がたってからだ。もっと早く対応していたら、ここまでデータ入力に切羽詰まる事も無かっただろう。それは事実だ。だから、こちらとしても謝罪するしかない。

「いえ……それについては本当にご迷惑をおかけしています」

「謝られてもこちらはもうデータが欲しい。その処理がこちらに来ないと経理に回せない。経理から午後一番でないと今日中に処理ができないと言われている。どうするんだ」

苛々しているのがよく分かる声だ。相手も切羽詰まっているのだろう。今さらここで言い募っても状況的に仕方が無い事は分かっているのに、言わずにはいられない事はよく分かる。だからこちらとしても謝るしかないのだが、謝ってもどうにもならないのもまた事実だ。

「……私の方から経理に一度連絡を取ってみます」

「意味は無い。経理には何度も確認して、うちに届いてチェックしてから回すとなると、あと十分がタイムリミットだ」

その言葉に少々お待ち下さいと保留にし、赤堀さんに向かって叫ぶ。

「あと何分かかるの！」

「あとー、あとーっ、十分ほどです！」

キーボードの音とカチカチと小さく鳴る音が、まだほとんどの社員が休憩に行ったまま帰って来ていないフロアに聞こえる。これ以上赤堀さんを焦らせたらまずい。余計な神経を使ってこれ以上ミスを出したら事だ。

電話を保留にしたまま席を離れ、フロアの隅にあるドアのついた区切られた小部屋に移動して、そこで電話を再度取る。

「お待たせしました。――あと十分ほどで送れるそうです」

「随分なオンタイムだな」

皮肉を言われてもここで返したら火に油だ。謝罪も繰り返せば鬱陶しい。沈黙で答えると、送る時には必ず連絡するよう念押しされて電話は切れた。

そんな社会常識、言われるまでもないのに。

「だー！　もうっ！」

小部屋だけど、あまり大きな声を出せば外に漏れる。先ほどの赤堀さんと同じように、喉を使わず叫ぶ。

受話器を置いたまま手が白くなるほど力を込めて握りしめ、苛々する神経を外に逃がした。

＊　＊　＊

「薮田係長、すみませんでした。……私、朝その電話受けた後、内容はサーバー上から取ればいい簡単な物だったので後回しにして通常業務から処理してしまったんです。――間に合ったでしょうか」

データを送って一課に電話を終えた赤堀さんが、ぼそぼそと言いながら時計を見上げた。先ほど締め切りの時間を言われてからちょうど十一分が経過した。

「お疲れ様。今回は色々タイミングも悪かったわ。でも赤堀さんが自分で分かっている通り、こういう不測の事態があるから急ぎの場合はまず確認したり、簡単であってもすぐ処理したりすれば問題になりにくいと思うわよ。――さあとりあえずお昼、食べて来なさい。今日のAランチ終わっちゃうわよ、ハンバーグだったから」

好物の名前を出しても反応しないほどしょげている赤堀さんをとりあえず休憩のために部屋から追い出し、やれやれと自分の席に着いた。

隣の係長から災難だったねー、と労いの声をかけてもらいながら、これは一度確認の電話をしなければと思いつつ、とりあえず簡単に済ませられる手元の書類を片づける。

そろそろいいだろうという頃、内線をコールすると、何回かの後に反応があった。でも通話の相手は他の社員で、課長はちょうど休憩に行ったところだと言う。彼もこの案件を処理するために休憩に行けなかったのだろう。

電話を切って、課長が赤堀さんと鉢会ってしまう前に声をかけようと部屋を出た。

十五階にある食堂に向かうためにエレベーターを待ち、タイミング良く下から上がってきたエレベーターのドアが開く。

中にいた人物を見、この人物に会いに行くはずだったのに中に入ることを一瞬躊躇してしまうのは先ほどの電話でのやり取りの気まずさからだ。

「――どうぞ」

エレベーター内にいた、開くボタンを押し続けている姿勢の鈴木課長から声を掛けられ、目が合う。
デジャビュ。いや違うか。つい三カ月前出会った時と同じだ。
眉間にしわ、という表情まで同じで嫌になる。

「――失礼します」

軽く会釈をして入り、何階だと問われるところまで似ている。同じ階ですと答えた後、沈黙の時間が惜しくて口を開く。

「鈴木課長、先程は失礼しました。人事の薮田です。いまお伺いしようと思っていた所でした」
「その割に乗る時は躊躇したな」

いちいち嫌味な男だ。淡々と言う声を無視して、気になっていた事を尋ねた。

「先程の件は経理宛てに間に合ったでしょうか？」
「間に合っていなければ、ここにはいない」
「……そうですか。ご迷惑おかけしましたが、何よりでした」

勘に触る言い方をされても仕方が無い。こういう場合は聞くしかないのは社会人として経験済みだ。そう思いながら返答をした時、十五階に着き、扉が開く。
鈴木課長が先に出ていく光景も最初と同じだ。少し違うのは同じ階で降りるはずの私が、開くボタンを押したままエレベーター内から出ない事だ。
降りて来ない私を不思議に思ったのか、鈴木課長が振り返った。
「後で担当者にも謝罪のお電話をさせて頂きますが、私も担当者も

以後気をつけるように致します。今日は失礼しました。では」

一緒に降りて時間を過ごす理由はこれ以上ない。そう言って軽く会釈をした後、閉じるボタンを押す。

扉が閉まるその短い間に、こちらを向いたままの鈴木課長が追い打ちのように最後の一言を投げてきた。

「部下の尻拭いも大変だな」

その言葉に、扉が閉じるギリギリに開くボタンを連打して再度扉を開けた。ゆっくりと元に戻っていく扉を閉まらないよう黒のパンプスで抑える。エレベーターの警告音が聞こえたが、もう我慢ならない。

何度も何度も、ねちねちと！

「お言葉ですが、担当者は自分で自分のミスを処理して、鈴木課長にメールを送り電話をしております。ですから、鈴木課長のお言葉からすると私がここに来たのは出過ぎた真似だったようです。以後、気をつけます」

赤堀さんがしたミスはミスだがフォローして成長させるのも周りの役目だ。それを少しだけフォローして、一応常識として上司が軽く謝罪する事を尻拭いなんて言うようでは、誰も育たない。

確かに私が出向いて先に謝罪したのはやり過ぎだったかもしれないが、それは鈴木課長だったからだ。念のため、の行動は、どうあってもこの人からしたら揚げ足取りの材料にしかならない。

だから以後、こんな対応はしない。するものか。

睨む訳にはいかないが冷静に相手の目を見て言い切り、扉を止めていた足をどかすと、視線を合わせたままの私たちの間を扉が遮る。そうしてすぐ十一階のボタンを連打して、エレベーターが下りてい

くのを感じながら、あまりの腹立ちゆえに脱力した。

金輪際、鈴木課長とかかわる仕事をしたくない。

そう思ったのは、ほんの二か月前の事だったのに。

第7話

おはようございます、と笑顔の可愛い受付嬢が挨拶をかけてくれる。航空会社だけあって、アテンダントに憧れたけど色々足りなくて入れないからせめて同じ会社に、という理由で選ぶ人もいるらしい。確かに可愛いけれど、身長でも足りなかったのだろうか。

でもそんな爽やかな挨拶も今日の私には苦笑いしか返せないほど頭痛の種だ。

――飲み過ぎた。

来る途中の薬局で二日酔いのドリンクを買うはめになるほど飲んだのも久しぶりだ。それくらい腹立たしいやら情けないやらだったから仕方が無い。本来なら今日は休みたいくらいだけど、そうもいかないのが役職付きだ。

ただの勤務年数で付いたような役職だし責任が増しただけで給与はほとんど変わらないのに。

十一階のフロアに何とか辿り着き、部屋に入ると課内の人たちからどうしたの、と次々と声をかけてきた。

「あちゃ、二日酔いですか～顔真っ青ですよ」

「係長、珍しいですね眼鏡なんて。出社しても席におられなかったから、今日休むのかと思っちゃいました」

いつも人事課内では早いほうの出社だから、勤務時間ぎりぎりに出社した私が皆の注目を浴びるのも分かる。いつもしていない眼鏡をかけているから少し注目を浴びるのも、分かる。でも頭痛いからそっとしておいてくれー。

薬飲んだから大丈夫ほっといて、と呟くように言うと、心配そうな雰囲気を残しつつもわらわらと傍に来ていた同僚や赤堀さんも席に戻っていったのが辛うじて分かる。

人事課長の朝礼が済んだ後、痛む頭を動かして手元の書類を片づけていく。動かし続けていれば何とかなる、と思ったけれど、やはり酷過ぎる二日酔いは休まないとだめだったらしい。
昼前にはどうにも気持ち悪くなって、結局赤堀さんに連れられて医務室行きになった。入社してから風邪でもなく自分の不手際で倒れるだなんて、信じられない。ああ、査定に響くかも。何もかもあいつのせいだと頭の中でわめいたけれど、ベッドの枕に突っ伏してすぐに後ろめたい意識は途絶えた。

＊　＊　＊

何となく寒さを覚えて身じろぐと、温かな布団がふわりと口元にまでのびてきて気持ちいい。
ぬくいの、好き。
頭を布団に入れるように少し潜ったら、少し髪を後ろに引っ張られた。痛い。ぬくいのに邪魔すんな。
そう感じた時、頭が急に軽くなったように感じた。ああ、髪を縛っていたシュシュが取れたのかな。
もう頭痛もしないし、ぬくいし、幸せ。
そう思ってまた布団に顔を擦りつけていたら、髪を撫でられる感覚がした。
おかーさん、もう少し。
――なわけがない。
ガツっと音がするように目が覚めた。少し目を瞬かせて自分の家の布団でない事を確認し、そろりと布団をめくって目だけ出す。
何時なのか分からないけど、暗い部屋はもう夕方のようだ。しか

もぼやけて何も見えない。眼鏡が無い。どこだ。

「起きたか」

掠れたような、しわがれた声が聞こえてきたような気がした。視線だけ動かして左右を見るけど、誰もいない。幻聴か。幻聴であって欲しい。この声が現実ならまだ酔っていたい。

「後ろだ」

溜息の後、また高く裏返った声が咳に混じって聞こえる。静かな部屋に響くその声は、恐ろしい程耳にまっすぐ届いた。

「もう六時半になる、いい加減起きた方がいい。コンタクトは作りに行かなくていいのか」

「――出ていって」

「それは薮田係長に言いたい台詞だ。医務のスタッフはもう五時で帰った。鍵を警備に返すよう、預かっている」

何で。何でここに鈴木課長がいるの。二度目の深い溜息も妙に掠れた音で聞こえた。

「説明するから、まずは起きろ。廊下に出ている。眼鏡は横の棚の上だ」

しわがれた声がだんだん遠くになって、ドアの閉まる音がした。と同時にガバっと布団をめくって起き上がり、眼鏡をかけて今自分がいる場所を確認する。二日酔いで無様に運ばれて、六時半まで爆睡。服は、ちょっと寝乱れてるけど普通。はみ出していたシャツをスカートに入れて、髪は……あれは夢か現実か？

――髪は、解かれたのではなく、解けた！　自然にシュシュが抜け落ちた！
眼鏡も、自分でここに置いた！　きっと寝る前のいつもの癖で自分で置いた！　よし！
急いで身支度を整え、薬棚のガラスの扉で確認する。大丈夫。二日酔いの後の、いつもの私。
ドアに近づき、ノブに手を伸ばし――中から鍵をかけた。
ガチャ、という音に外にいた鈴木課長が反応した。

「――何の真似だ」
「鍵を使わないでください」

鍵を差し込もうとしたのだろう音に、少し叫ぶように制止の言葉を掛ける。
あり得ない。こんな状況で会いたくない。こんな混乱した頭で、顔を合わせたくない。
こんな、よく分からないまま、クリアな視界で鈴木さんを見たくなかった。

「その声は鈴木さんですね。外部の方がこんなところにいたら警備にストーカーと間違えられますから、今すぐ帰って下さい」
「おい」

ノックする音が聞こえても、鍵は開けられない。お願いだから、何も言わず、何も見ず、ただの鈴木さんとして帰ってほしい。
「私、まだ酔っているみたいなんです。きっと目が覚めたら何もかも忘れますから――本当に、帰って下さい」

医務のドアには半分だけ曇りガラスが入っていて、ドアを隔てた

すぐ向こう側に――鈴木さんの影が見える。
昨日のぼやけた私の視界のように、彼のかたちは見えるし、もう聞き慣れてしまったしわがれた声も聞こえてくる。少しぶっきらぼうな言葉遣いになっているけど。

だからこれは、昨日の続き。

あの何とかという空気を読まない人と適当別れてお店から出たら、鈴木さんがいて、バス停まで送ってくれた。じゃあまたいつか、なんて声をかけあって、私は顔が分からないまま彼と別れて、育子と連絡を取るんだ。
そうしてお茶しながら何度もあの記号を育子に送ったんだよ、なんて情けなくも恥ずかしい事件の話をして二人で大笑いして、その鈴木さんから連絡あったらどうする？　なんてにやりと笑う育子を、どうだろねえなんて言って誤魔化して。
そうやって翌日を迎えるつもりだった。いや、そうして迎えた翌日だと思いたい。
しばらくの沈黙の後、カタと小さく音がして去っていく足音が聞こえた。
じっと固まって何分が経過したのだろう。
そっとドアを開けると省エネのためにあちこちの電気は消されていた。このフロアは残業するような課はないため、廊下はすでに薄暗い。それでも残っていた光で、床に鈍く光る銀色が見えた。
鍵だった。
ゆっくりしゃがんで手に取った鍵の代わりに、同じ場所に幾つか落ちた水滴が床で光って、滲んだ。

第8話

業界全体に影響を及ぼしている経済危機を乗り切るために、経営陣は各部署に必要な発令を行い、本社も各支社も新たな取り組みを実施している。

人事の取り組みとしても筆頭は人件費削減だが、新規採用は昨年から見送られており、一昨年入社の子たちも例年と比較にならないほど少ない。早期退職の勧告なども何度も各部署に通達がいっており、これ以上の削減は無理だと思っているが上からはさらに十パーセントは減らせと何度も指示が来ている。悩みどころだ。

それなのにより細かな業務は増え、一人ひとりの負担は増え続けている。それはどの部署でも厳しいものとなっており、結果バランスの取れなくなった者は体調不良で時々倒れていた。

別部署にいる今やかなり減った同期たちや入社時にお世話になった先輩たちの心身ともに疲れきった表情をあちこちで見る。もちろん人事の中でも同じことだ。

でも感情を敏感にさせ過ぎていては疲れた自分の足も止まる。状況を概観するだけにして目の前にある仕事に没頭し、こなしていくしかない。

そうして、あの嵐から三ヶ月。きつかったあの二日酔いからもコンタクトを作り直してからも三ヶ月が経った。

あれから無心で仕事に励み、ちょうどいいことに人事考課も始まって、その雑多な処理で日々が過ぎた。

そんな慌ただしい毎日の中で、またどこかの部署で体調不良者が出たようだ。

午前に行われていた会議中に倒れたその人物は数日前から調子が良くなかったとのことで、休日返上で動いている過労と睡眠不足が

要因だとは医務室のスタッフの見立てらしい。

「ほら、係長が前に二日酔いで倒れた月曜日あったじゃないですか。その時食堂で声を掛けられた課長さんが今度は倒れたんですって」

フロアを出て自販機で買った缶コーヒーを飲もうとしていた時に後を追ってきた赤堀さんから、その体調不良者についてこちらが話を振ったわけでもないのにどんどん説明されていく。

「それにしても、何度か電話で話もしてますし何度かミスした時に謝罪にも行きましたけど、程良くかっこいいですよねーやり手の営業一課の課長さん。薮田係長と年齢も近かったですよね、確か」

「さあ？」

最初に会った時に書類を見ているが、一才年上だった。――どうでもいい情報だ。

「あの時の課長の声、ほんと笑っちゃいましたよ。週末によっぽど酷い風邪でも引いたんですね。でも課長も苦笑してくださったから、私の馬鹿笑いも許してもらえましたけど。――それで、あれから何か進展あったんですか？　係長、口堅過ぎですよ」

「あのねえ、出勤の有無を聞かれただけでしょ。業務上誰でもしてる。それに恥ずかしいから二日酔いだなんて理由まで別部署の方に説明しなくていいの。次からは二度としないでね」

「だって、少しでも長く話してたいじゃないですか、かっこいい人とは。それに声も聞いてて面白かったですよう」

「赤堀さん彼氏いるでしょ」

「別物でーす。それに三十近い人のオーラっていうか雰囲気って、いいですよねー」

赤堀さんは小さな手でミルクティの缶を握りしめながら、うっとりと遠くを見るような目をした。

「係長は医務室ですって言ったら驚いた顔してましたもん。今日出勤してるか、なんて質問されるってことは何かあったに決まってますよね。いつも表情硬い課長って評判なのに、その課長にあんな反応させるんだから何か接点なきゃおかしいですよ。だから何かあったなら誰にも言いませんから、教えて下さいよう。係長に彼氏はいないかって時々私いろいろな人に確認されてて、さあどうでしょうって誤魔化してますし、これからも頑張りますからー」

勝手にしてくれていることは実は感謝したいけれど、それとこれとは別の話だ。

何度か食いさがって何事かを確認しようとする赤堀さんに溜息をつきながら、何にもないし第一接点多いのは担当のあなたでしょうと答えたが、嘘ではない。“鈴木さん”とは……少しの接点はあったけれど、鈴木課長とは接点は無い、と言い切りたい。

ホントかなあと疑いの眼でこちらを見ながら口を尖らせる赤堀さんの傍にいると、どんどん嫌な事まで思い出しそうだ。逃げるように缶コーヒーを捨ててフロアに戻ろうとした私の後ろを、赤堀さんは追いかけるでもなくついて来て一人で勝手に話していく。

「そう言えば課長はまたあの変な声になってるみたいですよ。笑えるからもう一回聞きたいなあ」

なんて体調悪い人に不謹慎ですよね、と言う言葉は聞こえているようで聞こえていなかった。

あの声。

あのしわがれた声。

懐かしいような、悔しいような、騙されたあの日に、気持ちが戻る。

数か月が経つと、暴れていた感情も少しだけ引いた。職場の人間に転んだ所を見られていた恥ずかしさも、私だと分かっていたのに初対面を装って助けの手を差し伸べられていたと分かった時の妙な悔しさも、思い返せばまだ脳が沸騰しそうな気分だけど、直後よりはましだ。

けれど、なんで私だと分かっていたのに声を掛け、しかも初めて会うかのような態を装ったのだろうと、日が経てば経つほど疑問が沸き上がってくる。

私が知っている鈴木課長は、不機嫌な表情で嫌味な口をきくしつこい人間だ。

そう思っていた。

でも私が知ったもう一人の“鈴木さん”は、適度な距離を保って私に接し、押し付けがましくも無く、親切だった。しかも“鈴木さん”からしたら、本来何度か仕事でいい思いをしなかった相手だと分かっていての行動だ。

――あの時、医務室にいた私に、何を言いに来たのだろう。どうして――泣けたんだろう。

そんな事、考えたくなかったのに。

そんな思いを振り切るように慌ただしいフロアに戻って仕事の波に乗った。

＊　＊　＊

無心で仕事をしているとどうしても時間を見忘れる。けれど経費

削減の折、そんなことは言い訳にはならない。残業になってしまった皆で声を掛け合って何とか終わらない仕事の切りをつけ、自分の席の電気を消していく。もう少しだけ、と残った同僚にお先にと声をかけて、着替えのために更衣室へ向かった。

季節はもう冬。寒がりの私にとってお気に入りのコートは手放せなくて、外に出る前から着こんでいく。マフラーを手に持ってエレベーターを降り、受付の子たちがいなくなった玄関先を通り過ぎる。外に出て、何百人という人数が働くビルを見上げるとまだあちこちの電気がついていた。残業代出ないのに、辛いわよね。より外の風が冷たく感じた。

帰宅する皆に交じりながらマフラーを巻きながら駅に向かって歩き出そうとしたら、妙に高くて鼻声のしわがれた声で呼ばれた。

「薮田さん」

聞き覚えがあるけど、あの時とはまた少し違う嗄れた声。

その声の方角に首を向けると、いつもきっちりしている黒髪をいつかのように下ろして、というか寝ぐせのように跳ねさせながら、綺麗な形の鼻を赤くして口元をグレーのマフラーでぐるぐる巻きにした、――鈴木さんがクリアな視界で見えた。

「今日なら、いつかのお礼を貰ってもいいか」

その声で言われると、断る理由は見つからなかった。

第9話

数駅動くけどいいか、と言った“鈴木さん”に軽く頷き、先を歩きだした背中を見ながらいつかの距離を保って付いて行く。

声をかけられたらどんな風に逃げようかと考えていたのに、何の抵抗も無く付いて行く自分に呆れた。それでも、あの日最初に感じた“お礼”の気持ちを掘り起こして、何とか足を動かし続けた。

騙した癖にとか、なんで今日いきなり、という言葉が喉までせり上がってきたけれど、どれも冬の寒さを理由にするかのように押し込めて、ただ黙って黒いコートの後を追った。

見知った同僚たちの顔が乗車駅で見え、混雑している各車両に乗り込む時にはその顔も段々他のサラリーマンたちに紛れていき、各駅に着くたび減っていった。そうして車内でも適度な距離を保っていた相手がちらりと視線を寄こして降車駅は次だと伝えてきた。降りる人たちに混じってまた後を追う。駅の構内から地上に出ると、ずっと黙っていた相手がしわがれた声で尋ねてきた。

「夕飯、指定していいか」

「――どうぞ」

「和食っていうのかどんなジャンルに入るのか知らないが、すぐそこだ」

軽く咳き込みながらそう言ってまた歩き出す。電灯の下ではっきり見えた目元は赤くて、今も熱があるんじゃないかと気付く。

「あの、今日会議中に倒れられたんですよね……帰られた方が、」

「この声の間じゃないと無理な気がしている」

会話を切るように重ねられた言葉にはどうにも説得力があった。

確かにこのしわがれた声でなければ、迷わず走って逃げたであろうことは想像に難くない。再び沈黙のうちに歩き出したけれど、その速度はあの時のように私にあわせているのかゆっくりだった。ライトアップされた駅前の道は明るくて、前を歩く人の少しボサボサの黒髪があちらこちらに揺れる様がよく見えたけれど、建物の影により一瞬作られる夜の闇に熱そうな白い息が見えては紛れた。

それほど歩かず着いた場所はお粥専門の店で、柔らかな雰囲気の照明が気持ちをホッとさせてくれた。相手も自分の体調を考慮してだろうか、その選択に少し安心する。

穏やかな表情の店員が課長の苗字を呼びながら通してくれたのは個室の小部屋だった。

「……予約までされてたんですか」

「ここの粥はうまいから」

答えになっていない返事をした相手は黒のコートを脱いでいき、あっという間に時々職場で見かける人になっていく。

そんな姿に何とも言えない気分になって、こちらもマフラーやコートを脱いで手元に置かれたメニューに目を落とした。

しばらくして入ってきた店員にそれぞれ注文を終え、再び沈黙が小部屋に満ちる。今更この姿の人に“お礼”？　でも騙されていたという気持ちも拭いきれない。何ともいえない気分で片付けたメニュー表や横に置いたマフラーに視線を流していると、ハンカチで口元を覆いながら抑えたような咳をした“鈴木さん”と鈴木課長が混じった人が口を開いた。

「悪かった」

思わぬ謝罪に、手持ち無沙汰にマフラーをいじっていた手が止まる。

「最初から話せば気が済むか」
「――もう、よく分かりません。とにかく私も混乱していて失礼な態度」
「最初は何を探しているんだと思った。見たことのある人事の係長が」

言葉を塞ぐように、目の前のしわがれた声があの日の説明を始めた。下を向いているのでしわがれていて時々裏返る声の相手は、私にとってはあの時の鈴木さんになった。

「セミナーを終えて加賀を追って出たつもりが、ビルの反対側に出ていた。あいつを探すのも面倒で適当先に駅まで戻ろうと思って歩いていたら見た事のある顔が見えた。さっきも言った通り、なんだろうと思ったがそうこうするうちに慌てて動いた人間はシャッターにぶつかって派手に転んでたよ」
「……そんなところから見ておられたんですか」

あの一部始終を見られていたことに部屋の温かさゆえではない理由で顔が熱くなる。伏せていた顔は余計上げられなくなった。

「爆笑した。それでもあんなことになったら女じゃなくても恥ずかしいのは分かる。でも声をかけたのは正直興味だ。お互いあまりいい印象はなかったしな」

感情をのせずに語っていく声を冷静に聞けるよう軽く奥歯をかみしめていたが、正直に言われた“興味”の言葉にかちんとくる。それでも相手は鼻声の混じった声で話を続けた。

「すぐに気付くと思ったが、こんな声だった。こちらの顔を見れば

いくらなんでも分かると思ったが、あの距離でも顔の判別ができないようだった。途中で名乗ろうと思ったが、先に名乗られて、言い訳じみているが言い出しにくくなった。それに……あの時お礼を言いだした“薮田さん”は初めて会う人間だったよ。ＩＤを持ってきた硬い表情の人事の人間でもなく、部下をフォローする怖そうな女係長でもなかったな」

「……社内の私はどんな人間に見えているんですか」

「今言った通りだ。周りの人間に聞いてみろよ」

確かに表情が硬いとは言われるが、課内では程よく笑っているつもりだ。怖いなんて心外だ。大体私より表情が硬い目の前の人間に言われたくない。少し躊躇したが、顔を上げて先ほど思った事を口にする。

「あの時はぼやけて見えませんでしたけど、あの日もそんな髪型でしたよね。そんな風に“鈴木さん”も髪を下ろしておられると、別人ですよ。若過ぎです」

「……下ろしていると年下に見られやすいんだ。短くしたらしたで学生に間違えられるから仕方無い」

反論のために出した言葉は思ったより相手にダメージを与えられたようで、先程まで俎上に乗せられた分だけ鼻で笑う。私より一つ年上のくせして若く見える事を嫌がるなどとはこちらへの嫌味か、とひがみも加算して四捨五入。

「三十路にもなられて……」

「まだ二十九」

ぶすっとした表情でお茶を飲んでいる人とのやり取りは、なんだかあの日の鈴木さんとの会話のような雰囲気になっていった。相手

もそれを感じたのか、再び軽く咳こみそうな口元をハンカチで押さえながら睨んできた。

「俺は今“薮田さん”と話してるんだぞ。あの時、敬語じゃなかっただろ」

そう言われても急に変えるのも妙だし、タイミングがつかめない。そう思っていると、頼んでいた料理が運ばれてきて中断した間に救われた。

熱過ぎることもないが口にすぐ入れることもできないお粥を見つめながら、ずっと溜めていた疑問を少し緩んだ雰囲気に流されつつ口にする。

「なんであの時、送ろうとしてくれたんですか。タクシー呼べばよかったのに」

「思い付かなかった」

「やり手の課長さんが？」

湯気の向こう側の鈴木さんは、私の質問にはまた答えずに話を続けていく。

「店に着いて待ち合わせの理由が上司からの見合い話だなんて聞いたら、面白そうだから相手の顔だけでも確認したくなるのは当然だろ。外から見たら木田がいた。まさかと思ったが木田が相手なら面倒くさそうな事になりはしないかと心配になった。目がそんなんなら、何されても抵抗しにくいだろ」

鈴木さんがお粥を口にするためにそこで話を止めた。私も、何をされても、の部分で体が固まり鈴木さんに視線を向ける。

「……どういう意味？」
「セクハラで訴えられるんじゃないか？」
「前田……」

諸悪の根源になった部長の名前を思わず唸るように呟くと、喉で笑うような音が聞こえた。人の不幸を笑う様なその態度を睨んだら、そのまま咳き込んで苦しそうな表情をしたので若干溜飲を下げる。
そうして水を飲んで落ち着いた鈴木さんは、真剣な表情で視線を合わせてきた。少し長めの沈黙に、思わず姿勢を正す。

「どうなるかと見ていたら薮田さんは空気を読まない木田にかなり引いてたし不味いと思って店に入ってヒーローよろしく救出するも、“鈴木さん”が社内の人間だと分かった“薮田さん”はキレて係長に戻り、危うい足取りで去っていった。以上だ」

他人事の話のように言い切って私から視線を外し、“鈴木さん”なのか鈴木課長なのか分からなくなった人は黙々とお粥を口にしていく。一方的な弁解なのか謝罪なのか分からない話に返事は必要なのかどうか少し考えたけれど、結局私もよく分からない感情を押し流すように黙って温かなお粥を口に入れた。

3．5話（前書き）

いきなりですが、幕間。
コンタクトを紛失してから喫茶店までの道中、あの二人は何話してたのかな～こんな感じかな、と。　読みづらいかもしれませんが、どっちが薮田で鈴木かを想像しつつお楽しみください。　ちなみに、第三話読了後にお読みください～。第九話後なら尚ベストかと。ではどうぞ。

3．5話

「今日は台風一過でいい天気になりましたね」
「――ああ、本当ですね。台風の後の風は強いですが、気持ちがいい。でも昨日の集中豪雨には参りました」
「そうでしたね。今回は地下鉄も止まるかと思いました」
「ここはいつもあんな風に降るんですか？」
「そうですね。――鈴木さんは最近越して来られたんですか？」
「ええ。と言ってももう半年になります。ゲリラ豪雨ですか、テレビで見聞きしていましたがあそこまでとは思いませんでしたよ。傘の意味が無い」
「初めて経験された方は皆さんそう言いますね」
「――薮田さんはここが地元ですか？」
「いえ。出身は隣の県です」
「そうですか」
「――――」
「――――」
「――――っ」
「急に突風が吹いてきますね。大丈夫ですか」
「す、すみません、あまりに強い風に負けてます」
「足元が見えないから余計に反応がし辛いでしょう。ゆっくり進みますから慌てずどうぞ」
「ありがとうございます」
「――暑いですね」
「そうですね」
「大通りに面していない店での待ち合わせは夏に向きませんね」
「そうかもしれません。この辺りは少し中の道に入らないとお店が無いんですよ。コンタクトだったら何の苦もなく辿り着ける予定だったんですけど……すみません」

「いいえ」
「――――」
「――次を左で良かったですか？」
「あ、このビルは銀行ですよね。そうですね、ここを左です」

3．5話（後書き）

お互い、付かず離れず踏み込まず踏み込ませずって感じでしょうか。

第１０話

食後のお茶をゆっくり頂いている間に、お粥とセットで頼んだ温野菜を目の前の人間が平らげていく。

「そんな体調なのによく食べますね」

「昼飯、食べ損ねた」

「医務室送りになるほど仕事詰まってるんですか？」

「会議中倒れるとは思わないくらい、ほどほどに忙しい」

忙しくても忙しいと思っていない返答に、この人は仕事人間だという評価を下す。まあそうでなければその年で課長は維持できないことくらい、人事にいれば分かる。大変なんだなと思いつつお茶を一口飲んだ瞬間、鈴木さんが言った。

「でも忙しくして体調を崩せば声が潰れて礼回りに来る人間がいるとも思ったな。いつまで待っても来なかったから出向かされたけど」

飲んでいたお茶が変なところに入った。咳き込む口をとりあえず手で抑えながら鞄を探ってハンカチを出して口に当てた。ひどくむせて、胸が痛い。

「俺の気持ちが分かったか。肋骨が折れるかと思うほど痛いんだぞ意外と」

苦しそうにしている私を心配することもなく黙々と野菜を口にする目の前の人間は、急に二度ほど相対したことのある鈴木課長に見えた。悔しくて軽く咳き込みながら言葉を出す。

「あや、謝っ……るために、私を、呼んだんですよね？」
「もうさっき済ませた」
大きな口で最後の野菜を一気に食べ終えた鈴木課長はお茶を飲みながらゆっくりと壁に背中をもたせかけ、少し潤ったからか軽くかすれた声で、けれど横柄な口調で言った。
「本来は三カ月前に済んだはずの話だ。もう時効だろ」
「そんな早い時効はない！　それにキレてると分かってるのに翌日に会いに来る神経が分かりません、人を騙しといて！」
「騙してない、言いそびれただけだ」
「じゃあ何であんな風に、」
何を言うつもりだ。自分の口が自分のものでないように思えて、貝のように一気に口を閉じる。なのに見開いたままの視線はどうしてか課長の目から逸らせなかった。そんな怯んだ一瞬を突いて、閉じた感情をこじ開けるかのように課長が追い込んでくる。
「あんな風に、何だろうなあ薮田さん」
少し鼻声でしかも意地悪そうに笑ったその表情に、顔をしかめる。
「――鍵を拾った後、何で泣いた」
口元に手を添えながらしわがれた低い声で問われた内容には答えたくなかった。あの場面を見られていた事に動揺したおかげで固まったままだった視線を顔ごと振り切る様に逸らして外すことはできたけど、先程までのゆっくりした時間は自分の内に戻っては来なかった。
その勢いのままテーブルの隅に置かれていた伝票と荷物を抱えて

立ち上がる。
もう食事に付き合った。これを奢ればまたいつもの接点のない職場に戻れる。もうここにはいたくない。
まとまらない思考をまとめたくはなかった。何かを掴もうとする視線から逃げる様に小部屋の引き戸に手をかけた時、立ち上がった課長が私の手を捕らえようとする腕の動きが読めた。

「触らないで！」

反射で怯えて叫んだ声に相手の動きが止まった。その隙に部屋を出て足早に出入口に向かう。この間に追いつかれることは分かっていたけれど、それでもとにかくあの場から、あの空気から離れたかった。
笑顔で対応してくれた店員に、おいしかったとお礼を言いたかったのに硬い表情のまま無言で応対をし、コートを着ながら清算を済ませて外に出る。予想通り課長は外で待ち構えていた。視線を合わせず、早口で言葉を出す。

「その節は大変お世話になりました。――鈴木さんにお礼ができて良かったです。では失礼します」
「……それが礼を言う相手への態度か」

嫌味の応酬に少し眉をしかめながら、それでもとにかくこの人から離れたくて歩きだす。ここからならもう一駅乗らなくても自宅まで歩いて帰れる距離だ。それに確か課長の自宅は反対方向だから大丈夫。――そんな情報を最初に知ってしまった自分が愚かしい。
黙々と歩く私に、駅へ行く道を過ぎても後ろから課長は付いてきた。

「――付いて来ないでください」

「こんな道を一人で帰らせれるか。少しだけでいいから止まってくれないか」
「もうすぐですから結構です。本当に付いて来ないでください」
振り返らず冷たい空気を切るように早足で歩き続ける私に痺れを切らしたのか、課長が少し距離を取りながら大股で私を追い越して目の前を立ち塞いだ。その行動に少し肩が竦んで歩みが鈍る。
「触れないから。頼むから止まってくれ」
しわがれた声が懇願するように私の行く手を塞ぐ。コートのポケットに入れたままの手とまた咳き込んで苦しそうに歪めたその表情に少し切なくなって一瞬躊躇したけれど、何もかも避けるように足を踏み出す。そんな私に鏡のように反応した課長は壁となり、完全に足を止めた私をその場に繋いだ。昔話という錆びた鎖で。
「以前薮田係長を追い詰めて怖がらせた馬鹿な男はここにはいない。見ろ。——まっすぐその目で俺を認識しろ。今はコンタクト入ってるから見えてるんだろ」
言われた台詞が数拍の後、目の前にいる鈴木課長の姿と一緒に頭に入ってくる。何を、言い出したのか、この男は。
そうか。そうですか。なるほどね。そんなこと——分かってる。身長も声も雰囲気も、あの人とはまったく違う。きちんと見分けはついている。ただ、体が、上手く反応しないだけだ。
「……本社に来て半年の人まで知ってるなんて、随分噂は広がってるようですね」
「あまりいじけた言葉を出すのは、やめとけ」

暗い夜道に繋がれた足元が揺れる様な気がして、課長に向けていた視線を道路に移す。車のライトが光っては消えて流れて行く。

「言われてやめれるようならとっくにやめてますよ」

いじける。

はっ、と鼻で笑う自分の声がどこか遠くで聞こえた気がした。

どうせ私はそうですよ、という言葉さえいじけている考えから来ていることくらい、散々育子に言われて分かってる。それでもいじけている人間に直球でその言葉を投げて、どれだけこちらが傷つくのかなんて、言っている前向きな人たちは想像していないと思う。咳で胸が痛いというくらいなら、私のこの胸の痛みだって知ったらいい。

そんな考え自体、ひねくれていて……いじけている考えだってことくらい、

コンタクトを入れているのに、あの日のように視界がぼやける。

何でこんな体調の悪い人に、お礼を言うためにご飯を食べた相手を目の前にして、こんな嫌な思いをしなければならない。どうして、追い詰められなきゃいけない。

名刺を渡して、もし次会えたら――そんなこと想像すらしなきゃよかった。

何かを期待して、返ってくる言葉はいつだって私を傷つけた。傷つく自分さえ情けなく思えて、鬱陶しかった。そんな風に悪循環に陥っていく自分にも耐えられなかった。だから何でもぼやけて見ている方が楽だったのに。もう一度会えたらなんて気楽に考えているだけで良かったのに。

目を閉じる。またコンタクトを無くして目の前の人の手を借りるなんてことになるのは嫌だ。

夜の闇の中でたった一人になったそこで少し冷静さが戻ってきたけれど、その闇が今は妙に堪える。
頬を伝っていく感覚が悔しくて、掌で押さえて拭った。
長い溜息が聞こえてきた。面倒臭い女だときっと思っているに違いない。だって、私だってこんな自分に付き合うのはもう面倒臭い。だから何も考えないようにしてきてるのに。

「なあ」

鼻をすするような音と声が暗い中から飛んでくる。何を言われるのかと身構えた。

「……そこの薬局で、風邪薬選んでくれよ」

心底、殴りたくなった。

第１１話

腹が立った勢いで走って逃げる事も出来たのに、苦しそうな声で苦しそうな表情をした病気の人間を、しかも明日以降も職場で会う可能性のある人間を放置できるほど、あっさりとした性格でない自分にまた腹が立った。一人で自分に逆切れってどうなの。

滲んだ目じりを行儀が悪いがマフラーで軽く押さえ、近くにあった閉まる寸前のお店に駆けこんで大体の症状を伝えて、店員さんに薬とドリンクを見繕ってもらう。念のため熱を計った方がいいと耳で計る体温計を貸してもらい少しぐったりしてきた鈴木課長の体温を計ると、三十八度を越えていた。これだけ寒がっているのは熱が上がっている最中らしい。

慌てて薬をその場で飲ませて、これで熱が下がらなかったら明日には病院に行った方がいいですよと助言を貰い、お礼を言って店を後にした。

そうして、困ったことになる。

「鈴木課長？　しっかりしてください。家に帰れますか」

「帰れる」

「ちょっと、そこに座らないでください。ああ、もう鞄をその辺に放置しないで！　危ないでしょう！　――あと少しでうちのマンションですから、そこまで頑張って歩いてください」

「……お前は馬鹿か」

頭を垂れてぐったりして動けなくなっている人間に言われたくはない。

このままタクシーを呼んで押し込んでも良かったのに、どうしてそんな言葉を出したんだろう。いや、きっとこれだけよろよろしている人間を異性だなんて思えないからだ。きっと、そう。

「私の前の彼氏のせいで、妙なトラウマになってることをご存じなんでしょう。そのことを知ってなお、寝る場所を提供する私にそんな体調の鈴木課長が出来ることって何かありますか。社会的に抹殺されてもいいほど、何かメリットありますか？」
「……男の根性、見せてやるか？」
「ここで朽ちて死んでください」

冗談でもそんな事を口にする人間は見捨てる事に決めた。わざわざ手を貸すつもりもない。
座りこんだままの鈴木課長を置いて自宅へと歩きだした。

＊　＊　＊

「本当によく課長に昇進できましたね」

六畳二間の片方の部屋に置いてあった客用布団を引いて、部屋の入口で座り込んでいた鈴木課長に声をかける。
結局のろのろと立ちあがってゆっくりとだが歩いて付いてきた人間を放置できず、いつかの逆のように少し前を歩いて誘導して、結局自分のマンションに招き入れてしまった。これは緊急事態で、病人で、仕方がなくて、と弁解がましい考えで自らを言い含めた。
だるそうにコートを脱ぎ背広も脱ごうとしたけど力が入らないのか変な格好で止まった課長に、溜息をつきながら袖口を引っ張って脱がせる。両方ともハンガーを通して部屋の隅に吊った。どうしてここまでしなければならないのか。
「パジャマは多分これで大丈夫だと思います。一旦出ますから自分

で着替えて下さいね。じゃなきゃ救急車呼びますから。大事になりますよ」

そう言ってまた固まりかけた課長を放置してドアを閉める。まったく。

「謝罪にも何もなってないわよね、これ」

そう呟いて、玄関にバラバラと放置された靴と鞄をまとめて台所の隅に置き、とりあえずメイクは落としたくて風呂場で顔を洗った。

もういい頃だろうと課長を置いた部屋にノックして入ると、何とか着替えを終えた課長は布団の上で寒そうに転がっていた。こうなると嫌味ったらしい人間も課長という肩書も形無しだ。少し鼻で笑ってしまった。

「……笑うな。寒い」

「泊めてあげてる人間にそんな事言う口が続くようなら追い出しますからね」

布団を何枚か被せてジェル状の氷枕を置き、スポーツドリンクを横に置いた。

「頑張って汗かいて熱を出しきって下さいね。運動している体なら回復も早いでしょう。三十路じゃないんですよね」

何かを言いたそうに眉をひそめているけど、熱で苦し過ぎる表情かもしれない。流石にこういう時にあまり追い詰めるのも人でなしか。氷水で濡らしたタオルを額に置くと少し表情が和らいだ。

そんな表情に思わずまじまじ顔を見ると、前髪を下ろした鈴木課長は本当に若くみえる。得だわね。肌もきれいだし。ちょっと髭が

生えてきてるけど。
写メでも撮って何かの時の脅しとして使ってやろうかと思ったけれど、そろそろ犯罪の域になるかと苦笑しながら部屋を出た。

＊　＊　＊

ガタ、という音で目が覚めた。隣の部屋で寝ている課長が起きたのかもしれない。様子を見ようとベッドから起き上がるとベッドの下にいた存在が私を制した。そうして立ち上がった大柄の人間は隣の部屋のドアを軽くノックした後、寝起きで余計低くなった声で呼び掛けつつドアを開けた。

「起きたのか？」
「……ああ、すまなかった」
「課長さん、もう着替えて大丈夫なの」
「帰る。薮田、係長によろしく伝えてくれ」
「聞こえてると思うけど、寝起きだから悪いね」
「いや、こちらこそすまなかった。またお二人には礼をさせてもらう」

出そびれた私は男二人の会話に耳を澄ませていたけれど、静かに出て行った足音を確認してから、玄関の鍵を閉めた弟の貞広（さだひろ）に声をかけた。

「こんな早く帰るとは思わなかった。まだ五時だし。ていうかあれだけ熱出てたのによく起きれるわね」
「仕事もってりゃ熱ごときじゃ休めないだろ、課長って役職は。でも顔は青ざめてたから万全じゃないだろうな。それより姉ちゃん、

課長さん誤解したよなあ。聞かれなかったからオレも言う気は無かったけど。まあこんな状況で彼氏と思しき男には直接聞けないだろうけどさ、理由があったとしても修羅場だし。それでもオレに理由も何も言わず出て行くってのもなかなか大胆な人だね」

大あくびをして伸びをした身長百九十センチの弟は大学四年生で、超氷河期の就職難を何とか乗り越えて内定をもらい、いまは少し離れた実家に帰って来ている。あれから携帯で呼び出してすぐ車を走らせて来てくれた弟はこういう時にいいボディガードだ。この存在が無ければたとえ熱を出している人間だとしても男性を泊らせる気は無い。

「誤解も何も、相手がそういう気持ちを持ってないのに誤解なんてできない話でしょ。――もう少し寝る。貞広はどうする？」

「んー、もう起きたからこのまま帰るよ」

「悪かったわね。今度奢るから」

じゃあブランドのスーツね、などと今回のボディガードのバイト代にしては破格の値段のものをよこせと笑う弟の背中を叩いて追い出した。

鍵を再度閉じた後、先ほどまで課長が寝ていた部屋の扉を開ける。きちんとたたまれた布団。片付けられた氷枕やタオル。スポーツドリンクとたまに防犯用で干すために持っていた弟の古いパジャマだけが部屋から消えていた。あまりに整えられていたので先ほどまで誰かがここにいた気配があまりしない。でも――いつもの自分の部屋ではない匂いが交じっている。

布団の横にしゃがんで、そのまま倒れて布団を沈める。ふとメモ紙に包まれた何かが目に入った。妙な体勢で寝転びながらそれを広げると、折りたたまれた一万円札と「ありがとう　汗をかいたから洗って返す」という律儀な文章。

あくびが出て目尻に涙が滲む。それは思ったより滲んで、頬を伝って布団にしみた。

第１２話

課長が寝ていた布団の上でいつの間にか寝てしまった。
それでもいつもどおりの時間に体は起きて、少し寝不足の頭をコーヒーで叩き起こしながらぼさぼさに広がった髪を軽くワックスで抑えつつシュシュで一つにまとめ、いつものように軽い朝食を取ってから職場に向かう。今日は金曜、明日は公休だからゆっくり寝なおそう。
朝礼に日常業務、その他の処理を行っていたら珍しく通常の時間に昼食を食べる事が出来なかった。午後になって随分経過した後やっと食堂に行き、まばらにいた人たちと一緒に残り物のようなランチを食べ終える。
昨日のお粥はおいしかったな、と食後のお茶を飲みながらぼんやり窓の外を見て思い出す。ついでだ、一緒にいた人間の事も思い出してあげよう。あまり回復しないまま家を出て行ったようだけれど、今日は本当に出社しているんだろうか。買った薬は効いているのだろうか。
……もう、お礼もしたのだから関係ない人になったはずなのに、こうして振り返ってしまうのが何だか未練の様で――未練？　何それ。あーもう、やめたやめた。考えるの、やめー。
ガタンとわざと大きな音をたてて立ちあがり、トレーと食器を所定の位置に片付けていると、誰かが電話をしながら食堂に入ってきた。
誰か、じゃない。分かってる。このしわがれた鼻声は、鈴木課長だ。私と話す時よりもっと硬い声で電話の相手と業務上のやりとりを続けている彼は私に気付いて一瞥したけれど、何の表情も変えることなく食券を買ってカウンターに出していた。少し長めの髪を後ろにきちんと撫でつけてカウンターに寄りかかって電話を続けているその背中は、随分と疲れているように見えた。

――なに目で追ってんの。
また自分にムカっときて食堂を出る。誰も追ってくるはずは無いのに、急いでエレベーターのボタンを押した。

＊　＊　＊

少しの残業を終えた後急いで携帯を持ってフロアを出、誰もいないことを確認した休憩室に入り、何度も入っていた着信履歴にかけなおす。育子だった。向こうだってこの時間は残業中のはずなのに、何度もかけてくるなんて珍しい。何かあったのかと少し気が焦る。

「――もしもし、ごめん出れなくて、どした？」

名乗らなくても分かっているだろうから繋がったことを確認して即用件を訊ねた。でも、声が聞こえて来ない。もしもーし、と電波の繋がりが悪いのだろうかと訝りながら何度か声をかけていると、……ちょっと、これ。

「育子っ、あんた何爆笑してんの！」
「っ、っ、くるし……たすけっ、ぶは！！」

電話口の向こう側の育子は声を出せないくらい抱腹絶倒しているようだ。こうなったらしばらく育子は止まらない。呆れて電話を一旦切る。
苛々しながらしばらく待つと、また折り返しかかってきた。
「――育子、仕事中でしょ？　いい加減にしなさいよ」
「それっは、こっちの台詞。あー……笑ったあ。貞広クン、妙なこ

とに巻き込まれたらしいね、ぶっは」

携帯マイクのすぐそばで吹き出されると耳が痛い。携帯を耳から離して笑い声が治まるのをしばらく待つ。貞広……なんで育子にばらしてるんだ。と思っても仕方が無い。この二人は昔から妙に意気投合していて、私をネタに裏で遊んでいるのだから。

「聞いたわよー、課長お・と・ま・り」

「分かっててそういう言い方するなら切る。貞広いたの知ってるんだからやめてよ」

「いやー、それにしてもどうして体調不良の人間と、しかもあれだけくだ巻いてた相手を家に連れ込むなんて真似」

最後の台詞に頭のどこかで何かが切れる音がした。同じく勢いよく通話を切って休憩室から出る。どう考えても育子は遊んでる。もう絶交だ絶交！

何度か鳴っている携帯をそのままに更衣室に入り、着替えながらシュシュを外してコートの外に髪を出す。その上から首にゆるく薄いピンクと焦げ茶ミックスのマフラーを結んで職場を出る。冬の夕方もとうに過ぎた時間は真っ暗闇だ。あちこちのビルは電気がまだ煌々とついていて、夜空が見えにくい分ビジネス街に輝く星のようにも見えた。

ピークを過ぎた人波と共に駅に向かう。地下道に入ると真っ暗闇の地上とは異なり仕事帰りや学校帰りの人たちのざわめきと人工的な明かりで満ちていた。

今何時なのか忘れるような明るさの中、少しだけ照明を落としたカフェに入り、最近お気に入りのチョコラテを注文した。通路に面したガラス側に一人用の席が空いたので、少し混雑する店の中を移動して腰掛ける。

マフラーを外して少し静電気のおきかけた髪を手ぐしで抑え、甘

いチョコラテを一口飲んだ後、鞄から携帯を取り出して何度も何度も鳴らしてきている相手にざわめきの中かけ直す。努めて冷たい声を意識しながら。

「――それで、何」

「ごめんごめん。随分な進歩だと思って、感動してた」

「感動して爆笑っておかしくない？」

「あーワッコがおかしかったんだって、今まで」

「話を擦り変えないで。貞広から聞いてるんでしょ、課長が行き倒れそうになったからしょうがなく泊めたのよ」

聞いたけど、と言いながら咳き込む育子にはもう呆れて溜息しか返せない。それにしてもそもそもさあ、と笑い過ぎておかしくなった喉で育子が続けた。

「なんで行き倒れそうな課長と一緒にいたわけ」

「……ただの“お礼”よ、“お礼”。今日しかないって言うからご飯奢っただけ」

「あれだけ恥ずかしい思いしたって怒ってたのに、よく“鈴木さん”と向き合う気になったね」

あの声だったから、などという自分の気持ちは妙に恥ずかしくて言う気になれない。仕方無くだから、と言っても育子は納得しなかった。これは嫌な展開だ。

「じゃあ方向変える。ご飯食べてどうだった？」

「何でそんな事聞くの」

「あれだけ怒りまくってた人間と二人でご飯食べた話なんて、聞きたくなるに決まってるよ。ワッココそなんでいちいち言い渋ってんの？　“鈴木さん”のこと嫌だったんならいつものようにはっきり

話してくはずなのに。――ワッコがこれで切るならもう私から電話しないけど……鈴木課長さんは想像してたような人じゃなかったんでしょ。いい人だったんでしょ？　それで、ご飯食べ終わった後のワッコの気持ちはどうなったの」

あくまで私の感情を絞り出したい育子の言葉に、通話を切りたくなる。でもこの機会を逃したら何もまた考えずに日々を過ごすし、育子も話題には出してこない。またいつもの日常が返ってくるだけ。

それを願っていたはずなのに。

ほんの少し周りの喧騒に耳を傾けた後、俯いてゆるくウェーブのかかった髪の先をいじりながら口を開く。

「――ただの嫌味なだけの人間じゃないってことは分かったわよ。声が……あの時みたいに変な声だったし、“鈴木さん”と話してるみたいだった」

「傍にいて嫌な感じした？」

「……なんですぐそっちの話に行くの」

前の彼氏の時のトラウマ話は育子ももちろん知っている。男性恐怖症とまでは行かないが、急に傍に来られると体が震える。あれから三年も経っているのに未だに反応する体は、今でも自分があの場所で止まっているような気分にさせられて余計気分が悪い。もう忘れたいのに。

あれから、次の人を作りたいなんて気持ちにもならなかったし、育子も私の色々な拒否反応を分かっていて誰かを勧めるような話もしてこなかった。

だから“鈴木さん”が傍にいた時にはどうだったかと問う質問すら、聞きたくなかったのに。

「大事な事だから。“鈴木さん”は最初親切ないい人だったんでし

ょ。ワッコがタクシー呼びたくないくらい。だから“お礼”のために連絡くれた“鈴木さん”と――鈴木課長とご飯食べようって思えたんでしょ」

育子の言葉はまっすぐ届いてきた。チョコラテを飲んだからということを理由にするには熱さは随分失せていたけれど、内側から温まるかのようにゆっくり顔が赤くなるのが分かった。誰ともなく言い訳をしたくなりながら、熱さが少し引いたチョコラテを再び口にする。甘さは先ほどと変わらないはずなのに、妙に甘ったるく感じた。

“鈴木さん”は、いい人で、もう少し話をしていたくて、お礼でもう一回会ってもいいかなと思える人で、――会いに来たと分かった時、食事くらいしてもいいと、食事をしてみたいと思った。

もう少し、もう少しだけ、鈴木――課長と。

胸が苦しい。心拍数が上がる。育子の問いには答えられない。

「――黙ってるってことは」

「もう言わないで」

「分かった。……結果報告、聞きたいんだけど？」

一気に恋愛に結び付けるような育子の思考パターンは待ったをかけたい。何でこう、焦らせるような言葉を言うかな。

まだそんなんじゃないから。気に……そう、他の人と比べれば気になる人っていうくらいだから。付き合う付き合わないとかの話じゃないから。

「そう言う話じゃないから。展開、早過ぎだから」

「遅いくらい」

呆れるような溜息を吐きだしながら言う育子と、しばらく早い遅

いだのどうでもいい言葉をお互い繰り返し、育子の残業の愚痴を少し聞いて、笑って電話を切る。
育子の恋愛好奇心には参る。
そう思いつつも、その押しの強さが無ければここまで自分を追い込まないくせにね、と口を尖らせながら甘ったるいチョコラテの残りを楽しむ。
そうして口の中の甘さを頭にも流して、ほんの少しだけ自分の気持ちの甘さも前進させようか～なんてね、と自分で自分に妙な突っ込みをしながら口角を上げていたら、私のいる場所のガラスを外から意図的に叩く音がした。
少し訝しげな視線を送って、溶けているはずのチョコレートが口の中で固まる思いがした。
そこに立っている昨日に引き続き体調の悪そうな人の姿には、通話をブチっと切って相手との関係を遮断するようにこの空間も切り取りたくなった。

展開、早過ぎだから！　遅くていいから！

第１３話

別に慌てることは無い。復習しよう。
昨夜は泊めただけ。しかも早朝は弟に会ってきっと誤解している。だから、彼氏持ちと見えた私に、この人が接触してくる理由なんて、無い、はず。なんだけど。
動揺して思わず合った目をゆっくり逸らして、知らぬ振りをする。それが意味の無い事くらい、分かってる。
もう一度ゴンゴンと強めに叩く音に、周囲の人も何事だろうかと興味の視線を送ってきている。居づらい。叩いている本人は恥ずかしくないのか。そんなボロボロの髪のまま職場から歩いてきたのだろうか。
下ろしている髪の下から覗く黒い眼は、また熱が出てきたのか少しぼーっとしていて……妙な色気を振り撒かないでー！　ただでさえ！　――ただでさえ何だって言うの！？
叫びたいような何かを吐き出したいような気持ちになって俯きながら立ちあがり、周囲の視線を振り切るように飲み終わったカップをゴミ箱に捨てて混雑する店内から出る。
トンと押せば倒れそうな雰囲気で立ちつくしている鈴木課長に近づくと、体内に籠った熱を出すかのようにゆっくり彼が口を開く。

「昨日、は」
「あの、とりあえずここから移動したいです。目立ってるんです」
目を瞬かせている課長に対して、横のガラスに目だけ動かして何から目立っているのかを知らせる。同じように目だけ動かしてカフェを見た課長がニヤリと笑った。店内のガラス付近にいる女性たちのどよめく声がここまで聞こえた。

「どんな男女に見えてるんだろうな」
「いいからっ、進んでください！　この店気に入ってるんですから！」
「じゃあ俺もコーヒーでも」
「先に行きますねっ」

くだらない事で会話を続けて動こうとしない人を追い越して駅に向かって若干大股で歩き出す。
何で、何で少しだけ考えてみようなんて思った矢先に、当の本人に目の前に来られなきゃいけないの。まだ、何もまとまってない！
駅近くになって地下道に入り込んでくる風が冷たい。慌ててマフラーを巻いていると、後ろから引っ張られたのが分かる。ぎゃーと叫びたい気持ちを抑えながら足を止めて振り返ると、すぐ後ろに赤い鼻をした課長がいて、昨日よりも酷くなった鼻声が聞こえてきた。

「どこ行くつもりだ」
「うちに帰るんです、マフラー離して下さい」
「だめ」

巻いたままのマフラーの長さではいつもの距離よりも近いし、課長の子供のような甘えた言い方に、先ほど自覚したばかりの胸の苦しさが戻ってくる。
だから、早いってば。
何が早いのか、と説明をしようとする自分の思考を止める。まだ、何も考えてないのに。一回巻いただけのマフラーを掴まれていない方の端から外して、一歩下がる。
そんなに長くないマフラーの端をお互い持っているから、マフラーはゆるく弧を描いて吹き込んでくる風に揺られている。人の行き交う地下道で何をしたいんだろう、私は。そして課長も。

「昨日はありがとう。助かった」
「……いえ。それよりあんなお金、いただけません。どういうつもりですか」

そうだった。お礼にしても泊めただけで一万円なんて、どんな相場だ。それに金額が多いとあとでそれを担保に何かを要求されそうで嫌だ、と思っていたら、

「そのお金でさ……バイトしないか」
「――は？」

予想通りの返事が来すぎて、思考が止まった。
バイト。雇用者は課長で、私が労働者。ってそうじゃなく。

「今すぐ返します、そのためにお金を置いて行ったんですか、馬鹿じゃないですか？」

何のバイトか知らないけど今の仕事だけで精一杯だし、妙なことに巻き込まれるのは嫌だ。鞄からお財布を探して今すぐ突き返す。そう思って鞄を広げようとするのと同時に、課長の制止させるような掌がこちらに向けられる。

「いや、言葉を間違えた。待て待て待て」

マフラーの端をもった手を自分の額に当てて悩むような仕草をする課長を見つめる。弧を描いていたマフラーは引っ張られてたるみが無くなる。待て、と言われて従順に待つ私も、一体なんだろう。
そのーなんだ、と聞こえたかと思えば後はごにょごにょと呟いている課長の声は私の後ろから流れてくる風と周囲のざわめきで聞こえにくかった。

「何を言っているのか、聞こえません。それにこの状態は一体何したい」

んですか、という語尾に重ねるように、課長が風に負けないような勢いで言葉を投げてきた。

「うちに来てご飯作ってくれないか」

ご飯を作る。……それは先ほどのバイトしろ、と同義語では？

呆れて何故持ち続けていたのか自分でも分からないマフラーの端を手放す。この冬に買ったばかりのお気に入りだったけど、もういい。静かに地下道に落ちたピンク色は風に吹かれて課長の足元に流れていった。

こんな公衆の地下道でマフラーの両端をもって何のプレイだ。大の大人が！

課長も自分の発言に当惑しているのか妙に不思議そうな顔をしているけれど、そんな事は見て見ぬ振りをして足早に駅に向かう。首が寒いけど冷静になるにはちょうどいい。

私も私だ。育子に妙な事を吹きこまれて頭の中がそちらの方向（どっちだ）にしか考えられなくなったように思ったけど、私らしくない。大股で歩いていると段々思考が冴えてくる。

人事は何事も多方面から判断する必要がある。一つの材料だけで人を見ていたら、偏る。偏狭な物の見方は公平さに影響し、公平さが失われると信頼を失う。信頼を失えば、内側から崩れるのだ、会社というものは。

そう、だからこれまでの半年に見聞きしたことで課長がどんな人なのかを判断すればいい。“鈴木さん”と鈴木課長の両方を見ているのだから。

最初に戻ろう。出会った時の鈴木課長について考えよう。
そう！　短気だった。無表情で、不機嫌そうで、いかにも緊張してますって面持ちだった。営業一課は本社営業部の中でも大きなプロジェクトを任される部署だ。そこの課長に支社から抜擢されるのは栄転とは言え、重圧もあったのだろう。
仕事に関しても、他の課長たちとは違って早めに書類を回してくれるし、記入ミスも少ない。こちらのミスにも厳しいけれど、自分のミスにも厳しい人だということはやり取りしていれば分かる。失敗に対して嫌味を言われるのには辟易したけど、過ぎた日の失敗を掘り返して嫌味を言われることはなかった。他の一部の上司たちのように怒鳴り散らすこともない。それに部下たちや同僚との関係も特に荒れた話は聞こえてこない。妙な話も聞かないし。女子社員から秋波を送られている事はよく聞くけど。
……。
き、昨日の課長！　昨日の課長は、熱を出しているのにいきなり人の前に出てきて、大人しく帰って寝ればいいのにご飯を食べに行くと言って自分の家とは反対方向のお店に来て、謝罪してあの日の状況を話し出した。
職場で見た事のある私の挙動不審ぶりを見て興味を抱き、近寄って声をかけたものの私が課長の事を判別しなかったから何となく言い出しにくくなって、しかも私がお礼なんて言い出して名刺を差し出したから余計言い出しにくくなったし、職場の私とは随分違う人間に見えたと。しかも見合いだと聞いて面白がって覗き見したらセクハラ疑惑の人間が相手だったのでカッコつけて飛び込んできて、正体を自ら公表。キレた私に翌日謝罪しようとするも上手くいかなかったと。
だから体調悪くするくらい仕事をして声がかれれば、私と話せると、目論んでいた、と。
……。
あああ謝ってるはずなのに、随分横柄だった！　人の泣き顔見と

いて、理由を聞き出そうとするし！　何で泣いたのかなんて、普通直球で聞いてくる！？

……大体何で鍵置いた後も近くにいたのよ。何で、最初に私だと分かってて親切にし続けたのよ。何で。

今だって、体調悪いのに、家に来てご飯作れだなんて、私に。

ただ同じ職場というだけの繋がりの人間に、言うの。

――ただの同僚じゃなきゃ、私の事、どう思っているってこと？

いつの間にか改札口まで辿り着いていた。

首も冷たいけれど、手も冷たい。育子からの電話に苛々していたせいか、手袋をロッカーに置き忘れてきたことに今気付く。

そうしてはっきりした意識が自分自身に声をかける。

さっき聞いたばかりの育子の追い詰めるような言葉が、今度は自分の内側から響きだしていた。

――傍にいて嫌な感じ、した？

定期カードを出すために鞄に伸ばしていた手が止まる。冷たい指先をぎゅっと握って、行きどころのない感情をこめてコートのポケットに突っ込んで、そうして。

止めていた足を動かす。

振り返っても、そこにはいない――――鈴木課長の元に引き返すために、改札口を背にして。

第１４話

一度改札口まで行ったのに、引き返す私はちょっとどうかしてると思う。

でもそれ以上に。

熱があるだろうに寒い地下道の先程別れたところと同じ場所で、ショーケースの中のポスターをぼうっとした目で見て立ちつくしているこの人も、どうかしていると思う。

「――課長、私のマフラー返して下さい」

数歩離れた所で足を止めて声をかける。コートのポケットに手を入れたまま、鈴木課長がゆっくり横を向いた。相変わらず寝ぐせのように跳ねた髪と体調の悪そうな表情をしているけれど、目に力が入ったような気がした。

「置いてったから、いらないのかと思った」

もごもごと言うその声は周りの騒々しさと相まって手も届かないこの距離では随分聞こえづらい。それに。

「どうぞ？」

持っていけば？　と言わんばかりにポケットに手を入れたまま私に一歩近づく。なんで、なんで、

「私のマフラー、二重に巻かないでください！　早く外してこちらに投げてくだされば いいですからっ」

鈴木課長は自分のグレーのマフラーの上に私のピンクと焦げ茶のマフラーを巻いて、随分もこもこな体裁になっている。そんな風にぐるぐる巻きにされていたら、近づかないと取れない。

「寒くて手を出したくない。風邪引いてる人間に随分不親切だな。あの時、俺は困ってる人に親切にしたのに」

少し咳き込みながらしわがれた声がまたもごもごと言った。口元まで覆っているマフラーたちのおかげで表情はよく見えないけれど、嫌味ったらしい表情をしているに違いない。だったら。

「そうですね。じゃあどうしてそんな感謝心のない不親切な人間に鈴木課長は、ご飯作ってなんておねだり、されたんでしょうね？」

じりじりと一歩ずつ近づいて来ていた鈴木課長に、一歩ずつ引きながら笑顔で言葉を投げる。さあ、何て返す？

これで正直に課長が答えたら……と思うけど、きっとまともな返事は無いだろう。

だって。

一拍の間に目を見開いた鈴木課長が、咳き込むように笑いながらいつかのように体をクの字に曲げた。そうして体をゆっくり起こす。乱れた黒髪が、笑って細くなった目の上を流れた。

「さあ、どうしてだろうな？」

やはりまともな返事を返してくることは無く、視線を合わせた後すぐ外される。ダルそうに歩きだしてきたので距離を取ろうと横に避けても、私に向かっては来なかった。

「ちょっと、課長」

「ご飯は冷凍してあるけど、他には野菜も肉も何も無い。買い出しするならそこのデパ地下か？」

そう言って先を歩き出している課長の後ろ姿を一瞬唖然として見つめる。そうか、そうくるか。

ならばと、足音を周りの喧騒に紛らせながら後を付いて行き、鈴木課長の首元に手を伸ばす。この端さえ掴めれば。

ピンクのそれに触れそうな瞬間、黒髪が翻って足を止めた。自分の伸ばした手が熱のある鈴木課長の頬に触れそうになったことに驚いて、勢いよく引っ込めてもう一方の手で握りしめる。

「――こんな体調の人間が出来ることと言えば、温かいものでも食べて寝るだけだろ。折角本社に来たのに、こんな短期間で社会的に抹殺されたくないしな。それに、マフラー取りに来た人間に何にもしないっていう課長に昇進した男の根性、見せてやるよ」

しわがれた声は最後にくしゃみをして、また歩き出した。改札口とは別方向の通路に向かうつもりなのだろう、混雑する地下道を斜めに横切り始めた。

男の何もしないという言葉はたとえ体調が悪いように見える人間だとしても信用しない方がいい。常識だ。

分かってるのに。

まともな答えを出さないし言わない相手の背中を見つめながら、私も歩きだす。

卵と白菜を買おうなどと考えながら、お気に入りのマフラーの後を追う自分がいた。

＊　＊　＊

「……お邪魔します」
「どうぞ」

妙な事になった。冷静になってもよく分からない。勢いにしても、なんで鈴木課長のマンションになんて来ちゃったんだろう。

しかも、私の２ＤＫのマンションより新しくて広い。一人暮らしに３ＬＤＫ？　課長って、そんなに給料いいの？　今度経理に確かめてやる。

そんなくだらないことで思考を一杯にして余計な事を考えず、家具の少ないリビングを通り過ぎて買い込んで来た野菜たちをそこそこ綺麗にしてあるキッチンに広げる。

課長は寒い室内を暖めるためにエアコンの暖房を入れて自分の寝室にフラフラとした足取りで消えて行った。電車を降りてからは堪えていた咳を遠慮しなくなったのか、ゴホゴホと喉を唸らせていたから夜になってまた熱が上がりだしているのだろう。

そんな背中を見送って後悔しても仕方無い。もうここまで来てしまったのだ。とにかく……ご飯を作ってマフラーを返してもらって、帰ろう。男の根性を見せてもらおうじゃないの。

と、どこか喧嘩を買う様な気分で、バタバタと音をたてながらキッチンの上下の扉を開けて鍋や包丁を探し当てる。ご飯は冷凍、と言っていたから冷蔵庫を開けなければ何も始まらない。開けますよ、と聞こえているのか聞こえていないのかも構わず言って開けると、ガランとした冷凍庫にご飯の入ったタッパーが三つ。……ご飯を冷凍するなんて主婦の小技、誰に仕込まれたのだろう。

誰だと訝しむ考えに頭を振る。べ、別に誰だって構わないじゃない、私が気にすることじゃないし。私まで熱でもうつされた？

ここに来たそもそもの目的は、と自分を叱咤してとにかく温まる物をといつも自分が風邪の時に食べるお粥を作り出す。

買い出しの時から先ほどの「お邪魔します」まで、ずっと言葉は

交わしていない。キッチンに私が籠っている間も、灰色の部屋着に着替えた課長は一言も発さず、ぼうっとした動きで寝室と洗面所らしき場所を出入りしていた。

しばらくはそんな動きを意識しながら野菜を切っていたけれど、いつの間にかお粥作りや喉にいい飲み物作りに意識は向いていた。やっとひと段落ついた頃、静か過ぎるリビングの向こうが気になった。

まさかとは思いつつ、課長ーできましたけど、と声をかける。部屋は少し暖まってベランダから室外機の回る音が聞こえてくるけれど、それ以外の音は何も聞こえて来ない。

昨日と同様嫌な予感がして、課長が消えた寝室にそろそろと近づく。少しだけ開いていたドアの向こう側は電気が消えていて真っ暗だ。何も見えない。

男の根性見せてるなら、このドアを開けても倒れてるだけだよね？　いきなり……襲われるとか何とかそんなことは。

自分で想像して動揺しつつもそっとドアを開けると、暗かった寝室にリビングの明かりが壁に当たってスーツが無造作に並んでいるのが見えた。その下にあるもこもこの布団とベッド。

「……薬も飲まずに寝てどうするんですか……」

第１５話

妙な想像をした自分は馬鹿だ。恥ずかしくて帰りたい。
でも折角作ってやったのに、食べずに寝るとはどういう了見だ。
仕方なしに手探りで寝室の電気をつけた。もこもこの布団の下から咳が聞こえてくる。
そんな様子に溜息をつきながらキッチンに引き返して準備していたショウガ蜂蜜湯を手に寝室に戻り、一瞬躊躇したけれど思い切ってベッドに近づく。この咳にはもう我慢がならない。

「料理を作らされて食べなかった挙句に風邪をうつされるんじゃ困ります。――課長、起きてとりあえずこれ飲んでください」

布団から少しだけ覗いていた黒髪に声をかけると、いらないもう起き上がれない、というしわがれた返事。
あのねえ。

「子供じゃないんですから、飲む物飲んで食べる物食べてから寝て下さい。長引かせたくないんでしょう。週明けの仕事に響かせたくないなら、課長としての根性見せたらどうです」

煽るだけ煽って動かなければ本当に放置して帰る。
そう思っていたら亀のような動きで布団から課長が顔を出した。
あーあ、苦しそう。ちょっと可哀想になってきた。弟も風邪の時こんな感じにグズグズ言ってたなあ、などと思ったらもう駄目だった。
一緒に持ってきたタオルで額の汗を少し拭い、肘をついて上半身を起こし始めた課長の背中にその辺にあったクッションなのか丸めた何かなのか分からないものを当てる。ダルそうに伸ばしてきた手にカップを渡し、もう一度キッチンに行き、鍋から器に少し移した

お粥とスポーツドリンクを持って寝室に入ると、何とか上半身を起こしきった課長からぼそりと問われる。

「これ……何」

「ショウガと蜂蜜を溶かした飲み物です。少しは喉に効きます。はい、今度はお粥。少しでもいいので食べれるだけ食べた方がいいですよ。それで薬飲んで、とにかく寝て下さい」

奇跡的に食器棚にあったレンゲを器の中でくるくる踊らせてから渡すと、課長はいただきますと言って軽く頭を下げた。

頭痛も酷いのだろう、眉間にしわを寄せてむせるように食べる姿は哀れな病人だ。流石にこれは笑い飛ばせなくなってきた。大丈夫かなあと思いながらキッチンに戻り、もう一度冷凍庫の中を確認する。お菓子か何かを冷やすためについてきたのであろう小さな保冷剤が二個。あの感じじゃ足りないだろうなと思いつつそれを持って再び寝室に入ると、少しのお粥を食べ終わった課長が枕元に置いた薬をスポーツドリンクで飲んでいた。

「おかわり欲しいですか？」

「いらない……」

倒れこむように布団に戻っていく課長の額に、ハンカチで巻いた保冷剤を当てる。ええい、ついでだ。右側の脇に保冷剤を突っ込み布団をかぶせた。

深い深呼吸が一つ。悪い、と呟いた後は苦しそうな息の他は何も聞こえて来なくなったので、これ以上ここにいても意味は無い。電気を消して寝室を出る。

……こうなったら、やるだけやるか……。

久々に出てきたあの記号をリビングの床に落としながら、介護の金曜の夜は過ぎていった。

翌朝のリビングのソファで迎えた休日の土曜日。エアコンを入れたままだったけれどやはり少し寒くて目が覚めた。それに体も妙な体勢で寝ただけはある、痛い。

持ち出してきていた毛布を畳んでソファに置き、軽く身支度を整えてから静かな寝室に少し視線を送る。もう一度様子を見ようと思ったけれど踵を返してリビングを出、音が立たないようにそっと玄関の扉を開ける。鍵をドアのポストに投げ込んで鳴った大きめの音に、口を一文字に引き締めつつも足早にその場を立ち去った。ちょっと寝不足だ。外の寒さが余計身にしみる。

もう、何が何だか。取り返したお気に入りのマフラーを首に巻きながら駅に向かって歩き出す。

育子と話していた時には派手に動いていた心臓も、今は平静そのものだ。

やっぱり考えても何も答えは出ないし、相手も答えを出さなかった。まあ出せるような体調でもなかったか。

ただ、あの部屋に入っても、彼の傍に行っても、熱で汗ばんだ額に触れても――嫌な感じはしなかった。

なんだ、私、もうトラウマから脱却していたのかもしれない。彼だから大丈夫だったとか難しいことを考えるのはやめよう。気にし過ぎて疲れるのはもう沢山だ。

電車に揺られてるうちに眠気が襲ってくる。なんとか脳に信号を送って自宅のマンションのドアを開けて、倒れるようにベッドに潜り込んで何も考えずに意識を閉じた。

＊　＊　＊

忙しい年末も終わり、年も明けて、お気に入りだったピンクのマ

フラーの出番もそろそろ無くなってきた春をまた迎えた。
そうして人事が一番忙しくなる時期を越えている最中だ。
今年は新卒を少人数だけど採用することになり、新人教育のプログラムも組まれ、システムの運用方法や社内規範の教育を担当することになった。もちろん業務に直結する話ではないので日程的には短いけれど、若干緊張する業務だ。いつの間にか二十九才になってある程度経験を踏んでいるから大丈夫だと周りから思われていたとしても。
運用方法などは仕事をしてれば慣れる話だし、社内規範は書類で読んでおいてくれればいいとも思うけれど、最初に叩きこんでおく必要があるのは確かだ。コンプライアンスも叫ばれ始めて久しい。企業に働く者として心得てもらわなければならないことは多くある。新人は覚えることや行なわなければならないことが多いから苦労するだろう。頑張ってと先輩風を吹かしてエールのひとつでも送りたくなる。
それなのに、最近の若者はなんて年寄りじみた言葉を使いたくは無いけれど、どうしてこう――。

「じゃあ薮田係長は彼氏いないんですねー」
「えー、もったいないですね」

何がもったいないのか。七つも年下に言われたくない言葉だ。しかも最後の講義が終わった後の話題がこれ？　緊張を解こうと思って少し友好的な態度を取ったからって、緊張解け過ぎじゃないの？
十数名いる新人全員が苦笑し始める。

「いるともいないとも言ってません。プライベートです。田辺くん……他に業務で不安に思った質問はありませんか？」
「実際にやってみないことには何とも言えないですねー。やるだけやってみます」

「……はいどうぞ、佐々木さん。何かありますか？」
「あのー、私は営業三課に配属予定ですけど、先日お会いした営業一課の課長さんは彼女とかいらっしゃるんですか？」
は！？　吃驚した。今時の子はこんなことを面と向かって聞いてくるのか！　人事の人間に！　査定のこととか考えないの！？　しかもそんなこと……私だって知りたいわよ！
「……直接ご本人に聞かれたらどうでしょう。……佐々木さん、今は業務上の質問について尋ねていますが」
「特に思いつきません。いま教えて頂いたことを踏まえて業務上出てきたらその時対処したいと思います」
そうですかそうですか……もう来年度から新人教育の自信、ない。表面的には分かりました、なんて涼しい顔して答えているけれど、内心は頭を机に押し付けたい。
この子たちに困ったことがあったって、答えないことにする。自信があるなら自分で何でも対処してやるだけやってみたらいい。と、こんな先輩では駄目だろうけど、せめて思うことは自由にさせて。
そうやけくそ気味に思いながら、教え込んだはきはきとした挨拶で何とかこの場を終える。この後この会議室の使用予定が入っていた。時間になる前に片付けないとまずい。
新人たちは休憩を挟んでそれぞれの課の担当者との打ち合わせ場所に向かうため、ありがとうございましたと一応礼儀正しく会議室を出て行った。笑顔と緊張の入り混じった新入社員たちはこれから学生時代には想像もしなかったことに対処していくのだろう。さて、どこまでその態度と表情を保てるのかなあ。今年は何人持つのかな。
色々書きこんだホワイトボードを掃除していると、外から元気な佐々木さんの笑い声が聞こえた。彼女の声は明るくよく響く為、すぐ分かる。若いってすごい。

そう思っていると開いているドアに誰かが立った気配がする。次の使用者だろうかと視線を送った。

「――お疲れ様です。営業会議ですか？」

今日も隙のないグレーのスーツに少し斜めに流して撫でつけてある黒髪の鈴木課長が立っていた。その後ろには、鈴木課長といいコンビになってきているポケットに手を入れた加賀君が人懐こい笑顔を見せた。

この姿勢の悪さも相変わらずだなと苦笑しながら会釈をすると、ポケットから手を出した加賀君が手を振ってくれたけど、その間を分断するように課長が横切る。

「十一時からな。加賀。今日使う資料忘れてきた、取ってきてくれ」

「えー？　課長、さっき自分でまとめてたじゃないっすか」

「色々考えてたら机の上に忘れた。あと十五分しかないから頼むな」

忘れた、なんてやり手で評判の課長らしくない。と思うが、わざと資料は置いてきたのだろう。

こうして二人きりになるタイミングを作りだすのが妙にうまいと言うか、そつがない。

これだからこの男は、出会って一年以上が経つのに未だによく分からないのだ。

4．5話（前書き）

一番最初の出会いの後、かつ喫茶店前で薮田係長と別れた後の鈴木課長と加賀君の会話ってどんなんかな～と思って書き出してみました。　やっとアップできて嬉しいです。
読みづらいかもしれませんが、どっちが課長で加賀君かは想像しつつお楽しみください。（ってこの二人は丸わかりですね）
ちなみに、第四話読了後にお読みください～。ではどうぞ。

4．5話

「は～、薮田係長と久しぶりに話しましたよ。プライベートって、何すかね」
「――人事とそんな接点あるか？」
「や、オレが入社のときに薮田係長はまだ役職ついてなかったんすけど、上司に付いて新人教育の資料とかまとめてたんすよね。オレそんときオリエンテーションのグループリーダーだったんで、書類を薮田さんのとこ届けに行ったんすよ。そしたら『背中を丸めてるのは背が高い人の癖ですか？』って」
「加賀は姿勢が悪過ぎだ」
「ははー。オレ大学一年留年してるんで薮田さんと二コしか違わないんすよ。それ知ってたからちょっと緊張緩んでたんすよね～。慌てて姿勢正したら近くの棚に頭ぶつけて、薮田さんに大笑いされちゃって。それでインパクトあったのか新人の中でも割と覚えてもらった方すかね」
「……薮田係長の大笑いって想像つかないな」
「そうなんすよ～。言葉遣いはいつまで経ってもめちゃくちゃ堅いし表情も結構変わんないんすけど、時々食堂とかで出会って近況報告してるとよく分かんないポイントで笑うんすよね～薮田さん。美人って顔じゃないんすけど、笑った表情がいつもの堅さとギャップがあって～いいんすよね～。今日の髪型もいつもと違って可愛い系だったっすね」
「本社にはかなりの人数がいるのに、よく見てるな」
「彼氏がいない独身女子情報は営業とか企画部の飲み会で話題には上りますよ。鈴木課長もたまにはオレらの飲み会にも来て下さいよ～」
「なら残業手伝え」
「課長が残業してやってる仕事は上への報告系ばっかりじゃないす

か。無理っす」
「――課長なんてなるもんじゃないな」
「またまた～本社に栄転して来られた人に言われたらうちの係長たちに睨まれますよ」
「お前も役職が付いたら分かる。――それまで必死に契約取ってこい。お前は今期に契約目標数達成したらリーダーになるはずだ。最短で来年の人事考課で役職に手が届くぞ」
「うえー。最近厳しいんすよね、路線も急に減らされたりして旅行会社との折り合い、付かないっすよ」
「来年には新しい空港が開港する。それまでに企画に投げれるだけの話を駒として持っておかないと苦労する。とにかく走れ」
「うぃーす」

4．5話（後書き）

営業はいつでも厳しい戦いしてますよね……。加賀君、期待されてるんだから頑張れ～。

第１６話

もー何やってるんすか、と言う加賀君の声がドアの入口から遠ざかっていく。そんな加賀君の後ろ姿に悪いなと声をかけてこちらを向いた課長の表情は悪いとも何とも思っていないもので、いつもこんな感じで付き合わされているのだろうなと想像がついて加賀君を哀れに思う。そして課長は何事もなかったかのように話を続けた。

「あの営業三課に配属される新人はおもしろいな。どんな仕事してどんな失敗するのか三課の課長が戦々恐々とした表情してたぞ」

廊下ですれ違った佐々木さんの事を言っているのだろう。課長はニヤリと笑いながら奥の机を並べ変え始めた。

「営業は好奇心が強い方が伸びる要素があっていいでしょうね。でも最近の若い子はって思いましたよ」

「薮田係長の二十九はまだ若いだろ。三十の俺まで年とってるように聞こえるから言うなよ」

そんな社内の様子を話しながら片付けを終えた後、会議室を出ようと書類をテーブルから取り上げると、窓の外を眺めていた鈴木課長から見計らったように低い声で呼び止められた。

「残業か？」

「――どうでしょう。メールでいいのでは？」

「返事無い時あるだろ」

「見る暇あったら仕事します」

「そっちからメールが無いのはフェアじゃないな」

その言葉に、廊下を見つめていた視線をまた室内に向ける。鈴木課長は窓に向けた姿勢を変えることはなく、背中だけが見えた。

「……それはメールが欲しいとおねだりしてるんですか？」

「おねだりに聞こえてるのか？」

課長の表情は見えないけれど笑いを含んだ声が質問に質問で返してくる。そんな反応に溜息だけを残して会議室を出た。

こういう会話だけで成り立っている間柄を、何と呼ぶのだろう。そう、先ほどの佐々木さんと同じ質問を本人に投げたら、どんな返事が返ってくるのだろう。

――彼女いるんですか？　秘書課の子と付き合ってるって噂は本当？　なのにどうして私に食事に行こうって誘うの？

私は、課長にとってどんな存在？

何も言わない課長には質問ばかりが増えていて呆れるけれど、それを問うつもりもない自分にも十分呆れてる。育子だって呆れてもうからかいもしなくなった。ただ時々進展を聞いて来て、何か言いたげにニヤリと笑うだけだ。

こんな風なやり取りをするようになったのは今から半年ほど前のあの日から。

風邪で倒れた課長を介護した翌週の月曜、鈴木課長は喉も鼻も普通に戻って出社してきたらしい。運動が好きと言っていただけはあるのだろう、すごい回復力を発揮したものだ。

どうして広い社内の滅多に会わない人の状況を私が知ったのかと言うと、月曜の朝礼後、自分のパソコンを開いていつものように社内メールをチェックしたら、課長からメールが届いていたからだ。

内容は離職予定者の書類作成依頼についてだった。本来担当としては赤堀さん宛てのものだったけど、なぜか私に連絡をしてきた。

そして定型で作られている署名のメルアド部分は、なぜか課長個人の携帯メルアドに変えられていた。
どうしてそんな細かな所に気付いたのかと問われれば、……答えにくい。
とにかく。見つけたメルアドをメモして、依頼メールについては署名の部分を削除して赤堀さんに転送した。
そして届いたメルアドの扱いにしばらく悩んだけれど、とりあえず昼の休憩時に更衣室に戻って携帯を取り出し、メモしたメルアド宛てに空メールを送った。本文なんて、打てるわけがない。
数分後、ロッカー前で化粧直しをしている時に携帯の画面に“鈴木さん”の文字が表示された。無心無心と唱えながら開いたメールには、件名にお礼の言葉と治ったの一言、本文に文章は無く写真だけが添付されていた。お粥を食べきったという証拠なのか空の鍋と、その横に保冷枕やシップ状の冷却ジェルシートの空箱など課長が寝てから買い出しに行った商品一式が並べられたキッチンの写真だった。
どんな顔をしてわざわざここまでセットして写真を撮ったんだろうと想像したら、一人ロッカーで声を出して笑ってしまった。聞かれたらおかしな人間だとの認定は間違いないほど、唐突に笑えた。

――――薮田：どういたしまして。

それ以外にどんな文章を送れるのだろう。お大事にという文章も本当は作ったけれど、送らずに消した。
とにかく。
それからだ、鈴木課長からメールが時々来るようになったのは。
と言っても、残業だなどの状況を伝える短いメールに、時々文章のない写真だけが添付されたメール。最初は返信に迷っていたけれど、妙に意識するのも変だと返信をし始めた。同じくお疲れ様ですなどの一般的な返答だけど。

困るのは写真メールへの返信だ。飲み会で出た一品料理写真の写メには何の意味が？　食べたくなるからやめて欲しい。
そして大体仕事が詰まっていない月半ばに来るメールは、私のマンション近くの駅で待ち合わせようという内容だった。
最初それを受け取った時は育子からのメールかと思って何度か宛先を見直した。いたずらメールは遂にここまで来たかとプロパティまで見たけど、本当に課長からだった。とりあえず、既に帰宅して夕飯の支度に取りかかっていた時だったので料理は少し焦がした。
慌てて火を止めてメールを返す。

――――薮田：意味が分かりません。
――――鈴木：別のお粥メニューを試したい。いま駅に着いた。
――――薮田：もう夕飯を作っています。
――――鈴木：食べに行っていいのか？　今日体調は万全だぞ。
――――薮田：三十分後に駅で。

断ればいいのに、どうしてあんな返信を送ってしまったんだろう。もうお礼も謝罪も、何の理由もないのに。
そうして私服に着替え直して駅に着いたけれど、じゃあ行くかと言ったきり課長は何も話さなかった。店に着いても人事の業務内容について聞かれたり、ならばこちらもと営業の進捗状況を少し聞いたりと仕事の話ばかりだったし、特にそれ以外の話で盛り上がる訳でもなく、でも居づらい訳でもなかった。そうして一緒に夕飯を食べ、辞しても引かなかった課長にマンション付近まで送ってもらった。
全所要時間は約三時間。下手なドライブより長いのか短いのかよく分からないその時間に、思わず何でと聞きそうになった。でもそんな問いをマンション近くでしたら引きとめるようなニュアンスになるのは当然で、内心慌てつつも冷静な声でここでいいですと声を出そうとした時、課長は「じゃあ」とだけ言って帰って行った。

深く考えるだけ、非常に無駄な気がした。本当にお粥が食べたかったのか？　とらしくなく考えたけれど、そんな訳は無い。それくらいは、分かる。

そんなことを繰り返したのはこれまでに数えるほどだ。忙しくなかった二月は数回。先月は年度末のため忙しくて何度かメール自体を無視した。営業だって年度末は忙しいだろうにそれでも結局約束を取りつけられて、先々週いつものうちの近くの店でご飯を食べたけど。

でも忙しくても時間を作ってまで会う理由が私たちの間にはあるのだろうかと、思う。

そして今月は今日声を掛けられたのが初めてだ。

――そっちからメールが無いのはフェアじゃないな。

何がフェアでフェアじゃないのか。そもそも、何の気持ちも伝えて来ない相手とのやり取りに、正しくないと言われる筋合いはない。

それにしても、こうして声をかけてくるって事はあの時見た弟を彼氏と勘違いしていないのだろうか。それとも私に彼氏がいても二股かけられてても気にしない人？

……二股かけるような人間だと思われていたら心外だ。誤解は解きたい。いや、そもそも二股かけていませんとかそんな言い訳のような話を振らなきゃいけない状況にはなってないから！　そんな雰囲気でご飯食べてないから！

話す内容だって相変わらず仕事の話が主だし。……そういえば前回ご飯を食べた時は、「やっとゆっくり飯を食べれる時間に仕事の話はもううんざりだ」とか何とかぼやかれて、お互いの家族構成とか課長の好きなスポーツの話しかしなかった、と気付く。

だからと言って、何か関係が変わったわけでもない。私の気持ちを求めているようでもない。

悪戯におねだりかと聞いても、こちらの考えを探るように聞き返

されるだけ。でも……もしおねだりだなんて肯定の返事があっても、私も何と返事をするのかはその時になってみないと分からないけれど。

なんにしても今回もまともな返事はまた返って来なかった。不毛だ。

でも……どうだっていいなどと思っている頭の片隅で、課長は何を考えているのだろうかと考え、けれど問うこともせず、でもまた相手の事を気にし続けている自分のこの中途半端な感情も、不毛だなんてことはよく分かっていた。

第17話

「この間から延ばし延ばしになってた新人くん歓迎会兼お疲れ様会、今日しようか」

人事で担当する新人教育のプログラムが今日私が担当した講義で終わったため、人事課長がそう言いだしたのは終業間近のことだった。

うちには今回新人が一人だけ配属され、他の係長の下につくことが決まっている。

いいですねと隣の係長が賛成の声を上げると、フロアの皆もいつまでも打ち上げの日付を延ばしておくことはできないのは分かっていたのだろう、終わらないけど今日はもう切り上げるという投げ遣りな声があちこちから続いた。

私も残っている業務は明日に回してもよいものばかりだった。それが残念でならない。そう思っているのが顔に出たのか、人事課長がパーティションの向こうから悪いけど出てね、と苦笑しながら手を上げた。はいはい今回だけは行きますよ、と軽く手を上げて返事をする。

普段誘われても飲み会に行くことはない。それを皆知っているので最近では誘われることすら無くなって楽だったのだけれど、こういう節目の時にはどうしても参加せざるを得ない。仕方が無いので今日の新人の話をちょっとだけして憂さを晴らそうと決める。他の憂さも混じっているけれど。

でも憂さ晴らししたかったのは私だけではなかったようだ。

業務後に皆で行った店で早々に赤堀さんが妙に荒れて飲み始めた。歓迎会、という雰囲気のまったくない飲み方だ。いつも味を楽しみながらゆっくり飲むのが好きだと言う彼女が、周りの囃したてもあるにしてもピッチが速い。

「ちょっと赤堀さん、もうやめなさい」
「いいんですー！　こうたのバカー！」

そうだそうだこうたが悪い、とこうた君とやらが誰なのかも何があったのかも知らない課内の同僚たちは煽るだけ煽って無責任に騒ぎたてていく。赤堀さんは自分のプライベートを隠そうという気はないのだろうか。まあ本人がいいならいいけど。

「昨日だってね、……聞いてますか！？　薮田かかりちょお！」
「……それで、こうた君がどうしたの」
「社会人だってね、春は忙しいんですよ。なによ、就活と卒論に追われてるから時間が無いとか、ドタキャンとかドタキャンとかドタキャンとか！　あり得ないからー！」

そう叫んだ勢いで人のジョッキを奪って煽りそうになった赤堀さんの手元からそれを慌てて奪い返し、ウーロン茶のグラスを握らせた。

赤堀さんの彼氏であるこうた君はまだ大学生で、最近構ってもらえないことが赤堀さんの荒れている理由らしいけれど、これは暴れ過ぎだ。さっきから話が延々ループしている。しかも随分昔の喧嘩理由にまで遡ってきているような気がするのは気のせいだろうか。

宥めてすかしてやっと静かにウーロン茶を飲みだした赤堀さんにほっとして、私も落ち着いて隣の先輩係長と新人教育の愚痴を言い合っていると、横にいた赤堀さんがこちらに寄りかかってきた。初めは肘が当たるだけだったので気にしていなかったけれど、子供のように温かい体温はどんどんこちらに移ってくる。

「……ちょっと赤堀さん。うそ、寝ちゃったの？」

目の前の席にいた社員が笑いながら指摘してくれたけれど、本当に寝てしまったようだ。アルコール無しの夕飯は食べたことはあったけれど一緒に飲んだことは無かったので、これくらいの酒量で寝てしまうとは思わなかった。

本気でこちらに体を預けてきているので左肩が重い。体の小さな女子とは言っても意識を飛ばした人間は結構扱い辛い。何とか体をずらして膝枕の体勢を取る。そうして横になった赤堀さんは言葉にならない何かを呻いては思い切りスーツに顔を押し付けて、人の膝頭に爪を立てた。夢の中でもこうた君に怒っているのだろうけれど、もう、勘弁して欲しい。このスーツはクリーニング行きだ。

綺麗に伸ばして明るく彩られた爪は案外凶器になるのでストッキングが破けないかと少し心配して見下ろした。赤堀さんの小さな額には力が入っているのか皺が寄っている。そういえばこんな風に人と触れ合うのは随分久しぶりだ。人の体温が移るほど接近したことなんて……前の彼氏のあの事件以来だ。

そして、あれはこんな飲み会で彼が酷く酔っぱらった後だったな、とビールを傾けながら久々の飲み会と相まって思い出した。

＊　＊　＊

前の彼氏とは同期入社で出会った。同期とは緊張しながらもそこそこ仲良くなり、配属部署が分かれた後も時々都合が合えば集団でご飯を食べたりアミューズメント施設に乗り込んでは深夜まで遊び倒したりしていた。若かった。

大学では同じ講座を取っている女の子たちとランチを一緒にしたり、講座の空き時間にカフェテラスでお茶をしながら見た映画や本やテレビの話をしたけれど、それほどアクティブに動くことが無いメンバーだったし、休みの日に待ち合わせをしてまで遊びに行くよ

うな付き合いでもなかった。私自身、そこまで親しくなるような間柄の友達を見つけることは出来なかった。結局、休みといえば別の大学に通っていた育子と映画を見に行っていたし。

だから、同期たちとの県外脱出ドライブやスポーツ混じりの各種ゲーム対戦は目新しくて、社会人になったんだから仲良くならなきゃと必死で、柄にもなく随分はしゃいでいたように思う。

そんなはしゃいでいた私が気に入ったのか、入社後一年が経った頃、皆で遊んでいた時に元気な少年のような彼に突然告白された。冗談だと思った。その場のノリで告白してきたのかと思っていたら、翌日から「わこ」と呼び捨てにされていた。告白の返事をする間もなくそうだったので、同期仲間内ではいつの間にか彼氏彼女の間柄だと認識されていた。

付き合うってこんなものなのかなと思った。高校の時に同級生に告白された時は、はあどうも、でもごめんなさいと返事をして付き合うことは無かった。彼らがくれる気持ちと同じほど気持ちを返せるような気がしなかったし私の中で同級生という枠を越える人はいなかった。時々誰かとくっつけようとする他の友達もいたけれど、育子が茶化してうやむやにしてくれた。もちろんしつこく圧力をかけてくる友達には自分もはっきり答えたけれど。

ハタチを越えて社会人になって付き合うことになったいわゆる初彼はいつでも元気一杯な人で、人事課内に溶け込もうと必死だった私をいつもいつも元気に励ましてくれた。だから、と言い訳をする自分も情けないけれど、彼氏彼女というよりは、同期の親しい友人という位置付けだったのだと思う。私の中では。

だから触れ合いを求めてくる手や腕にある程度は付き合えても、何となく、そういう雰囲気を拒んでいたように思う。正直、そのことに興味はあっても自分で壁を崩すほどにはならなかった。無理やりでもとりあえず越えてみればいいんじゃないかと思ってみたこともあったけれど、目の前の彼にそこまでの気持ちはいつも持てなかった。

入社時の妙にはしゃいで頑張っていた私は社内の雰囲気に慣れて落ち着くにつれて段々普段の自分に戻っていき、ノリで何かをすることもなく、テンションを上げて話を盛り上げる人間でもなくなっていた。その温度差にお互い触れないまま、忙しい彼とは友達のように時々連絡を取り合うだけになっていった。

入社後二年が経つ頃には、彼は上司と一緒に出張で出かけることも増え、私も新しい仕事を覚えるのに必死で、同期の友人とも言える彼とは互いに励まし合う仲ということで満足していた。でも彼は多分私を待っていたのだと思う。越えようとしない壁を越えてくれるのを。明るくて、元気で、爽やかな人だったから。

だから同期や何人かの他部署の人たちで誰かの送別会と銘打ったあの飲み会の時は、付き合って二年以上になる自分たちの付き合い方を変えたくて仕方が無かったのだろうと、今なら想像がつく。

私とは離れた席で彼はいつものように元気に飲んでいた。彼が好きなのはビールだ。出張明けで随分疲れていただろうに、辞めていく同僚のために駆けつけて場を盛り上げていた。開始後しばらくは特に気にしていなかったのだけど、周りに勧められて私の隣に彼が座る頃にはその飲み方が異様だと気付いた。

「ちょっと、飲みすぎじゃない？」

「いーの。疲れたから飲みたいの」

子供のような口ぶりでジョッキを空けながら、テーブルの下で私の手を握ってきた。随分と熱いその手に躊躇ったけれど、久しぶりに会ったのに跳ねのけるのも悪いし、こんな場で険悪な雰囲気になっても申し訳無いからとそのままにしていた。

飲み会がお開きになる頃には彼はすっかり酩酊と言ってもいいほどになっていて、私がテーブルの上を簡単に片付けようとして手を離してと言っても外してはくれなかった。周りに随分冷やかされながら一緒に部屋を出た。幹事が会計を済ませている間に少し酔いを

覚まさせようとして店の奥にあったベンチに腰かけさせて、何気なく、苦しそうに見えたネクタイを弛めてあげた途端、抱きしめられた。

「……今夜、わこの部屋に泊めてよ」

「ええと」

耳元で熱い吐息と共に聞こえてきた彼の台詞に、自分でも何と返していいのかと悩んで沈黙を保っていたら、突然あっという間にベンチに組み敷かれて、声を出すこともできないよう塞がれ、――――その後の記憶は思い出したくない。

たかだか数分の事だったのだろうけど、なかなか店から出て来ない私たちを、特に酩酊状態の彼を心配して探しに来た同僚が、彼を引き剥がして同期の女子を大声で呼ぶほど、短時間で酷い有り様だったのだろう。

近づいてきた同期の女子の手がどうにも怖くて跳ねのけ、言葉もなく泣くしかなかった私は、その後数日出社できなかった。育子はその間泊まりこみで付き合ってくれたし、そんな時たまたまいきなりうちに遊びに来た弟は何かを察して家族には黙っていてくれた。

何とか出社して冴えない表情で仕事をこなしていく私を、課内の人たちは病後の体調不良として見てくれた。でもその時の事を知っている同僚に帰り際近づかれて、彼が数ヵ月後に転勤になる事や焦っていた事などを説明されても、その時の私に何と返事が出来ると言うのだろう。

黙ってその場を立ち去った後も何度か鳴った彼からの着信に出ることもできず、ゴメン別れよう、というメールが来ても、返事は出来なかった。許せないとか、そういう意味で出来なかったのではない。何の文章を送ったとしても、もう何も過去は変わらないし、自分も相手の気持ちに添えなかったことも分かっていた。ただただ、今はもう接点を持つことが苦痛だった。

あれから数年が経って後悔しているのは、伝言でもいいから彼に何かを伝えなかったことだ。人事内で色々な人の色々な経験を見聞きして、きちんと彼に話をしなかった事が、彼の話を聞かなかった事が、どれだけ互いに辛い事なのかを理解した。後悔して連絡を取るにしても時間が経ち過ぎている。彼の転勤先の話も本社いれば聞いてはいるし、連絡を取る事が可能な事も分かっている。でも。

だからだろうか。ある程度の年月を重ねたとしても私は今でも動けずにいる。

人の気持ちに添うことにも、自分の気持ちに正直になることにも。

第１８話

周りはまだ騒がしく、料理も頼まれ続けている。まだまだお開きにはなりそうにない。

すっかり寝入ってしまった雰囲気の赤堀さんをこのまま寝かしておこうか水でも飲ませようかと思案していると、後ろに置いてある赤堀さんのバッグから携帯の着信音が聞こえた。勝手に出る訳にも行かず放置して料理に手をつけていたけれど、何度も鳴り続けるその音が気になって夢うつつの赤堀さんに声をかける。……返事は無い。出れる状態ではなさそうだ。

とりあえず意味は無くとも一声かけてからバッグから携帯を取り出すと、表示は「こうた」。噂の当人だと思って溜息が出た。私も少し酔っているのかもしれない、そのまま勝手に携帯に出てしまった。

会社の同僚だと名乗ると「こうた」君は慌てて電話の向こう側でお辞儀でもしているんじゃないかという位緊張した声でハキハキと挨拶をしてきた。そんな彼を気にもせず赤堀さんが「こうた」君に文句を言って寝つぶれたことを説明し、店の名前を言って迎えに来るよう一方的に命令して電話を切った。

「赤堀さんのカレシ、迎えに来るんですか？」

赤堀さんの携帯を戻していると、赤堀さんの向こう側に座っていた人間から声がかかる。この春係長に昇進した山本君だ。同じ課内だけどそんなに山本君を含む男性陣とは親しくしづらくてよく知らない。けれど、たしか几帳面な仕事ぶりや業務向上ための提案力などが評価されて昇進したはず。

「もうこんなんじゃ一人で帰れないし、喧嘩してるなら会った方が

いいでしょ」
「なるほど。――薮田係長はどうなんですか？　喧嘩するようなお相手、いるんですか？」
「……いませんよ」
「そうですかー？　でも何か今日荒れてますよね、何かありました？」

なに、私が荒れてちゃ困る訳？　何か迷惑でもかけた？　静かに飲んでるだけだけど？
そう思って新たに頼んだ日本酒のグラスに口をつけながら横目で睨むと、山本君は満面の笑顔を向けてきた。

「たまには俺も愚痴くらい聞きますよ」
「もう今日は話したから無いです」
「今後ですよ、今後」

面倒臭いなあ、何が言いたいの山本君。自分が係長に昇進したから、同じ係長の気持ちは分かるって言いたい訳？
いちいち突っかかりたくなっているのは若干悪酔いしたせいかもしれない。珍しい。昔を思い出したからだろうか。そのせいだろう、グラスを置いた拍子に近くにあった小皿を引っ掛けて傾かせて余っていたドレシングが零れて指に跳ねた。これは本格的に周りに迷惑をかける前に私もそろそろ止めておこう。そう思って汚した指を拭くために左手の中指から指輪を外してテーブルに置いた時、噂のこうた君が挨拶しながら部屋に入ってきた。
スーツ姿の社会人の中で、カジュアルな服装の彼は随分浮いて見えた。学生の彼だって、社会人の赤堀さんを色々な意味で追いかけて必死なのだろうに、と少し酔った思考で考える。膝で本格的に寝出した赤堀さんを起こしながら、周りに冷やかされながらも足早に近づいてきたこうた君を見て、少し羨ましく思った。

＊　＊　＊

赤堀さんを車の助手席に乗せたこうた君がひたすら頭を下げながら帰っていくのを店の外で見送る。

春とはいえ、四月の夜はまだ少し肌寒い。でも酔って熱くなった体にはちょうどいい冷えだ。

ぼーっと見えない星空を見上げていると、店のドアが開いて山本君が顔を出した。

「大丈夫ですか？」

「ちょっと熱かったけど冷えたから大丈夫。もう戻るわね」

「いえ、薮田係長のバッグとかコート、持ってきちゃいました」

は？　と山本君の手元を見ると、確かに私のスプリングコートとバッグ。何で持ってきてるの。

「薮田係長、飲み直しにもうここ抜けて他の店行きませんか？」

「……もう飲まないから、いいです」

「じゃあ食後のコーヒーでも」

笑いながら誘ってくる山本君に、少し気持ちが波立つ。

「それ、返してもらえる？」

「一時間だけでも駄目ですか？」

私のコート類を持ちながら食い下がるように言う山本君を怒鳴りそうになる気持ちを抑える。軽い拒絶の言葉を越えてくるのは分か

っててやってるの？　少し押せば頷くと思われる人間だと思われているのだろうか。ただの同僚として食事に行こうという誘いには、もうどうしても思えない。

やっぱり酔っていると感情の抑えが効きにくい。意外と私は大概の事は聞き流せる（聞いていないとも言う）から怒りのスイッチが入りにくい人間だと思っているけど、でもスイッチが入った時は沸点が低い。入ったら最後、すぐにかっとなる性分だ。だから、今のこのやり取りは沸点ギリギリだ。

それでも、これからも同じ課で付き合っていくんだから下手な対応をして後々響くんじゃ堪らない。大きく深呼吸をしてから、意識して少し笑い声を出す。

「私一対一で食べたりするのって苦手なの。ごめんね。皆で飲み食いしたほうが移動しなくていいし楽だから、中に戻りましょう。コートとバッグ、自分で持つわ」

「――俺は、薮田係長の前の彼氏のように考えなしじゃありませんよ」

思い切ったように言う山本君の真剣な声、真剣な表情が、店の軒先の電灯に照らされて見えた。

前の彼氏。またその話か、と少し呆れ気味に星も見えない夜空を仰ぐ。

考えなしじゃないって、あの時の彼の気持ちの何を知っているの。彼と何の接点も無かった、年下のあなたが。どこからともなく流れている噂話だけで判断した表面的な言葉はこれまで何度も聞いてきた。ここまで直接的に言われた事はなかったけれど。

でも似たような言葉を、少し前に言われたことがある。それでも、こんな風に苛立ちはしなかった。

あの時はコートとバッグの代わりにマフラーを人質にされて、振り回された。それでも、ここまで拒否したいとは思わなかった。

山本君は仕事だって頑張っているし人当たりもいい。だからこそ係長にもなれたのだろう。すごいことだと思う。

でも、違う。

ああもう！　何が違うって言うの！　答えを出したくなかったのに。

山本君が悪いんじゃない。嫌いなわけじゃない。でも誰かと比べてしまう自分がいる。

それでもその相手は山本君のようにまっすぐ私に向かって来ることはなくて、のらりくらりと何を考えているのかも分からない動きをしているから、とてもとても呆れてるんだけどね。

「気にかけてくれていてありがとう。昔は本当に男の人って大っ嫌いだって思ったこともあったけど、もう皆が皆そういう人ばかりだと思ってるわけじゃないから、大丈夫。それに……私も彼には悪いことしたなって思ってるの。はっきり嫌な事は嫌だって言わなかったから。でも彼のした行動は乱暴だったと今でも断言できるから、山本君も真似するようなことしないでね。私、今度こそ職場復帰できなくなっちゃうから」

苦笑しながらそう言うと、山本君もやっと私の空気を読んでくれて、肩の力を抜いてくれた。そうして下を向いて呟く。

「係長になったら、同じ役職になったらって、考えてたんです。……焦り過ぎました」

「焦らなかったとしても無駄だな。そもそも向かってる所が違うんじゃないのか？」

突然聞こえてきた、第三者の声。良いか悪いかは別として、聞き慣れてしまったその声に自分の笑顔が固まるのが分かった。

店の灯りで影になった暗闇から、鈴木課長が顔を出した。なんで、

ここに、いるの。

「それ、俺が受け取る」

茫然とする私と同じく顔を上げて固まっている山本君から課長は私の荷物をすんなり受け取って、少し歩き出してから振り向いて私と視線を合わせた。

「帰らないのか？　送ってく」

「――な、なんで課長に送ってもらわなきゃいけないんですか。大体ここから課長の家と私の家じゃ真反対じゃないですか！」

「そうか、それもそうだな。じゃあここからならうちの方が近いな。今夜はうちに泊まってくか？」

「ななな何言ってるんです！？」

「今夜泊るのはそっちの部屋がいいか、俺の部屋がいいか。この前はどっちだったかな」

軽く首を傾げながら言い放った思いもかけない言葉は随分と威力があった。あ、とも、う、ともつかない呻き声を上げている間に、山本君はいつかの空気を読まない三十二才のように焦った声で「じゃあっオレは戻ります！」と直角にお辞儀をしてからダッシュで店に入っていった。お願いだから私の訂正を聞いてからこの場を離れて欲しかった。ついでに妙な新しい噂がたたないことも願う。

だから私も後を追って店に戻りたいけど……また人質を取られている。

「寒いだろ。コート、着るか？」

この人と話していると、怒りの沸点にすぐ到達する。聞き流せないのが癪だ。

「……両方とも返して下さい。で、一人で帰って下さい！」
「似たような台詞を前に聞いたな。バリエーション増やしたらどうだ。一緒に帰りましょう、とか」
「……一緒に帰って欲しいんですか」
「飲み会、嫌いなんだろ」

課長の気持ちが分かるようで、分からない。でも、聞けない。正直になれない。怖い。こんな経験は初めてだ。求められることはあっても、求めたことはない。
こんな年齢になっているのに、こんな年齢だからこそ、本当に、もうどうしようもない。一歩が、踏み出せない。
だから、どうしようもなく、

「うちの二十五才の受付嬢が、鈴木課長とデートしたって言ってましたね」

突き離したくなる。

第19話

「……それが？」

一瞬眉をひそめた課長が肯定も否定もしない言葉を私に返すのが何故か腹立たしくて、動揺させたくて仕方が無い。でも動揺せずに、早く私から離れて行って欲しい。真逆の気持ちが私の視線を乱す。

「そちらの方を気にして差し上げたらいかがです？　彼女、随分と追いかけておられるようですから。ああ、これは関係ない話とは思いますけど、ご存じのとおり私、うちに泊めることがあるんですよね、彼を。またかち合ったら、彼に悪いから」

「誰から聞いたか知らないが、あの日の件だったら仕組まれてるから」

そんなことは、知ってる。昼食を兼ねた軽い打ち合わせにたまたま居合わせたように振る舞った彼女がその後鈴木課長と二人きりになろうとして、現にそうできたことくらい。人事の情報網、なめるな。仕組まれたにしても理由はどうあれ、その後一緒に過ごした事実があるから、恋人宣言間近か？　と噂になってるんだから。

「あと、私の噂話もどう聞いておられるのか知りませんけど、課長にご心配いただくようなものでもありませんし、その謂れもありませんので、お帰り下さい」

噛みあわない話をこれ以上続けるつもりはない。だけど私の言い訳じみた言葉には何の説得力もなくて、でももう振り切りたくて課長に一瞬近づき、腕に引っ掛けられていたコートを奪ってまた一歩引く。後は、鞄。

視線を鞄に送ると、課長はその鞄を腕に引っ掛けたまま手をズボンのポケットに入れて、深い溜息をつきながら体を折り曲げた。

「あのなあ」

黒髪が揺れる。下を向いたまま出した声はいつもより低くてこもった音がした。

「もしかしてそれって嫉妬してるのをそうと思わせないようにわざとしてるのか？　俺を怒らせて乱暴な態度取らせてそれで結局怖がって昔のトラウマ思い出して、それでやっぱりこの人も駄目だったっていう自虐的な話にして終わらせたいわけ？　薮田係長、天然ちゃんじゃないだろ」

「……何が言いたいんですか」

ああ、違う。こんな言葉の選択は、取り消したい。

「また敬語。そろそろ最初の頃に戻さないか？」

「人の話、聞いてませんよね。鞄、返して下さい」

「その台詞はこっちだ。人の話、聞けよ」

課長が体を起こし、ポケットに手を入れたまま体を傾げた。まるで加賀君のように。

「俺が傍にいたら、苦痛か？」

初めて二人の関係性を問う言葉に、息が止まる。次に何か言ってきたらこう言おうと思っていた考えが、飛ぶ。

「今日残業なく終わった人事課の話を聞いて飯食いに行こうってメ

ールを送ろうとしたら、飲み会が嫌いな人間が仕方無くそこに参加してるらしい話を聞いて、大体逃げ出てくるだろう時間に店に来て見れば、他の男にちょっかい出されてて、それを阻止した俺は、邪魔したのか？」

邪魔、なわけが、ない。助かったという気持ちは否めない。それ以上の気持ちだって。だけど。

「……吊り橋理論ですよ。お互い。最初に妙な緊張感を共有した事がちょっと感情に影響を及ぼしているだけです」

どんな感情に、とは口に出したくない。彼が傍にいても苦痛じゃない。嫌じゃない。でも理論は仮定ではなく、きっと事実だ。だから、あの受付嬢と早くくっついちゃえばいい。そしたら私たちの間柄は流行病（はやりやまい）のような理論で成り立っていたことが証明される。

「それ、長続きしないってやつだろ。一年って短いのか？」

言われた言葉を無視して半分以上自棄になって、離れていた距離を一歩詰めて腕に引っ掛かっている鞄の持ち手を掴む。指が震えた。

いつまでこんな会話を続けるんだろう。

この会話の終着点は、どこにある？

鞄を引っ張ると、予想していたよりも呆気なく腕はポケットから出されてするりと抜けた事にほっとした。と同時に、どこか胸が痛くなった。それが、悔しい。

と思ったのは一瞬。

「……返して」

「なあ。これ、見える？」

課長は抜けそうになった鞄の持ち手を完全に手離さなかったので、マフラー事件再び。またか。
小さな鞄を間にしながら、言われた台詞がよく分からなくて、でも問いかけるための視線を上げるには近過ぎる距離だ。
私の腕と彼の腕。近いけれど触れない距離は、私たちの関係をよく表わしているように思う。もどかしいけれど、でもこれ以上は近づきたくない。近づけない。離れたい。離れて行って欲しい。早く、早く。
言われた台詞を振り払うように鞄の持ち手を少し強めに引き寄せた時、店の玄関先の照明で光る課長の小指にはまった、見慣れたデザインの何か。

「ちょ、ちょっと！　私の指輪、なんではめてるんですか！？」
「ポケットの中でいじってたらはまった。さっきから押してるんだけど、マジで抜けない」

そう言って課長は鞄からあっさりと手を離して、ポケットに手を戻した。戻さないで！　それ気に入って冬のボーナスで買ったんだから！

「課長、本気で外して下さい」
「女の指って細いのな」
「いいから、早く」
「じゃあ、取って」

また目の前に戻ってきた、手。そしてはまっている指輪に、苛々する。

「……嫌です」
「じゃあ、このまま帰る」

まただ。また、振り回される。でもこれを持ったまま帰られたら、またきっと何か理由をつけられる。

こんなやりとりの間柄を何と呼ぶ？　同僚？　友人？　ただの遊びの冷やかし？

私だって、こんな風に振り回す人のどこがいいのだろうかと思う。仕事の話をしていても疲れなくて、気を使わない所だろうか。他支店からきて苦労も多いだろうに漸進的な仕事をしている所だろうか。

本当は私こそ、吊り橋理論に当てはまった人間なんじゃないだろうか。最初に出会った時の、あの一時間にも満たない“鈴木さん”をあまりにも高く評価しすぎているのかもしれない。

だったら。

これを外したら、もう終われる？　この会話から逃れられる？

この人は、離れて行ってくれる？

深呼吸をして、大きく息を吐く。

「それを外したら、もう携帯にメールを送らないで貰えますか」

「そうくるか……」

苦笑しながら課長が店の照明に視線を送って、目を細めた。

第２０話

駅前にあるコンコース、人々が行き交う場所の辛うじて照明が当たる隅。

歓迎会がいつお開きになるとも分からない店の前でいつまでもあんなやり取りはしていられないので、場所を移して私は課長の小指にはまった自分の指輪と対峙している。

「四月といっても夜は寒いな」

「ならさっさとご自分で外して下さい。私も寒いですから」

「俺が力技で外すとなると指輪が曲がるけど」

曲がったら弁償してくだされば いいので自分で外して下さい、と言おうとしたけれど、指輪を弁償っていうことは指輪をもらうってことで、……それは何だか意味合いがすごいことになるので、沈黙する。

そうしてまた目の前の手に目を落とす。結局振り回されて、私が外すことになっているこの事実が悔しい。

あれ以来だ。そう、彼に触れられた以来、誰かに意識して触れたことのない、自分の手。電車の中でも縮こまっている、人と距離を取る自分の身体。

あれから満員電車なんて人が密着・密集する場所には乗れなくて、人の少ないかなり早めの電車に乗って出社するからいつも職場へは一番乗りに近い。早朝の警備員さんとだって顔見知り以上に仲良くなるくらいだ。

その私が、人に触れる。しかも自らの意思で。これがどれほどの一大決心を要するものなのか、この目の前の人間は、何気なく手を差し出しているこの人間は、分かっているのだろうか。

人に触れるのが嫌なら、指輪なんて諦めればいい。もしくは、ど

う考えたって課長が自分のミスでこうなったんだから冗談抜きに自分で外してもらって返してもらえばいい。私には何の過失もない。分かってる。だけど。

試したい。

もう誰かの手を怯えて過ごす自分を変えたい。

私だって、正直もういい年だ。でもそんな機会を自ら求める程の気力も、勇気もない。そんな性分でもない。なら、今あるこの機会に、試してみたい。

以前、風邪で倒れて眠っていた課長の額に浮かんだ汗を拭う為にタオル越しに触れた時、思わずその事実に指が震えた。でも、何とかそのまま傍にいれた。少しだけ触れた黒髪。硬質のそれは長くて、汗ばんだ額に纏わりついていた。眠っている人間を目の前にしていたからか、少し気楽な気持ちで纏わりついていた黒髪を肌から離したけれど、気分の悪さも身体の硬直もなかった。

だからもう大丈夫かもと思い、少し混雑した電車に乗って試してみようと休日の駅まで出かけた。

結果は、惨敗。

そうして育子を理由も言わずに呼び出して飲んで、久々に泣いた。こんな反応のきっかけを作った元彼を恨んで、でも人から言わせれば過敏になり過ぎな自分に悔しくて、でもどうしようもなくて、でも彼のせいばかりでもないと分かっていて。無限のループに入っていく自分も、もう捨てたくて。

だから、この目の前の人間だからなのか……いつからか分からないけれどどこか気を許してしまっているこの人だからなのか、知りたい。自分の気持ちが傾いていることはもう分かっていて、相手の気持ちも分かるようだけど、はっきりとしない。はっきりさせるのも、怖い。ならば、身体だけでも、はっきりさせてみたい。

寒さと苛々が相まって身体の前で交差させていた両手を解く。一

瞬震えた指は、寒さのせいにする。
私の視線が光線だったら課長の指は既に炭化して形も無いというほどじっと見つめながら、言葉を探す。

「約束、守って下さいね」
「分かったよ」

意外とあっさり引いてくれたのが妙に気になるけれど、気にしない事にする。そう。もう、気にしなくてよくなる。
触れることに躊躇していると思われたくない。でも余りの緊張に思考は意味を無くし、目の前の映像だけが私の脳内を満たす。
軽く息を吸い込んで、一歩踏み出す。縮めた距離の勢いのまま手を伸ばして、鈴木課長の手を掴んだ。

＊　＊　＊

私の指とは全然違う、硬さと太さの指。弟と比べてどうなのだろうかという疑問がよぎったけれど、身内のそんな所を意識して見たことはないので比べようがない。とにかく、異性の手。
あまり意識し過ぎるのもおかしな話だと必死に指輪を外すことに意識を向ける。
震えるかと思った自分の手は、妙に緊張しすぎたせいか触れた時に何も起こらなかった。そうしたら肩の力が抜けて、あっさりと小指にはまった指輪に辿り着いた。
そうして、四苦八苦する人間が二人。いや正確には私一人が四苦八苦している。腹立たしい。きっちりと小指にはまったそれは、関節の部分をどう越えたのか分からないというほどそこから動いてくれない。

「指、赤くなってきたな。指先が鬱血しそう」
「自業自得です。……っ、ホントに抜けなかったらどうするんですか。男のピンキーリングなんて、営業が有り得ませんよ。しかも女物。ごついシルバーならもしかしたら言いようがあるものの」
「理由なら幾らでも作れるだろ」

どんな理由を公言するつもりなのかは尋ねたくない。力を込めているせいで少し汗ばんできた自分の指に溜息をつく。でもそのおかげで一瞬頭の中がリセットされて、ハンドクリームを持っていた事を思い出す。鞄からそれを取りだして指輪周辺に付けたら少し滑りが良くなったので、勢い込めて引っ張りながらじりじりと左右に動かし続けていると難関だった関節の部分をやっと越えた。最後に少し爪を引っ掛けて指輪の擦れ以外の傷を作ってしまったけれど、自分で取らないのが悪いので謝らない。

そうして戻ってきた、自分の指輪。課長の手に触れることに躊躇っていたことも何もかもが一瞬思考から飛んで、とにかく成し遂げたことにほっとして気が緩む。そうして擦れて赤くなった課長の小指にハンドクリームを軽く撫でつけてやっと手を離した時、自分の指先からそれまであった温かさが失われて、現実に引き戻された。

「何とか外れるもんなんだな」

課長は赤くなった自分の指に視線を落としていた。ポツリと言ったその声で、さらに思考が覚醒する。

私と比べて見ても大きな手。久しぶりに触れた、男の人の、手。彼とは違って握ってくることも絡ませてくることも無かったその手。

……何を考えてるんだか。課長の指に向けていた視線をゆっくりとコンコース内に移動させる。

「――じゃあ、これで。お疲れ様でした。約束、守って下さいね」
「なあ」
「約束しましたよね」
「あの日、本当にタクシー呼ぶことを思いつかなかったのか？」

若干緊張している所へ唐突に投げられた問いに、何の話かと疑問の視線を送る。

「あの日の鈴木はどんな人間に見えていた？　薮田さん」
「何で今さらそんな事聞くんですか」

出会ったあの日。タクシーを呼ぶことを躊躇って、一緒に喫茶店まで歩くことを選んだ日。もう一年も昔だ。
あの頃の話を持ち出して、課長はどうしたいんだろう。私の気持ちを確かめたいのだろうか。……自分は何も明かさないのに？

「知りたいんですか？」

いつものように正直に答えないだろうと思って鼻で笑いながら答えた。

「知りたい」

のらりくらりとかわすだろうと予想していたところへ真っすぐ飛んできた言葉と真剣なまなざしに、二の句が継げなくなる。
どうして、今さら。
心臓が、軽く跳ねる。
何も明かさないくせにご飯を食べようと誘ってきて、同僚の線を越えないようにみえるのにこうして迎えにきたと言い、傍にいたら邪魔かと問う。他の男性と親しくするのを阻止しに来たと言う。

もうほとんど自分の気持ちを言っているようなもの、とみなしていいの？　自惚れても、いい？

――でも、怖い。今の、現時点での自分の気持ちを晒すことも相手の感情を尋ねることも、できない。

でも過去の話なら。

今さらの話ならば、私も正直に答えてみよう。それだけなら。

「いい人。……親切でいい人でしたよ、鈴木さんは。距離も適度で。都会も捨てたもんじゃないって思いました」

「いい人じゃなかったんだよ、本当は」

素直に答えた私の台詞に、間を置かず異論の言葉を重ねてきた目の前に立つ鈴木さんに虚を突かれる。どういう意味だろうかと下ろしていた視線を上げると、ポケットに両手を入れたまま彼は楽しげに笑った。

「俺が喫茶店の名前と場所を聞いた時、携帯で店を検索して遅れることを電話できた、と思わないか。もしくはこちらからもタクシーを呼ぶことも提案できたはずじゃないか？　やり手と呼ばれる営業の人間ならそれくらいは考えつく、と思わないか？」

それは。

聞こえてきた言葉が思考を揺さぶる。

何で、急に素直になるの。自惚れを越えて、あっという間に目の前に出された遠回しな課長の気持ち。

どうしよう、どうしたらいい。

止めたいのに自分の意思で止められない自分の表情。一気に血流が早くなって、寒かった首元はあっという間に熱くなる。

鈴木さんも、惜しんでくれてた？　係長の私だと分かっていても、それでも一緒にあの道を歩くのを惜しんでくれてた？　だから何度

も連絡を取ってきて誘ってくれて一緒の時間を過ごそうって思ってくれてた？
二日酔いの翌日に、医務室で触れてきた手。何度思い返してみても優しさと気遣いが感じられた撫で方。あれは私の思い違いではなかった？　あの日以降私に触れることは一切無かったけれど、あの時からずっとさり気ない言葉の中に気持ちをのせてくれていた？
顔が熱い。
泣きたい。でも見られたくない。
手の甲を唇に当てて表情を隠したけれど、面積が、足りない。

「っ、さよならっ」

はっきりと何かを突きつけられる前にその場を離れる。少し高めのヒールが鳴る音をコンコース内の喧騒に紛れさせながら早足で。
零れおちそうな何かを必死でかき集めて、あの場に一つも残らないように抱きしめて。

第２１話

飲み会の翌日から、約束通り課長からメールは来なくなった。
あの時ダッシュで去って行った山本君を朝礼前に捕まえて、軽く口止めもした。付き合っているわけではない、課長の悪趣味なからかい話だと否定したけれど、……本気で聞いてもらえなかった気がする。何だその逃げ腰は。
そして、たまに接点が合った営業一課との業務上のやり取りを赤堀さんや別の同僚に回した。職権乱用とは正にこのことだろう。こんなことをする人間だとは思わなかったけれど、事実だ。その代わりに他の仕事を片づけているのだから、とにかく今だけでも許して欲しい。
今まで培ってきた人事の情報網を駆使して営業部全体のシフト表などを手に入れて業務内容をある程度把握し、課長と出退勤時間が重ならないように動いた。食堂に行かずに済むよう、お弁当を作ったり朝のコンビニで食糧を調達して人事フロアの休憩室などで昼食を取っている。
そうして挙動不審な動きをしだした私に気付いた赤堀さんは、今日も理由を知ろうと私の周辺をうろついている。

「ねえ係長ぉ」
「赤堀さん、業務内容については一時からにしてください。私用についてなら、私から話すことはないです」
「もうその台詞、聞き飽きましたよう。……さっき食堂で鈴木課長と目があったんですけど」

一人休憩室で食べていたサンドイッチを持つ手が一瞬ぶれる。平常心、平常心。ああこのトマトレタスサンド、おいしい。でもやっぱりパンがいまいちかな、このコンビニのは。

「ねえ係長ぉ」
「……なんですか。このサンドイッチはあげませんよ」
「その切り返し、全然面白くないです。むしろ今日の課長の方が面白い顔してましたよ」
「……」
「課長、うどん食べてたんですけどね、食べようとした瞬間に私と目があって、すぐ視線が私の周辺に動いたんですよね。でも目的の人がいない事が分かった後何事も無かったかのようにうどんを口元に持っていったんですけど、お箸からうどんがこぼれてたことに気付かずにお箸を口に刺してました。そいで超変な顔して痛がった後、口元を抑えて俯いてました」

平常心を保とうと思っていたのに、その姿を想像したら思わず笑えてきて、でも堪えて肩を震わせつつも赤堀さんから顔を背ける。

「ねえ係長ぉ。何があったか知りませんけど、ケンカしてるならもう許してあげたらどうですか？」
「何の話か分かりません」
「課長、私に何か言いたそうなのに、いっつも口元に手を持ってって何も言わずに立ち去るんですよね～。あ、もしかして私に興味あるんですかね！？」
「そうかもしれないわね。聞いてみたら？」
「な訳ないじゃないですか、あんな顔して私じゃなくて私の周辺を見る人が。……ねえ係長ぉ」
「ご馳走様でした。あー、もう一時五分前ね」

休憩室のテーブルの上を片づけながらコーヒーを飲みほし、私の座っていた椅子の後ろでうろうろしていた赤堀さんに目を向ける。

「赤堀さん」
「はい、係長！　何でも聞きます！」
「さっきの査定の資料、内容が薄いからやり直しね。一時半までに再提出で」
「……苛々してるからって乱用しすぎぃ」
「十五分に短縮しようかな」
「係長の、かかりちょうの弱虫いじけ虫逃げ虫ー！」

子どものような暴言を吐いて走り去る赤堀さんの後姿を見送って、左の中指に目を落とす。
お気に入りの、小さな宝石が埋め込まれた細めのプラチナの指輪。くるりと軽く回した後、休憩室の窓から空を見る。建物の中からでは青い空も少ししか見えない。ほんの少しだけ眩しくて、目を細める。
もうあれから一ヶ月が経った。まだ一ヶ月しか経っていない。短いようで長い、一ヶ月。

逃げ回っても、自分の気持ちは変わらなかった。

あの声が耳について離れない。正確には、声と台詞。
忘れたいのに、何度も何度も勝手にリフレインして、冷静になりたい私を蹴飛ばして、叫ばせる。声無き叫びは籠もった心の内側で何度も何度も跳ねかえってこだまして、何度も何度も私を打ち倒した。
もう、やだ。私の勘違い、にしたい。でもそんなことはもう無理だ。でも勘違いにしたい。
必死で証明したかった吊り橋理論は、吊り橋ごとどこかに落ちていった。
そうなるともう、止まらない。
課長と一緒に時間を過ごしたくて色々手を回した受付嬢の、その

真っすぐな気持ちが羨ましかった。課長に彼女がいるのかと真っすぐに聞いてきた新入社員の勢いに気圧された。そんな風になれないのに、そんな風になったら課長の横にいれるのだろうかと考えて、でもそうできない自分は簡単に想像できて、軽く落ち込んだ。

傍にいて、嫌じゃなかった。メールが来るのを、忙しい仕事の合間に楽しみにしていた。返事をしたくても、一緒に時間を過ごしたら仕事が手につかなくなりそうで、自分が自分でなくなりそうで怖かった。でもそんな風に相手の気持ちを考えるより、自分の気持ちばかり優先する自分も嫌で、大人げなくて、返事ができなかった。

だから、拒絶したかった。今まで好意を寄せてくれていた人たちの気持ちに添えなかったのに、こんな年齢になって急に誰かを思う自分が怖かった。そんなに親しくもない受付嬢に対して嫌な感情を抱いてしまう自分が恐ろしかった。こんな感情を持っていることを自覚した自分はどうなっていくのかと、身が竦む思いがした。

なのに、躊躇いながらも初めて手に触れた瞬間、緊張で息が止まるかと思った。前の彼の時と比べることもできないほど、切なかった。手を離したくなかった。彼の伝えてきた感情が、本当に本当に、真実私の勘違いでないのなら、手放したくなど、なかった。

あれだけ男の人が怖かったのに、どうして、彼にはこうも反応が異なるんだろう。

でもその疑問の答えはもう出ている。今日の青空に負けないほど、むしろ目が痛いくらい清々しく。

いますぐ、どうしようもなく。

彼に会いたかった。

＊　＊　＊

六月。梅雨に入ってもおかしくないのに天候不順で今日も天気がいい。良すぎる程だ。
今日から出張で課長がいないことが分かっていたので食堂で昼食を食べる事が出来た。混雑する食堂で聞こえてきた、受付嬢が振られたという噂話。新入社員の佐々木さんが、課の違う加賀君に営業の指南を受け始めたのが生意気だという噂話。他支店の係長が降格したのはあまりよくない理由だとかの噂話。
私が何も変わらないとしても、周りは移り変わっていき、月日は流れて行く。このまま流れて行ったら、私の感情も、課長の感情も、きっと淡くて懐かしいものに変わっていく。
そうしていつものように少しの残業の後に仕事を終えて、いつもの駅で降りて、いつもの自宅に帰って行く、少し蒸し暑くなってきた六月の夜。

「遅い」

ほぼ二ヶ月ぶりの、聞き慣れた低い声がマンション前で私を出迎えた。
今日から一週間の出張と把握していたはずの営業一課の課長が、ビジネス用のキャリーカートに寄りかかって眉間に皺をよせて立っている。きっちりと撫でつけられた黒髪はいつかのように乱れてはいない。最初に出会った時の、気難しい顔をした課長のようだった。
ひたすら逃げていた間に、もし偶然課長とバッタリ会ったら私はどんな反応をするんだろうかと少し不安だった。
でも驚きが過ぎると、人は冷静になるのかもしれない。
「お疲れ様です。こんな所でどうされました？　鈴木課長」
課内で見せているはずの微笑みを目の前の人間に向ける。

「随分と逃げ回ってくれたようで。落ち着いて話をするためにストーカーのようだがここに来るしかなさそうだった」
「ストーカーの真似事で社会的に抹殺されなければいいですね。通報される前にお早めにお帰り下さい」

では失礼します、とマンションの入り口に立つ課長を避けながらお辞儀をして通り過ぎる。自動ドアが開いて、入ってすぐのフロアにある集合ポスト横の集合インターフォンのキーを打つ。ピーっという解錠の機械音が聞こえたのと同時に、インターフォンのボックスの上に、数ヶ月前に至近距離で見た、触れた手が伸びてきた。
コン、と軽い音を立てて、小さくて綺麗にラッピングされた箱が置かれる。
その距離と急な出来事にビクリと体が震えて、鞄を抱きしめながら数歩離れて、もう一度視線を上げる。
しかめっ面のその表情は、やっぱり見覚えのある最初の頃の課長の顔。あの時は分からなかったけれど、今なら分かる。これはちょっと緊張している顔だ。そして、やっぱり怒っている。

「それ、やる。こっちからはもうここまで。あとは……そっちで決めてくれ」
「何が言いたいのかよく分かりません。これ何ですか。頂く謂れがありません、困ります」
「もうそういうの、いいから。……俺からは触れない。そっちから俺に触れてくるまで、絶対何もしない」

声に、溜息が交じっている。溜息をつくくらいならここに来なければいいのに。なのに、どうしてそんな切なそうな顔、するの。
「……どうして私がそんなことをするんでしょう？　業務上、特に

意味が無い行動ですね」
「どうだろうな」
課長は最後まで私に視線を合わせることなく、じゃあと軽く手を上げて帰って行った。約二ヶ月ぶりの接触は、あっという間の、数分の出来事。
煌々と明るいマンション入り口。取り残されたのは困惑する自分と、インターフォンボックスの上で照明の光を浴びてキラキラと光る、薄い水色のラッピングの、小箱。
「……冗談でしょ」
茫然とした自分の声が、遠くで聞こえた気がした。

第２２話

「これ、うまいなー。姉ちゃん、これ今度作って」
「……ここに食べに来ればいいでしょ」
「作ってもらう事に意義ってあるっしょ」
「それで、伝言って何？　電話でも済むのに」
「んー？　母さんが、たまには顔見せろって」
「……貞広、あんたしばらくウチに出入り禁止ね。それとここはあんたの奢りで」

ええー！　初任給少ないのに！　とブーイングする弟の声にワザと深い溜息を吐いて聞こえないふりをする。実家暮らしが何を言う。
急に夕飯を一緒に食べようなんて呼び出されたから何かと思えば、ただの構って欲しい言動だったか。高校時代から彼女の影が見え隠れする弟のはずなのに、実の姉と一緒に食事のための時間を取るとは……大丈夫か。彼女に振られたのか？　でもまあ、たまにはこういう夕飯も悪くない。

「職場はどう？」
「んー、覚えることたくさん」
「貞広……職場でそんな返答はしてないと思いたいわ姉として」
「大丈夫大丈夫。姉ちゃんこそ、実家に帰ってこれないほど忙しい？」
「人事は春先が忙しいの母さんだって分かってるはずなのに。父さんと温泉でも行くよう言って」
「こないだの週末行ってたよ。だからオレのご飯なくて困った。あ、そうそう、その週末に育子さんとご飯食べ行ったけど、最近姉ちゃんに変化が無いってぶちぶち言ってたよ。で、例の課長さん、元気？」

一気に重ねてきた話題を振られてもあっさりと流せばいいのに、数日前にあった出来事が脳裏をよぎって、返答に迷った瞬間に食べていたサラダが妙に喉に当たって、むせた。

「何なにー、むせちゃうほど何かあったの」

咳を軽く堪えたせいで余計に言葉が出ない。否定の手だけぶんぶんと振ってしばらく咳き込んだ後、喉を落ち着かせる為に少しさめたスープを口にする。

「変化は、無くていいの」

「ふーん。姉ちゃんのそれは、何かあったってことだろね。まだ育子さんにも言ってないんだ。で、何？　告白でもされた？」

直球で聞いてくるこの弟のことを、素直で羨ましいと思ったこともある。私のようにひねくれていない真っすぐな所は好ましいけれど。急に食べにくくなった目の前の料理をつつきながら、ガツガツと食べ続ける弟を睨む。

「されるわけがないでしょう」

「なんで“わけがない”のかなあ。否定するほど何かがあったと勘繰られるよ。てかありましたって言ってるようなもの」

「私の事はいいから。それより貞広はどうなの。社会人になったら彼女と遊んでる暇ないでしょ。ちゃんと構ってあげてるの」

「わー、姉ちゃんから恋愛話を振られるとは……」

口元をニンマリという言葉が相応しいほど口角を上げた弟の顔は、昔から変わっていない表情の一つかもしれない。何よ、私が恋愛話、振っちゃいけないわけ。

「何か……何か給料が出た時にプレゼントとかあげたの」
「んー。今はまだだね。男にもね、タイミングってものがありますから」
「ふーん。指輪とかあげたことあるの」

さり気なく、何の含みもありませんという声で尋ねたはずなのに、貞広がニヤリと意地の悪い顔をした。それに気付かないふりをして、目の前のサラダを一口、食べる。

「指輪ねえ。高校の時だったらカジュアルリングを交換してるトモダチがいたなあ。シルバーリングは大学時代にもらって嬉しかったけど」

あんたの貰って嬉しかった話を聞きたいんじゃない。このバカ貞広。

少し間をおいて大盛りのメイン料理を食べ終えた貞広が、食後のコーヒーを飲みながら暗くなった外に視線を送って言った。

「指輪をあげたことは誰にも無いね。人それぞれだとは思うけど、オレは指輪って結構意味のあるプレゼントだと思うし」

意味のある。

あれは、何の意味があるんだろう。

キラキラと光るラッピング。数日前からサイドボードの上に置かれたままの、まだ開けてもいないあれはどう考えても指輪の包み。

あのまま置きっぱなしにしました受け取りませんでした、というほど酷(むご)くなれない自分がいる。というより、あんなの、無視できない。

何とも思っていない人からの物だったら、きっとすぐに突き返せ

る。でも、課長からの物は、今の私には無理だ。それにあんな渡され方したら、突き返す間もない。はず。返したくても相手は一週間の出張中。とりあえず、ウチに置いておくしかない。はず。

「姉ちゃんさ、前の彼と色々あったから、考え過ぎてると思うんだよね」

入れ直してもらったコーヒーを飲みながら、貞広がポツリと言葉を出す。この子にも心配をかけた。もう大丈夫だよ安心して心配しないで、と言いたいのに。

「オレはさ、自分の気持ちを直球で話す人間だと思ってるけど、こないだの課長さんはあんまり自分の気持ちを言葉にするの上手じゃなさそうかな、って思ったんだけどさ。で、姉ちゃんもジリジリつつかないと自分の気持ち言わないし。育子さんに追い詰められなきゃ駄目な人でしょ？」

「駄目な人って何よ」

「でも男も結構臆病だから。言われなきゃ言えない時だって、あるんだよ。だから、恋愛はお互い頑張らないとね」

誰に対して何の目的で、という説明なしに話す弟の言葉は、生意気にも私の心に響いた。

＊　＊　＊

明るい声でじゃーねえ、と言って帰っていく弟に軽く手を振って、部屋の鍵を開ける。

恋愛。あまりよく意識した事が無かった。

カッコいい顔だったり渋めの服が似合っていたりする人を見て、あんな人もいいねなんて噂話をしているだけで通り過ぎてきていた。見る人はテレビの中のアイドルと同じ。相手の気持ちが自分と同じ重さになる日がくるなんて、きちんと考えたことも無かった。

あっという間に過ぎた、友達と遊んだ十代。仕事が楽しくて、でも挫折も味わって苦しさも心の奥底に沈めた二十代前半。色々な事に慣れて、変化の止まった、二十代後半。

部屋の明かりをつけて、鞄を下ろして部屋の隅に置かれたソファに身体全体を沈める。そして、視線を反対側の壁に置かれたサイドボードにやる。

初めてもらった、男の人からの指輪。

――こっちからはもうここまで。

この指輪は、彼の意思表示？　言葉には出さずに、伝えてるつもりなのだろうか。

「言われなきゃ、分かんないっての」

一人、部屋で呟く。

――言われなきゃ言えない時だって、あるんだよ。

それは私も同じだ。私も、伝えていない。怖い、といつまでも自分の過去に怯えて縮こまって、相手の反応を見て。

二ヶ月、必死で逃げた。この気持ちを抱えたまま、色褪せるとしても、このまま逃げ続けて生きていくのだろうか。何の変化も無い、二十代最後の年にする？　そしてこのあともずっと、変化のない人生にする？

左手の中指にはまっている自分の指輪を天井に向けてかざす。マ

ニキュアの塗られていない地味な手に、装飾が一つ。
この手を伸ばしたら、何かを掴めるんだろうか。
でも、まだ怖い。私が手を伸ばした時、元彼には酔いに任せて押し倒された。夢見る時には、ならなかった。
私のせいだった？　ちゃんと言わなかったから、私が悪かった？
その気もないのに、付き合ったことにしていた私は酷い女だった？
後悔しても仕方が無いけれど、自分を責める声は時々聞こえてくる。
でも、私だけが悪いわけでもない。それはどんな問題でも言えることだ。だから、責め過ぎてもいけない。でも、教訓は得られる。
でも。

「……苦しいなあ」

伸ばしていた手の甲を両目に当てる。

――絶対何もしない。

信じて、いいだろうか。
今度手を伸ばした時、どうなるんだろう。
ここまで逃げても、彼は私に向き合ってくれているように思う。
面倒臭い女だと思えるのに。トラウマだってあるし、貞広のように素直な言葉だって、出せないかもしれない。嫉妬だってするし、自分の気持ちを優先するような所だってある。
溜息が出る。
でもきっとそれは、彼にだってあるはず。
ここまで逃げる私を追いかける人。結構ストーカーの性質があるのかも。一緒にいたら、案外彼の方が重かったりして。
ふっと吹き出して笑った拍子に、色々な気持ちを含んだ涙が一筋こぼれた。

第２３話

「おはようございます、係長ー」
「おはよう、赤堀さん。今日は早いのね」
「だって今日の朝礼で六月の中間報告しなきゃいけないんです」
「……まだまとめてなかったの」

社員ＩＤをかざして入口を通る。おはようございます、と言う明るい受付嬢の挨拶に応えながら、後ろの赤堀さんを見ると、首を軽く傾げながら笑っている。その笑顔には誤魔化されません。

「係長こそ、いつもより遅くないですか？」
「うーん。ちょっと迷ってたら遅くなっちゃった」

何を迷ってたんですか、という赤堀さんの問いに答えることなく、ちょうど下りてきたエレベーターに他の社員と共に乗り込む。
人事のフロア下の社員たちが各階で降りて行き、七階でまた止まり数人が降りて行く。そして早朝にもかかわらず七階から乗り込んで来た人間と目が合う。

「おはようございます、鈴木課長」
「出張お疲れ様でした」
「……ああ」

赤堀さんと交互で挨拶をする。口元に手をやりながら奥に入ってきた課長は背広を着ていない。

「出張明けですか」
「あ、ああ。仕事が押してさっき朝一の新幹線で帰って来たばかり

だ。コンビニ寄る間もなかったから、食堂のカップラーメンでも買おうかと」
「朝から身体に悪いですよ。十五階に行くくらいなら外のコンビニでおにぎりでも買った方がよさそうですけど」
「コンビニの飯は飽きてきた」
「そういう問題でもないかと思います」

課長の返事にちょっとキレが無いように思えるのは、私が普通に話し過ぎているせいだろうか、それとも彼が疲れ過ぎているせいだろうか。そんな私たちの会話に何の口もはさまず、でも何か言いたげの笑顔で少し離れた所に立った赤堀さんの顔は、見なかった事にする。……追及が怖い。

九階でエレベーターが止まり、また一人降りて行く。エレベーターのボタンは次の十階と十一階、十三階、そして課長が降りるはずの十五階が押されている。エレベーターの奥に私と課長、少し前に赤堀さんと他数名。

迷ったけれど、こんなタイミングで会えた。今を逃したら、どうやって切りだしていいのか分からなくなるかもしれない。

散々朝迷ったんだから、もう、真っ向勝負。

この後どうなるかなんて、考えない。

真っすぐ前を向いたまま、右手を、隣の人間の左手に軽く当てた。課長の手が一瞬驚いたように小さく跳ねたのが分かった。

それでもその手を追いかけて、そっと人差指を課長の小指に絡ませる。いまの私の心臓の音がエレベーター内に響くとしたら、この密閉空間では我慢できないほどとてつもない大音響である事は間違いない。

でも、こうしないと伝わらない。

だから、今度は私から。

小指から私の心臓の鼓動が聞こえたらいい。ほんの少しでも、私の気持ちが伝わったらいい。そう思いながら、自分の右手の甲を課長の左の掌に押し付けた。

長いように思えた一拍の後、課長からぐっと右手を包み込むように握られ、強めのその感覚にほっとした自分がいた。そして器用に彼の中指と親指が私の中指を手繰り、確かめるようにそこにはまっていた指輪に触れる。

思わず彼の小指を強く握り締めた。私よりも大きな手の彼からしたら私の手なんて小さなものだろう。そんな大きな親指が、ゆっくりと指の付け根から指輪を越えて中指の関節までを何度か往復した後、そのまま私の右手の甲を包むように指を絡まれて手を繋がれた。

……ちょっと。自分からした事とはいえ、継続されるのは流石に恥ずかしい。

それでもその状態のままエレベーターは十階を過ぎ、人事フロアの十一階に辿り着いて、扉が開く前に軽く揺れた。

後ろ髪を引かれる気分ではあったけれど、一先ず私の返事が伝わったなら、もういい。軽く握っていた小指から手を外して、開いた扉に一歩踏み出した赤堀さんを追おうとしたのだけれど。

「無理」

「え」

手が外されることはなく、繋がれたままの手に目をやって彼を見上げて、茫然と扉に目をやると、「ええー！」と目を見開いて叫んだ赤堀さんの姿はエレベーターの扉が閉じて遮り、見えなくなった。

「ちょ、ちょっと課長」

「だから、今は無理」

何が無理なのか説明もなく、しかも十三階で降りる予定の年長の

社員がこちらを見てるにもかかわらず手を繋がれっぱなしって！
社内恋愛は禁止されてないけど、この羞恥プレイはない！　こっちは恋愛ビギナーだって分かってるでしょ！？　多分！
結局私が指を解こうとしても少し痛いほど握られたまま十三階に辿り着き、「若いねえ」と笑ってつぶやいて降りていった社員さんには俯いて謝るしかなかった。横の人間は平然と笑顔と分かる声で「ありがとうございます」などと答えているのがまた恥ずかしくて、手を解こうと必死で距離を取る努力をしたけれど、握られた手はそのままだった。
押されたボタンの最後、十五階に向かうために扉が閉じた瞬間に叫んだ私は悪くない。

「課長！　もういい加減離してください！」
「もう誰もいないからいいだろ」
「よくない！　もう、もうこんな風になるならしなきゃよかった！」

恥ずかしさのあまり、声が震える。半泣きになっても手は離してもらえなくて、十五階に辿り着いて変形的に繋がれた手を子どものように引かれながらエレベーターを降りる。

「ご飯……食べてきて下さい」
「それどころじゃない」

引きずられるように食堂の奥に連れて行かれる。ちょっとちょっと、どこ行くの。
机や椅子の並んだフロアを横切り、奥にあった扉を開けて屋外に出た。食堂の外で食べれる所があるのは知っていたけど、利用した事は無かった。禁煙だけど、ある意味喫煙場所のような所になっていたから。
風が吹いている。早朝の、太陽の光を少し含んだひんやりとした

風。その風に前髪が煽られてきっと額が全開で見えている。折角セットした髪はもう一度やり直さなきゃいけない。
そんなことを考えている余裕はないはずだけど、手を繋いだままの人からこんな至近距離で見つめられていたら、身嗜みが気になるのは当然だ。なんでこんな所で。

「これをしてきたってことは」

唐突に、繋いだままの手を少し持ち上げられる。
大きな手に繋がれたままの小さな私の手から少し覗いている、プラチナの台座に乗せられたほんのり桃色がかった真珠。私が日頃しているピアスと同じ、真珠。それが太陽に照らされて、輝きを増した。
返事を期待されてる？　でも課長だって何も言ってない。でも、お互いの気持ちは伝わったはず。

「そういうことだろ？」
「……そういうことでしょうね」

相変わらず言葉は曖昧だ。けれどお互い様か。

「……随分と待って、待って」

繋がれたままの手から見える真珠に目を向けていたら、手は更に持ち上げられていって、その手を追いかけるように視線もそのまま上げて行ったら、少し風で煽られて下りてきた前髪の奥に見える黒い目とかち合った。

「待ち焦がれ過ぎて……」

真っすぐに向かって来る視線から目が外せない。繋がれた手がどこに向かっているかなんて、絡んだ視線の強さのおかげで気にする間もなかった。

「こうしてるだけで焼き切れそう」

呟くように言った口元に、真珠のはまった中指がスローモーションのように向かっていくのが見えた。

絡んでいた視線が、課長が一瞬目を閉じることで、切れる。そうして中指の関節に感じた感触。

触れた唇。

指の温かさとまた異なる、温度。柔らかさ。

そうして再び開かれた、黒い目。離れて行く温度。

「和子」

ドン、と何かが落ちてきた気がした。

心臓が、痛い。耳が、手が、指先が、どこもかしこも。

熱い。

「ぁ」

足から力が抜ける。繋がっている右手で課長の左手をぎゅっと握りしめて落ちそうになる身体を支えようとしたけれど、どうにも無理があった。空いている左手をどこかに当てたくて、でも目の前の身体に置くなんてとても出来なくて、でも思考は止まっていて、言葉も出なかった。

「悪い」

聞こえてきた言葉と同時に左腕を持たれて、身体を支えられる。そうしてゆっくりと地面に下ろされた。

「腰、砕けたな」

くすくすと笑う様な声が聞こえてきても、唸るしかない。これが腰が砕けるって言うのか。確かに、どう頑張っても足に力が入らない。

何もかもが初めての体験。

迷って逆らって逃げて、それでも手を伸ばしたかった。変化を恐れる自分がいても、構わなかった。

先の見えない展開を、ただただ抱きしめたかった。

第２４話

「もう、て、離して」

真っ赤になっているであろう顔を俯かせて呟くけれど、ヤダという声で一蹴される。もう、ほんと勘弁して。

課長は座りこんだ私に合わせるように胡坐を組んで私の目の前に座っている。右手は向き合った姿勢に合わせて指を絡め直され繋がれたままで、どさくさに紛れて左手まで手首を掴むようにして握られていて、もうどうしようもない。何にしても、力の入らない状態では動きようが無いけど。

「手、繋ぐだけでもう駄目か」

「……繋ぐだけじゃなかったでしょ」

「そうだったか？」

「経験値なくて、すいませんね」

「誰と比べてんの」

「一般論です」

「それ、忘れれば？」

忘れる？　俯いたまま首を傾げると、左手首の袖口を宥めるように課長の大きめな親指が往復する。その何気ない接触に、感覚的にも視覚的に見ていられなくて目を逸らす。

「和子のペースでいいだろ。身体的な成長期が人それぞれあるように、こういうことだって違ったっていい。人と比べることじゃない」

「……そういう課長は随分経験豊富なご様子ですね」

「だから比べんな」

ホッとしたせいかなんだか急に会話が増えた。肝心な事は言葉にしないくせに。……お互い様だけど。
最初の時のように、気安く、気軽な会話と私を気遣う言葉。課長と気付かず過ごした時間に示された優しさをふと思い出す。
不意に、手や指を握っていた力が強まって、課長が肩を下げながら大きな溜息を出した。

「出張、疲れました？」

いや、と否定の声はくぐもって聞こえる。急に変わったその雰囲気にやっと頭を上げると、肩を下げたまま顔を横に向けている課長が見えた。……あれ、耳、赤いのかな。

「返事、もっと待つかと思ってたから……予想以上に早くて動揺してる」

ええと。すみません、と謝った方がいいのだろうか。
何と言っていいのか分からず、話題を求めて思考を巡らしたけれどこういうときほど思い当るものが無くて、ちょっと困る。沈黙を保ってこの状況を受け止めていたけれど、しばらくすると握られていた手や腕がちょっとだるくなってきて身じろぎした。

「……悪いけど、まだ手、離したくない」

そう言って、課長は私の左手首を持ち直してゆっくり自分に引き寄せた。
止める間もなく私の指先は課長の顎に触れ、そのラインをなぞるようにして耳元に、当たった。
指先から伝わってくる感覚に、震える。それを察した課長に目を合わせられる。

「俺が怖い？」

ほんのり赤い耳をした課長が、少し困ったような優しげな眼差しで聞いてくる。

初めて見る、その顔。いつからそんな柔らかな顔で見てくれていた？　そんな気遣いに、心が震える。でも、真っすぐになんか、伝えられない。そんな表情も、あまり見ていられない。

「怖いって言ったら、離してくれます？」

「本当なら。今のが照れて言った台詞なら、許すし、離さない」

「……そういう言葉、言うのやめてくれませんか」

「敬語やめたら、今だけやめる」

今後も言われるのか。課長から指輪をもらって、相手からリアクションを起こされたはずなのに、こちらから告白でもしたかのように私の分が弱い気がする。それが妙に悔しくて、悪戯に左指のすぐ側にあった耳を少し強めに引っ張ってやる。

一瞬眉をひそめた課長は、引っ張った方向に頭を傾けながら私の左手首を持つ手に力を入れ、私の掌が自分の首筋に当たるように押し付けた。ぎゃー！

「掴まれてて分が悪いの分かってるのにそういうことするからこうなる」

「わ、わかったっ！　わかったから、離して！」

「いやだ。早く慣れて」

「無理っ」

「今まで少しずつ慣らしてきてたろ。その延長線上にあるだけだから、早く慣れろ」

「な、慣らすって何！？　別に慣らされてないから！」

「こっちからどれだけ触れたくったって我慢してたと思ってんだ。看病でうちに来たときなんか最悪だった。風邪引いてたって抱きしめるくらいしたって良か」
「い、わ、わわわーわーわあ！」

男らしい台詞と近すぎるこの距離に、掌から伝わる熱に、どうしたらいいのか分からなくて、とにかく課長の声は聞いてなんかいられない。自分の可愛げのない叫び声で聞こえない状況にしたいけど、結局息が切れて呼吸している合間にまた聞かされる。

「男慣れしてないなんてそっちからしたら恐怖の対象だろうけど、こっちからしたら慣らしたくてギリ限界の話だから。メアドもらうだけでどれだけ遠回りしたと思ってるんだ」
「も、勘弁して……」

身を捩ってもこの状況からは逃げられない。
思い切り引っ張ってしまえばこの腕は外れるかもと考えて行動に移す寸前、それでは自分から課長を引き寄せることになるとどこか冷静に考えた自分がいた。無理！
そうして左手は課長の首元、右手は手を繋いだままで、しかもさっきから気になってたけど、親指で右の掌撫でるの、やめてー！

「いいのか、今を逃したら俺がどれだけ苦労して“薮田さん”の気を引こうとしてたか、言わないぞ」

気を、引く！　そんな率直な台詞、今言う！？　き、聞きたいけど、聞きたくない。皆どうやってこんな時間過ごしてるんだ！　世の中のカレカノの皆さんに対策を聞きだしたい！

「いいっ、知りたくない！　私だって、言わないから！」

「……それは困る。俺は聞きたい」
「言わない！」

何で私の気持ちを言わなきゃいけないんだ。って、カレカノになる時って、そういうの暴露し合うものなの！？　お互い告白の言葉だってないのに、そういうのぼかしてたら駄目なわけ！？
ふーん、と何かを企むような声で間を置かれる。ち、沈黙が、苦しい。今日になってもう何度目かわからないほど思う。もう、やだ。

「じゃあ、今は言わなくていいから、抱きしめたい」
「じゃあって何に対する接続詞よ！　今も何も、言わない！　しかも何どさくさに紛れて抱きっ、抱きっ！」

さっきから地面に向かって話してる自分がいる。床が鏡だったら、馬鹿みたいに真っ赤な顔した、めちゃくちゃな顔した自分が見えることは間違いない。
どうしよう、そんな展開、無理。た、試してみたいけど、こんな急には無理。って何抱きしめられる事前提で考えてるの私！
今までまったく考えたことが無かったわけではないけれど、具体的にここまで考えたことはない。目の前の人に興味はある癖にいざ言葉にされると、って、何でこう肝心な事は言葉にしないのに、どうでもいい事は言葉にして人を追い詰める訳！？

「和子」

さっきもそうだったけど、いつの間にか人の名前を呼び捨てにしている課長が、身体を起こしながら繋がっている両手を引っ張るようにして私の身体を引き寄せる。座っていた身体が、持ちあがる。
その力に、感覚に、無意識のうちにざっと背筋に鳥肌が立った。

「い、いやだ。こわ、い……」

掴まれている手が震えだしたのが、自分でも分かった。課長にも、それは伝わっているはず。

「悪い」

言葉と同時にすぐに手は離されて、ぐっと握った拳が口元に運ばれていく。

「……ちょっと、いやかなり嬉しくて、調子に乗った」

赤かった顔も一瞬にして青ざめたのに、嬉しくて、の言葉に気持ちだけは少し緩む。それでも手を離されてほっとした自分がいた。背筋に走った覚えのあるぞくぞくとした感覚も、簡単には消えてくれない。

緊張なのかその他の理由なのか、少し冷えた指先を自分の手で包む。

悪かったともう一度言われ、あっという間に上がっていた気持ちがしぼんでいく。ああもう、面倒臭い身体。

「自分のせいだって思うなよ。俺が分かってたのに、制御しなかった」

「……そういう言い方、しないで」

「そんな風に否定されないよう、動くから」

その言葉に目を上げて課長を見る。何かを決意しているような硬い表情と向き合って、否定しようとした言葉を飲み込んだ。気を使われるのが、辛い。だけど仕方無い。だけど、辛い。

そのまま立ちあがって腕時計を確認した課長が「そろそろ時間だ

な」と言って扉に戻っていく。両手を組みながらその後を追って、またエレベーターが昇って来るのを待った。
ポケットに収まっている課長の両手。さっきまで繋がっていた手の温かさはもう消えている。
我慢に制御。どれだけ課長が自分を抑えていたのかを、少しだけ垣間見た気がした。身体だけが目当て、なんて言葉も浮かぶけれど、そんな消極的な言葉でこの人の感情を計りたくない。
だって、私だって、手を伸ばしたかった。セクシャルな意味が全く無いとしても有るとしても、気持ちも身体も、近づきたくなるのは……きっと同じ。
鳥肌が収まってきて、気持ちの悪さは消えはしないが薄らいだ。まだ怖さは奥底に残っているけど、ここで引いたらもしかしたら伝わらないものがあるかもしれない。もう、ここまできたら、止まりたくない。
手を伸ばして課長のワイシャツの袖を掴む。ゆっくりと課長が振り返った。また少し強めに引っ張って、ポケットから抜け出た右手に両手を添える。

「な、慣れってことで」

これ以上は言えないけど、今これ以上の接点を持つことは無理だけど。
でも、分かって欲しい。
今まで我慢して制御してくれてたなら、もう少し付き合って。私が慣れるまで、我慢して。
あの時のように私がついてくるのを、
お願いだから、
待っていて。

「なあ」

添えていた両手で課長の四本の指を二本ずつ持って、開いたり閉じたり。エレベーター、遅い。自分から掴んだ訳だけど、もう離してもいいですか。

「なあ」
「……なんですか」
「何でその指なんだ」

は？　と視線を上げるのと同時に遊んでいた右手を取られる。そしてすぐに課長の左手が伸びてきて、中指から真珠が外され、ゆっくりとはめられていく、

――薬指。

くるりと左右に回されて、それから柔らかな指の内側を課長の指が滑りながら離れていった。

「この指じゃ少し緩いのか。指、細いな。また直しに行こう」

そうしてまたポケットに戻って行った課長の両手。やっと来たエレベーター。中に入って開くボタンを押しながら、私を見た課長。にやりと笑った、その表情。

「――――――！　一人で降りてっ！」
「やだ」
「何でこの指！？」
「受け取ったんだからそこだろ」
「たー！　たたたたただの指輪でしょっ！？」
「いや、それなりの値段が」
「違うっ」
「その指の意味、聞きたいのか」

「……言いたいの？」
「聞きたいんだろ」
「……なんでいきなりここなの」
「この年齢で指輪渡すって言ったら、俺はそこまで考えるけどね。何、ただのオツキアイでいいのか」

片方の口元を上げて余裕の表情を浮かべた課長に横目で見られる。何でそんなに飄飄としていられるんだ。
二人の間柄を示す指輪のはまった指。オツキアイ、なんて言葉。返す言葉も無く、ただただ身体を熱くする。
手を繋がない適度な距離で並んだ私たちを乗せて、エレベーターの扉は閉じた。

第２５話

エレベーター事件の目撃者は、赤堀さんと十三階の年長社員の二人だけだと思っていたら、十一階で例の……手を繋いだ状態を数名の同僚に目撃されていたらしい。

赤堀さんは朝から尋ねてくること無くずっと沈黙を保っていて、それを教えてくれることも無く、ちょっとそんな赤堀さんにビクつきながらも仕事をして、残業も無くあっさり終わってしまったジャスト五時。

「それで、いつからお付き合いしてたんですか？　係長ぉ」

「やっぱりあれそうだったんだ！」

「え、何なに、薮田係長誰かと付き合ってんの。誰だれ」

更衣室でもなく、個人的にでもなく笑顔で問い始めた赤堀さんに乗って同僚が私の机周辺に集まりだす。

仕返しか。これは何も話さなかった私への仕返しなのか、赤堀さん。

妙な汗が出る中で何とか表向きの自分を立て直して、自分の席から転がしてきた椅子を使って私の目の前に鎮座した赤堀さんを睨む。

「赤堀さん、そういうのは本気でやめて」

「だって目撃者いっぱいですよ？　ここでちゃんと言っとかないと、社内中広まりますよ？　ねー」

「ねー」

「本当にそうだったんだ」

「えー、だから誰だよ」

「ほら営業一課の」

「ストーップ！　ストップー！」

赤堀さんが立ち上がって小さな体から伸ばした両手を振って、盛り上がる同僚を諌める。どっちの味方なんだ！

「さ、ご自分で紹介して下さいね。そしたらここのフロアで止めて差し上げます」

……にっこり笑ったその顔は、敵だった。やっぱりこの子は根に持ってる。

頭を両手で抱えながら睨んでも、赤堀さんの笑顔も同僚の輪も、跳ねのける事は出来なかった。あの記号、再び。

ｏｒｚ

＊　＊　＊

「それで遅かったのか」

「……課長のせいですからね」

「そっちだろ」

「もう！」

解放されるまでに結局一時間。オツキアイ宣言なんて恥ずかしい言葉は辛うじて逃れることが出来たけれど、誘導尋問で課長の事は言わされた。でも他言無用！　と睨みを効かせて脅し（言葉だけでは無理だったので後日開かれる人事課内の飲み会費用の半分を一人で持つ事に。おかしくない！？）、その後課長からメールが来ていたのは分かっていたけれど赤堀さんに拉致られ、職場近くの喫茶店で個人的に追及されること一時間。……疲れた。八時を過ぎていた。

「夕飯、どうする」
「コーヒーの飲み過ぎでお腹いっぱいです」
「俺は腹減った」

私の降車駅で課長と待ち合わせ、マンション近くの店に向かって歩く。道中、携帯メールの音楽が鳴った。ちょっとすいません、と課長に会釈しつつ確認すると、「了解！　ちょうど近くにいるから今すぐ行きまっす！」という内容。

「あ、課長、事後承諾ですみませんが」
「敬語無し」
「夕食、私の弟も一緒にいいですか？」

一瞬の間の後、は、という口をした課長が声も無く呆気にとられた顔をこちらに向けた。そんな無防備な表情も、初めて見るかも？
……初めてとか課長の表情とか、いちいち気にしすぎかなあ。何なんだ私。もう！

「前、私のうちにいた大柄の人間、私の弟なんです。以前売り言葉に買い言葉で、彼だなんて言っちゃいましたけど、あれ違いますから」
「あ……正直に言ってくれただけでいい。わざわざ呼ばなくても」
「私が嫌なんです。私だったら口だけで言われても信用できませんから」
「俺は信じるから」
「だから、私が嫌なんです。ちゃんと……ちゃんとしたいから。もう呼んじゃいましたので、店に直接来ると思います。課長は上にお姉さんが二人いるんでしたよね。ちょっと羨ましいです、私もお姉ちゃん欲しかったから」

いつもそうだったように一緒に歩く、という雰囲気が照れくさくて、自分の弟を紹介するなんていかにもじゃないか、と今更ながら羞恥して世間話で繋ぐ。
だから、私が振る話への課長の反応が薄い事には気付かなかった。
そうして到着した店の前。見覚えのある背の高さの人影。

「姉ちゃん、お疲れー」
「お疲れ様。課長、弟の貞広です。貞広、こちらが、」
「ねーちゃん、まだ課長なんて呼び方してんの。ひねくれてんなー。雪久(ゆきひさ)さんでいーじゃん、ねえ雪久さん」

昔から変わらない、大きな口に笑みを浮かべた表情。真っすぐな、素直な笑顔。家族に見せる、顔。

「やー、ほんと良かったですよ。姉ちゃんこんなんですけど、料理上手ですし、改めてよろしくお願いします。こうしてまた一緒に飲める機会ができて、嬉しいなあ。あ、それで姉ちゃん、いつから付き合いはじ」
「貞広。……鈴木、課長？」

課内で見せる、笑顔を浮かべる。営業モードへ、スイッチオン。
口元に手を当てた課長の姿を、できるだけ冷静な目で見る。弟には見せたことのない営業モードを、お披露目。

「課長と貞広君は……お二人は、私の記憶が正しければ今日が二回目の出会い、だと思うのですが……どこかで、飲み会、を？」
「いや、」
「飲んだと。貞広君？」
「はい！」
「お姉ちゃんね、正直な弟を持って嬉しいな」

「えーと、はい！」
「何時」
一気に声音が変わったのは表情筋が限界を越えたから。姿勢を正して直立不動の弟を、姉の顔で睨む。
「もう半年以上前、です。そういや結構昔だよ……昔、です、ね」
「……どうやってその約束を？」
「風邪引いて帰る道中の課長さんが可哀そうだったから、送りましょうかーなんて声かけて、そんで車内でちょっとしゃべっ……りました……」
そんでケーバンもメアドも交換しましたと呟いた後、顎の下を指先で掻いた弟のその仕草は、困った時や不味い事を自覚している仕草。そして沈黙を保っていた課長がついにクの字に身体を曲げて、だーと低い声を地面に吐き出した。
「貞広、お前帰れ」
「え、まだ夕飯」
「帰れ」
「いえ、結構です。私が帰らせて頂きますから、お二人は引き続き私抜きで交友を深められては。では貞広君は許可があるまでうちには出入り禁止で。鈴木課長――お疲れ様でした。失礼します」
「和子」
「付いて来ないでください。それに、名前で呼ばないでください」
歩きだそうとした私の腕を掴もうとした課長の腕が見えた。もう一度聞こえてきた、私の名前を呼ぶ低い声。逃げていた間、聞きたくて聞きたくて仕方無かった、声。
その手が届く前に振り返って、その声が私を捕らえる前に、眉間

に皺を寄せた課長の顔をきちんと確認する前に、真珠の指輪がはまった指を振り上げる。
小気味良いほどの打ちつける音が、鳴った。課長の頬に振り上げた掌が、でもそれ以上に心が痛かった。
――悔しい。
「このっ……馬鹿っ！　いつから知ってたの！？　私の事、弟から聞き出して、追い詰めて、引っかかって、こんな……これで満足！？」
視界がぼやける。コンタクトレンズは、きっとずれる。
いつか味わった嵐。でもそれ以上に困惑が体中を渦巻いてめちゃくちゃにしていく。心が動いてしまった分だけ、前よりもずっとずっと、切ない。
弟から情報が流れていた、という事実からよくよく考えてみれば、彼の行動にも納得がいく部分が多々ある。
随分私に合わせてくれていた。男性が怖く感じるのは、明らかに自分に触れようと動いてくる時。急な動き。一緒にいる時、この人はずっと私に触れなかった。手はポケットか、口元。どれだけ距離が縮んでも、私から触れることがあっても、我慢していたのは、制御していたのは、弟の入れ知恵か。
姉ちゃん、と近づいてきた図体のでかい、姉を心配して色々動いてくれた弟のボディにも、一発喰らわせて。殴ったこっちの拳（こぶし）が痛い！　まったく！
「馬鹿！」
走り去る時に、あとですぐ行く、と背中を追いかけてきた声。絶対、話なんかしない！　やっぱり、この人とは合わない！　金輪際係わりたくない！

そう思いながら一人自宅への足を速めたけれど、無理だってことは分かってる。
外すこともできない指輪。伝えた温度。伝えられた優しさ。真剣なまなざし。柔らかな笑顔。
それでも、騙した、というより黙っていた、というその事実に、どこか悔しさが募る。今は明らかになった状況に感情が付いて行かない。
それでも。
伸ばしたこの手を戻せないことは、もう分かっているから。

この後。
自宅付近で結局追いつかれてひと悶着起こして、トラウマ持ってる人間捕まえるのに戦略練らんでどうするだのもう俺の事好きなんだろだの、その他にも色々爆弾を落とされ、羞恥のこもった怒りの沸点が異常に低くなっていた私は再度キレて冷戦状態に無理やり入り。
そうして数日後に育子を呼び出して散々愚痴って怒りを発散するはずだったけれど。

「結局、課長さんが頑張ってワッコ落とす為に周りを固めてたってことでしょ。ワッコの反応見ながら徐々に間を詰めた営業一課の課長さんの技を見たね。健気っつーか、用意周到っつーか。指輪まで準備して逃げられないよう包囲しまくりじゃん。何これ、バカップルの痴話喧嘩なんて聞いたって酒のつまみにもなりゃしない」
一蹴されてその場で貞広を使って課長を呼び出され、散々な目に

あったのは、別の話。

第２６話（最終話）

眠い目をこすりながらぺたぺたと裸足で歩きながらキッチンに向かう。

いい天気なのに、寝坊した。もったいない。

とりあえず眼鏡をかけて、おいしいコーヒーを入れよう。半年前に貰ったコーヒーメーカーは楽だし、休日に飲む味としては贅沢だなーと感じる。カフェに行くのが好きだけど、こうやっておうちでのんびりするのもいいなー、と考える時、三十才って色々な事を億劫に思って動かなくなって、出不精になって行くのかな、とふと思う。……私だけ？

そうだ、育子から今日の午後空いてるかってメールが来ていたんだっけ。コーヒー飲みながら返信をしよう。昨日は途中で邪魔されて送信できなかったし。

ついでに遅めの朝食を、いやもう少しで昼食か。パンでも焼こうと準備していると、聞こえてくるぺたぺたという音。

「――はよ」

声と同時に、どし、と勢いよく背中にくっついてきた重さ。そろそろ慣れてきた、重さ。くわ、という音が頭上で聞こえて、欠伸をしたことが分かる。

「……男臭い」

「そりゃまだ起きたばかりでシャワー浴びてない。――昨日の夜、汗かかせたの、だれ？」

私を理由にしないでよ。ていうか朝からそういう話は勘弁して下さい。

邪魔だと言いながら重しを背中に感じつつも移動して、パンをトースターに入れる。伸ばした右手にはまっていない真珠。あれは大事な指輪だから、記念日とか特別な外食時にしか付ける気にならない。

「これ食べたらかけ布団、干してくれない？」
「いやだ」
「今日いい天気なんだから、土曜日くらいやってよ」

そう言いながら、パンが出来上がるまでコーヒーを飲もうとカウンターの中に戻るつもりだったのに、「あのな」と言う不満そうな声と共にウエストに手が回ってきてくるりと身体を返される。急に伸ばされてくる手が、この腕が怖くなくなったのはいつからだっただろう。

ちょっと伸びた髭がきちんと見える間もなく、頭一つ分高い所から顔が近づいて来て、額をごち、と音を鳴らしながら合わせられる。鈍く痛い。コーヒー飲みたい！

「昨日出張から帰って来たばかりだぞ。やっともぎ取った土日の連休。連休！」

ぎゃー、なんて言ってた頃が懐かしい。でも心の中では、まだまだ叫ぶ自分がいる。

こうして額を合わせていても彼の髪が当たる事はない。本当は前髪を少し伸ばして下ろしていたのは好みだったんだけど、「三十過ぎたらもう学生はないだろ」とあっさりと半年前の式の後に切って全体的に短い髪形にしてしまった。もったいない。でもそれはそれですっきりと、精悍な表情に見えるのでいいんだけど。……周りの女子社員の目も奪っておられるようですが。まあ社内で、ベベベベベベタ惚れ的な発言をしているようなので、放置。私より若く見え

るのは癪だけど。
　でも連休。まあそれもそうか。式の準備に長期旅行の確保でお互いその後に随分しわ寄せが来て、式後にこの人は連休なんて取れていなかった。私は取れてたからいいんだけど。
　だからといって連休がどうしたなどという問いかけをするほど、目の前の人間を知らない訳ではない。……問いかけた後が怖いのはもう体験済みだ。
　そうして今の状況を意識しないように余所に思考を向けていたけど、逃げられない腕の中で、もう一度会話も視線も逸らしてみる。

「買い物、行きたいんだけど」
「明日」
「お米」
「明日。今日ないと困るものじゃないだろ」
「……お腹すいたから、とにかくご飯！　コーヒー飲みたいからちょっとどいて」

　顔を何とか逸らして目の前の胸を押してみるけど、身体に回った腕は解けない。妙な歩き方でコーヒーの前まで連れて行かれ、伸ばされた腕から届けられたコーヒー。あ、一口飲まれた。奪い返しながら飲んだコーヒーはおいしかった。赤堀さんたち同僚には、本当にいいものを戴いてしまった。

「和子サン」
「……何」
「いい加減、慣れてクダサイ」

　指先で頬を撫でるその動きが、ただの接触ではなく昨日の夜を浮かび上がらせようとする。
　そうやって追い詰めるのやめてよね。持っていたコーヒーをカウ

ンターに置きながら目の前の胸に額をゆっくり押し付ける。慣れた香り……匂い？
それでも久々に朝からこんな雰囲気を出されるのは、どう頑張ったって慣れない。やっと半年。まだ半年。
頭上に感じるちょっとした重さ。されている行動で次にどこにその柔らかな重さが来るのかは、知っている。慣らされた。ちょっと……期待もする。
わざと耳元で鳴らされた音に、温かなコーヒーを理由にするには無理がある体温の上がり方。そのままそれが耳元に触れながら「なあ」などと話されたら、背中に伸ばして回した腕に余計力がこもる。そうでなくても分が悪いのに、もう、やだ。

「なあ」
「……」
「わざととしか思えないって言ってるのに、まだ逃げんの」
「わざとじゃないし」
「照れか」
「だから言葉にしないでってば！」
「照れたところ見せろ」
「また殴るから」
「殴らせるくらいで見れるなら幾らでも」

だめだ。このモードに入ったこの人に、勝てた試しが無い。動揺した顔や困った顔って、私一人ではそうそう見れない。
お義姉さんたち呼んだら絶対見れるから、そのうち休日にいきなり呼んでやる。

「余所事考える暇は、今だけな」

この後覚えとけ、なんて嫌な台詞を言いながらまた少し屈み込ま

れて、首元にいつものように軽く唇を当てられる。離れて行く時に見えたにやりと笑った顔が何とも憎らしい。いつでも先手を取れると思うな。

パンが出来上がった音がした。でも私はトースターには向かわず、カウンターの向こうのテーブルにコーヒーを二つ持って移動する課長を、……いや、雪久さんをぺたぺたと追いかけて、コーヒーがテーブルに置かれたのを確認してから朝だけかけている眼鏡を右手で外しながら背伸びをする。

コンタクトをしてない目で、はっきりと見える距離まで近づく。彼のパジャマを握りしめた私の左手の薬指に光るシンプルな指輪。条件反射で私の背中に回ってきた左手にも、サイズの違う同じ指輪があるのは、当然。

目を閉じながら、彼が何か言う前に柔らかなそこにｃｏｎｔａｃｔして、封じる。

追いかけてくる前に何とか離れて「おはよ」と挨拶した瞬間、挨拶の言葉以外のｃｏｎｔａｃｔが返される。

その合間に見えた黒い目は動揺していたように見えた。貴重だ。

そうしてそこで一気に思考は止まる。お腹が空いたけど、今はこの手を伸ばしたい。伸ばして欲しい。

私の、愛する人に。

Ｆｉｎ

拍手小話改変　前編（前書き）

以前拍手小話で掲載した改良版しかも前後編で長くなりました、お得！（え）。修正してたら第三者視点ついでに完結後の二人も入れてしまえ、と。まあこんな感じに若干やっつけ仕事的ですが、お楽しみいただければ幸い。

拍手小話改変　前編

休日のビジネス街は、当店へ来店される客層が若干変わる。

「いらっしゃいませ」

店長がサイフォンで淹れているコーヒーの香りが脳内細胞を活性化させてくれている中、女性がご来店された。

軽く外に視線を送りながら入って来られたので、同伴者でもおられるのかと思ったけれどそうではないようだ。お一人様、ご案内。

耳横で緩く結ばれたロングヘアーを揺らしながら、少し不安そうな目をこちらに向けられる。なになに、お困り？

ミルクティ色のゆるふわウェーブの可愛い系。えっ、別にいつもお客様ウォッチをしてるわけじゃないですよ。でも、可愛い子いたら、ねえ。

薄目のアイメイクは二重を丁度よく引き立てて、目を大きく見せるでもなく縁取られた雰囲気は柔らかでよく似合う。若さ溢れる感じはなくても夏に似合うグロスは瑞々しい。薄手の袖なしシャツに軽く羽織った白のカーディガンや膝がぎりぎり見えるスカートって組み合わせはよく見るけど、そこから見える腕や膝小僧が憎いね。でも折角のふんわりプリーツスカートが少し皺っぽくなってて、色がグレーなだけにくたびれて見えて、残念ー。はい残念がっかりー。

「あの、すみません」

おっと。困った様子の声で、話しかけられる。その表情は俺の琴線に触れるなあ、喜んで笑顔で応えちゃうよ。

「はい、どうされましたか」
「こちらのお店で待ち合わせをしているのですが、三十代くらいの男性で眼鏡をかけた方っておられますか？」

接客は即時の対応がベストと考えている俺だけど、その問いには一瞬間が空いてしまう。あれと、あれと待ち合わせですか、貴女が。にしても何で店内を睨むんですか。仇とでも会うんですか？
細い腕と指が流している前髪を軽く整えるために動く。やー、本気？　結構仕事できそうな雰囲気のしっかり目の方に見えますけど、オフの日はそっちに行っちゃうんですか？

「奥に短めの髪の方でそういった雰囲気の方はおられましたが……」

「あ、では行ってみます」

軽く会釈をして引き続き困ったような笑顔を浮かべながら奥に向かい始めた女性は少し足取りがおかしい。大丈夫かなこの人。何か騙されたのかな。
オーダーのタイミングを待つ為に店内に視線を送ると、奥の男が結構大きめに手を振っているのが見えた。どうやら女性に伝えた人間で間違いは無いらしい。でも間違いであってほしかったなあ。奥の人間は彼女が近づいて行ってもまだ手を大仰に振り続けている。おいおい、いい大人が子供じゃないんだから、やりすぎでしょ。やっぱり何か弱みでも握られてんのかなぁ。
でもその女性ばかりを見ていられるほど、暇じゃない。ビジネス街は休みであっても完全休業にはならないのが不思議なところだ。あちこちのオーダーに応えながら席についた女性のオーダーも取る。

ご注文のキャラメルカプチーノを何となく今かなという所で席へ運ぶと、わざわざこちらに顔を向けて微笑んでくれた。俺が来てほ

っとしたって空気だぞー、おいおい。
やっぱりぃ、この席、おかしいんじゃない？　この三十代男の視線はちょっと微妙だ。もしかして見合いとか？　もしかしてもしかして出会い系サイトで初めて会うとか！？　あり得るー！　でも相手のデータ、フェイクだったんだろー。だから彼女、困っちゃってるんじゃないー？　もーどこのサイトから入ったんだよ。貴女ならリアルで見つけてくれよー。
でも話も普通にしているように見えるし、一店員が割り込むような雰囲気でもないし。
と思っていたら男が立ち上がった。女性は座ったまま男に向かって話しているからその背中から表情までは読めないが、男はとにかく嬉しそうだ。
そうこうするうちに男が清算のためレジに向かってきたので、応対する。……おいおい、女性の分の清算はいいのか？　というか、話だけして帰るのか？　チラリと女性に視線を向けたけれど、こちらに背を向けたまま動いていない。
同じく動かない女性に視線を送っていた男がまた席に戻って行って、話しかけながら笑っている。いや、その笑い顔は横から見ても微妙だから。しかも女性は立っている男から少し離れるように座ったまま傾いでいる。拒否ってるでしょ、あれはどうみても。
気にはなったがオーダーで呼ばれたのでその席に視線を移した瞬間、物音と椅子を引く音が聞こえた。店員としての条件反射でそちらに顔を向けると、女性が立ち上がって男と距離を取るように窓際に寄っている。
俺と同じように妙な雰囲気のそこに店内の視線が集まった。
どうしたんだ、と思う間もなく俺の横を通り抜けていく白いシャツ姿のビジネスマンがその場に割り込んでいき、女性を守るように背中にかばいながら三十代男と対峙した。小さな声で話しているつもりだろうけど、酷く枯れた声だからか高音も交じって内容が聞こえてしまった。

「冷静な話し合いには見えないので、失礼だが間に入らせてもらう。――まだ誰にも言ってなかったからこんなことになってしまったが、薮田と私は付き合っているんだ。悪いが引いてくれないか」
「す、鈴木課長！　――やっ、別にそこまで話が詰まっているわけじゃないんで、僕も前田部長が紹介して下さった手前、会わない訳にもいかなかったものですからっ」

をー！　やっぱり見合いか！　しかも内緒で付き合ってた男の乱入！　社内恋愛かープチドラマー！　てかもっと早く気付いてやれよビジネスマン！　しっかし三十代男、声デカイ。

「なら良かった」
「あ、じゃあ僕はこれでっ」

三十代男はものすごい勢いで直角に折り曲げたお辞儀をして慌てるようにして清算にきた。「なんだよ……」と不貞腐れた言葉を出しながらも顔面蒼白と真っ赤を繰り返している人体の凄さを間近で見た。すげー。
清算を終えて視線を上げると、乱入してきた男が女性を見ることなく出入り口に向かってきた。喉を押さえながら若干しかめっ面だ。俺より少し高めの身長、鞄と片手に背広を引っ掛けた雰囲気はまだ若く見える。でも課長って呼ばれてたなあ。なのに、やり手の兄ちゃんが内緒で付き合ってるって何だよ。彼女可哀そうじゃんか。公表してやれよ。
近づいてきた男はやっぱり酷い風邪声で「騒がせてすまなかった」と一言。奥にいた店長にも軽い会釈をして去って行った。できる男は周りにも配慮ですか。なのに、女性は放置、と。おい！　ちゃんと手ぇ引いて連れ出してやれよ！
女性は茫然とした表情で窓から外を眺めていたけれど、少しの間

の後、また睨むような目つきで羽織っていただけのカーディガンに腕を通した。それが彼氏に見せる顔か？　笑ったら可愛いのに、それじゃもったいないなあ。でもこれから修羅場か？　気になる～。

「ごめんなさい、コーヒーご馳走様でした」

「あ、いえ、ありがとうございました。またお越しくださいませ」

女性は少し硬めだったけれど柔らかな挨拶をこちらに投げた後、また無表情とも言える堅い目つきで店を出ていった。ドアが開いたと同時に、妙に間延びした若い男の声で「人事の薮田係長じゃないですか～。どうしたんすか」と聞こえてきた。

女係長かー。できる男にはそういう女が付いていくんかな。

「プライベートです」

その言葉が聞こえてきたのを最後に、扉が閉まる。やー、ドラマの展開が気になるけど、とりあえず、オーダー。

少しざわついた店内はまたいつもの雰囲気に戻って行く。

そうしてまた次の男女を迎える。

「いらっしゃいませ」

喫茶店って、これだからやめられない。

拍手小話改変　後編

喫茶店のスタッフなんてやめられない楽しい、と思ってから早一年。

なのに、年明けに付き合い始めた彼女と些細なことでケンカしたまま迎えた出勤日は、いつもの笑顔を出しにくい。

仕事に影響する恋愛なんて、面倒くさくて仕方が無い。でも、こちらから折れるのも癪だ。

付き合い始めは駄々をこねる仕草が可愛いとさえ思えていたのに、数ヶ月も経つとそれに付け込んで男を操作しようとする女って生き物は自分のことしか考えていないのか、などと苛立たしく思ってしまう。

「いらっしゃいますぇ……」

カランとなった音に反応する俺の声は一段と弱弱しい。彼女の冷たい視線も痛かったけど、店長の視線も痛い。すんません、入社後一年半以上経ちますが、爽やかな五月を鬱陶しく思ってしまう今日の俺には無理です……ドリップ練習も今日はパスします……。

凹んだ気持ちのまま入口にのろりと視線を送ったけれど、ドアを開けた男性のお客様は中々入って来られない。入るか入らないのかどっちなんだ！　はっきりしろ！　男だろ！？　と心の中で叫んでみるが、もちろん表情には出していないつもりだ。

「だから、何でこのお店なのっ」

「和子がどこでもいいって言ったろ」

男性が羽織っていた、くったりしたシャツの、快晴の薄い青空に反抗するような濃紺色がまず目についた。インナーに白Tシャツ、

ダメージ有りのデニムパンツですか。いいですねえこんなビジネス街でカジュアルデートですかそうですか、ちょっとした偏見ですよそうですよ分かってますよ。ご来店どうも。

でもお連れのお客様は当店をご不満のようですね。じゃあ帰ったらいいじゃないか。うちの店長の香り高い脳が生き返るようなコーヒーが飲みたくないなんて、帰れ！　と視線を送りたくなるが、もちろん半眼の笑顔で対応しているつもりだ。

お連れの女性が迷ったまま動かないのを放置して男性のお客様はドアから手を離し、店内に足を進めた。もう一度「いらっしゃいませ」とお声掛けをして、とりあえず男性を空いていた窓際の席に誘導した。カウンターへ戻るために回れ右をすると、入口で躊躇していたお連れ様も入って来られたのが見えた。

花柄の胸元切り替えふんわり大人ワンピにグレーの粗めレースなカーデ。そんな女性は緩いウェーブの髪を抑えるように弄って目線は下、しかもこちらを窺う様な視線。でもそれ以上細かくウォッチする程今日は元気が無い。彼女もあんな視線をこのあいだ送ってきたな……何か躊躇ってたのだろうか。

また少し気分が落ちたけれど店長が別のお客様のコーヒーを抽出しだしたため、いい香りがカウンターから流れてきた。少し酸味の強い香りは店長特製のグアテマラブレンドかなと、そこで俺の脳も活性化する。

そうだよ、俺の対応一つで店長が大切にしているこの店の評判が落ちては堪らない。いつまでもプライベートを引きずるのは情けないですよね、店長！　こんな俺のためにグアテマラを入れて下さったんですよね！（モチベーションを上げたいので自分勝手かつ都合いい解釈は許して欲しいです店長。）

女性客が席に付いて、タイミングを見計らってお冷をテーブルへと運ぶ。ご不満の様子の女性に少しでも当店の印象を良くしてもらうためにも笑顔を心掛けねば。

気を取り直していつもならあまり直接合わせない視線を合わせる

事を意識して笑顔を向ける。女性客から一瞬うろたえたような視線を送られたけれど、はにかんだような笑みを浮かべて視線が逸らされる。

うをー！　はにかみ、キター！　カップルで来店なのに、俺の笑顔にやられたか！？（バカっぽい短絡思考も自分のモチベーションを上げるためなのでこの瞬間だけ許してください彼氏さん。）

「ほらな。覚えてないって」

「……覚えてるけど表情に出してないだけかもしれないでしょ。いかにも彼の心の声が聞こえました風に言わないでよ」

「男には通じるもんがあるんだよ。――加賀が、ここのコーヒーうまいって言ってた」

「……記憶にない」

「確かめれて良かったな」

テーブル席から去り際に聞こえてきた雑談は右から左に流れて行き、オーダーを店長に伝える。コーヒー二つとケーキが一つ。ケーキを白い繊細な器にサーブして、雑用をこなしながら店長のコーヒーを待つ。

いつもの心地よい音楽の中、店内にいるお客様に目を配る。数組のお客様はそれぞれ会話を楽しみ、一人客も本を広げてコーヒーとの時間を楽しんでいる。ふと先ほどの女性客が目元に手を当てて慌てだした。男性は女性の顔に手を伸ばしたけれど、届く前に女性は椅子を引いて鞄を手に化粧室に向かった。

わずかな間の後、男性も立ちあがってカウンターに向かってきた。どうかしたんだろうか。

「すみません、さっきのカプチーノのオーダーの方なんですけど」

「はい」

男性は口元に手を当てながら尋ねるでもなく言った。

「デザインカプチーノって、今やっていただけますか」

「できますよ。いつもできるわけではないんですが、今なら大丈夫ですね」

俺が答える前に、横で作業をしていた店長が答える。そう、うちの店長は時々遊びでやってくれるから常連客は暇な時間帯であれば結構これを注文してくるんだよなー。この人、前も来たことあったっけ？

「じゃあお願いします」

「畏まりました」

作業の手を止めずに笑顔で答えた店長に、男性客は口元に手を当てたまま軽く会釈をして席に戻って行った。いなくなった隙に頼むなんて、小細工じみてんなー。でもあんな風に彼女に隠れて何かをするって、いいよなー。……俺も彼女との付き合い始めは驚く顔が見たくていきなり会いに行ったりいつもしない時間帯に電話したりしたな。

ぼんやりと彼女のことを考えているうちにコーヒーの準備が整い、ケーキと共にテーブルに運ぶ。

「睫毛も何も付いてなかったけど、見間違いじゃないの」

「そうかもな」

「……人の顔なんてまじまじと見ないくせに。アイメイク変わってたって男って気付かないわよね」

「気付くほど凝視して構わないならするけど」

「いい」

「遠慮するな」

「……結構です」

すいませんでした、と何故か女性が男性に謝っている所へ「お待たせしました」と静かに声をかけ、それぞれの前にコーヒーを並べる。もちろん女性の前にデザインカプチーノ。男性にはエスプレッソ。

「すごいこの模様、見て。かわいい……これサービスかな」

立ち去り際に聞こえてきた嬉しそうな声に少し気分が上がる。そうでしょ、うちの店長かっこいいでしょ（別にそうは言ってないけどそう思ってるでしょ思ってあげてくれ）。あとで絶対お礼言って欲しいなあ。店長ああ見えて裏で片手でガッツポーズして喜びますから。そしたらスタッフに上機嫌でコーヒー入れてくれますから！

そんなこんなで気分は持ちあがったけれど、その後正直彼女とのケンカなんて忘れるほどお客様の出入りが繰り返される時間帯になり、タイミング的に俺はしばらくレジ前での業務に追われた。そうして人の切れ目に見えた濃紺のシャツと花柄。

「カプチーノ可愛かったです、ありがとうございました。あれっていつもやってくださるんですか？」

「あ、と、」

レジ入力をしている時に聞かれるとは思ってなかったことを女性当人に直球で聞かれ、思わず「お客さまからのご希望があれば、随時」などと言っていいものか口ごもった時、男性がお金を出してきたので伝票の値段を復唱することで何とかかわす。後ろに次のお客様も並んだため女性は察してそれ以上問わなかった。

「美味しかったです、ご馳走様でした」

女性のお礼の言葉に笑顔で、ありがとうございました。またお越しくださいませ、と一連の締めトークを返そうとした時、何かに躓いたのか女性が突然不自然な動きをしてレジカウンターの横のスペースに向かって言葉もなく倒れ込んで来た。

咄嗟に手を出して倒れてくるのを止めようとしたけれど、女性は倒れまいと思い切り左手をレジカウンターの天板を掌で打ち叩きながら右手でカウンターを握りしめて自分の体を支えた。あっという間の出来事に一瞬茫然とする。随分反射神経いいな。

「っ……た」

「お、お客様お怪我ありませんか！？」

あれだけ派手な音がしたんだから掌は痛いだろう、それにカウンターで胸でも打っていないだろうか。同時に足元をチェックして特に何も置いてはいないことを視認する。怪我していたらどうしよう店のせいじゃないし俺のせいでもないなどと動揺して、女性の様子を見ようと手を伸ばした。

でも濃紺のシャツが俺よりも早く伸びてきて、俺の手と女性の手の間の壁になった。

「何やってんだ和子、大丈夫か。今日はコンタクトしてるだろ」

呆れたように声をかけた男性は彼女に触れるでもなく、それでも気遣う声音がした。

「ご、ごめんなさい、大丈夫です」

もうやだ、と女性の焦って困ったような声にひと安心して、近寄ってきた別のスタッフに目くばせして交代を依頼する。そのスタッ

フと入れ替わりでレジカウンターから出て、掌を痛そうにさすりながらすみませんと連呼する女性を誘導するべく入口に向かう。男性はさりげなくそんな女性の鞄を引っ張って代わりに持ち、フォローしていた。
お気を付け下さいねと声をかけつつカランと音を鳴らしながらドアを開け、外に出る。

「ご迷惑おかけして……」
「お怪我がなくて良かったです。どうぞまたお越しくださいね」

お詫びの言葉を塞ぐように笑顔で次回来店のお声掛けをする。折角いい印象を持ってもらったのに、こんなんで恥ずかしくて来れないなんて思われたくない。もう一回、店長のおいしいコーヒー飲みに来てよ。俺もその頃にはお客様にコーヒーを自信持って出せるスタッフになってるよう頑張るからさ。
女性は髪に触れながら一捻りし、「……美味しかったのでまた来ます」と軽く会釈をして照れたような微笑みを返してくれた。それだけで十分です。

「ありがとうございました」

歩き出した二人の背中にもう一度声をかけて見送る。ああ、今日は本当に空が青い。

「あの時は転んだのに今回はよく持ち堪えたな」
「……」
「ほら、手」
「いい」
「俺が鞄持ってるんだから、手は条件。さっき咄嗟に身体を引き寄せなかったことに感謝して欲しいくらいだな。でも、あれ本気で転

びそうだったら、あとで殴られるとしても抱き寄せるから」
「……」
「手が嫌なら今抱き寄せようか」
「結構ですっ」

そんな二人の手を繋ぐ繋がないの攻防を聞くことは無かったけれど、女性からおずおずと伸ばされた手を男性が掴んだ時、俺のズボンの後ろポケットに入っていた携帯が振動する。明るい日差しの下、取りだした携帯サブディスプレイに薄っすらと表示されたのはメールのアイコンと彼女の名前。

でも、携帯を開かずにそのままポケットに携帯を戻して忙しい店内に戻り、業務を続ける。

きっとメールにはゴメン言い過ぎた、なんて書かれているのだろう。もし書いてなかったとしても、仲直りしたいって言いたいメールだ。さっきの男性がフォローしていたように、俺だって彼女をフォローしたい。俺のこともフォローして欲しい。

何度喧嘩したって、最初彼女の事を好きになったところが消えたわけじゃない。苛々した気持ちは今だって奥底にあるし彼女が我儘を言った理由はさっぱり分からない。けど、ちゃんと時間を取って話そう。

それで何度も好きだって言おう。好きだって言わせよう。

またカランと音が鳴った。

「いらっしゃいませ」

そうして俺の淹れたコーヒーを飲みながら、また二人で一緒に笑おう。

拍手小話改変　後編（後書き）

付き合い始めの二人を見てないけど見てる人、というお話でした。拍手の時の彼をご存じの方、成長ぶりはいかがでしょうか（って全然主人公たち活躍なし！）

全然関係ない人たちの恋バナを書きたくなってしまい……って恋バナ詳細無しですが、皆様の脳内で補完をお願いします（小説の意味なし！）

受付嬢の視線

最初は不機嫌さを目に見えて表わすなんて、随分子供っぽい態度の課長さんだなと思った。

大学時代の友達に話したら、「男なんてそんなもんよ、年上って言ったってそういうとこは変わんないからよく見てみれば」と言われた。

じゃあと素直に受付嬢という職務を活かして出入り口を通る度に観察してみれば、おじさんたちはむさくるしくも可愛く思えてきた。もちろん同期の仲間には言えないけれど。

そんな中、子どもっぽかった態度の課長さんは、色々な意味で人目を引いた。

異例の異動時期、若すぎると揶揄される課長職、発揮される仕事ぶり、無表情とも言える硬い表情の男ぶり、その整った顔が時折子どもっぽく見えたという苦笑。

営業補佐の女子社員が何人か短期間でお近づきになろうとしたけれど、一蹴されたみたい。

私も特に気にしていなかったんだけど、彼が異動してきて三ヶ月ほどだった頃だろうか。

もうすぐ二時になろうかという時間帯に彼と一人の部下が受付前を通った。

いってらっしゃいませと声をかけて送った後、一緒にいた部下の男性が慌てたように立ち止る。背の高いその男性は謝罪の姿勢を取って、エレベーターに向かって引き返していった。

当然待たされることになるんだから、また不機嫌な態度なのかなとちらりと盗み見。

少し離れた壁側で背中を当てて待つ課長さんは右手を口元に当てて、何かを考え込むように外に目を向けていた。不機嫌な様子は見

られない。
身体に沿うピシリとした紺色の背広が良く似合うなとぼんやり眺めていると、不意に身体を折り曲げた。しばらくその姿勢だったけれど、起き上がった時に見えたその横顔は苦笑をこえて思い切り笑いたいのを堪えている、という表情だった。
身体を少し震わせて、軽く握った右手で何度も口元を叩いて、真っすぐな姿勢は少し前屈みで。
五才か六才年上の人なのに、あまり親しげな雰囲気を出さない人なのに、その笑い顔が印象的で、胸が少し苦しくなった。

あの表情を誰も見なければいい。

独占欲にも似たそれを友達にぽつりぽつりと話したら、「頑張って話しかけなさい！」と言われた。
と言われても接点なんかない。でも、少しでも会話してみたかった。間近であの笑顔を見てみたかった。
最初は控えめにでも段々挨拶以上の声をかけていって、出会って一年が経つ頃には受付を通る度こちらから声をかけなくても少しだけ気さくな声をかけてもらえるようになった。

「今から出張。お疲れ」
「今日は来客があるから丁寧によろしく。まあいつも丁寧だとは思うが」
「ありがとう、この間は助かった」
「お疲れ様。……受付で欠伸なんかして、寝不足か？」

他愛のない会話が嬉しかった。だから、もう一歩近づきたくなった。
彼氏持ちの同期に課長への気持ちを打ち明けると、よし！　機会を狙おう！　と受付仲間の数人が協力してくれる事になった。

課長さんたち営業の人たちが外で食事をするという話を聞き付けた同期は、シフトを調整して二人で同じ店に食べに行こうと計画をたててくれた。嬉しかった。受付仲間にごめんねケーキ買って来るからね、と言いながら向かったお店。

数人で食事を取っていた課長さんたちがいる席を通ってお辞儀をする。話の邪魔しないようにしたつもりだったけれど、受付の私たちだと分かった彼らは「お疲れ～」と声をかけてくれて、少しほっとする。

課長さんたちがご飯を食べ終わった時に、話しかける。

そう同期に言ってから注文したサンドイッチは食べきれなかった。緊張で、胸が一杯になる。何て返事が来るのか期待と不安が入り乱れる。

談笑に入った課長さんたちの席に、見計らった同期の子が近づく。親しげに近づいて、何と言ってくれたのかは分からないけれど、課長さんだけを私の席に連れて来てくれた。お膳立てしてもらうのが申し訳なかった。でも。

「……どうした、と聞くのは間違ってるか」

「あ、あの、すみません、来て頂いてっ！」

不機嫌でもなくでも笑うでもなく目の前の席にいる課長さんと二人きりになって、言わなきゃ言わなきゃと頭の中を言葉がぐるぐると回って、でも何と言いだそうかと思っているうちに、緊張で顔に熱が集まってくる。こんなの、もう相手に何を伝えようとしているかなんてバレているに決まってる。自然、顔が俯く。だけど、時間を取ってもらうのも短い方がいい。

「あのっ」

勢いよく顔を上げて視線を向けたけれど、課長さんは口元に手を

当てて横を向いていた。

「あの……」

「うん」

「きょ、今日……いい天気ですね」

「……そうだな」

「打ち合わせ、外ですることもあるんですね」

「まあ、たまには」

「私たちも、たまには外で食べようってなって……」

どうでもいい言葉ばかりが口をついて出てくる。泣きたいような気持ちで課長さんの横顔を見ながら世間話をしていたけれど、課長さんの気持ちは分かってしまう。というより最初から分かっていた事なのに。

先ほどまでいた営業の方も受付の同期もいなくなった店内で過ごした十数分。少し引っ込み思案だと言われる私は結局その場では気持ちを伝えることなんてできなくて、見事に世間話だけで終わってしまった。

情けない気分でケーキを買って、受付仲間の前でどうしようもなく泣けてしまった。そうしてその日は仕事にならず慰めてくれた皆にも迷惑をかけてしまった。業務に支障が出るようなこんな気持ちなんて本当に最悪だ。

どうして休憩中に焦ってしまったのかと後悔して、でも計画をたててくれた同期に申し訳なくて、次は……本当に次こそは玉砕するとしても気持ちを伝えよう、人に頼らず自分できちんとやろうと決意した。

そうして迎えた数週間後。

やっと同じ時間帯に食堂で見かけることができた課長さんたちは窓際に固まって食事を取っていて、思い切って近くの席に仲間と一緒に座る。混雑の中会話が少しだけ漏れ聞こえてくる。

「そういえば鈴木課長、その指どうしたんすか」
「加賀ってよく見てんなあ、女みてえ」
「だってそこまで小指が赤くなってたら気になるじゃないすか。俺昔アトピーだったんすよ、だから痒そうだなって。あ、ちょっと傷になってる。掻いたんでしょ」
「気にしなくていい」
「俺ハンドクリーム持ってますよ」
「マジで加賀って……」
「いらない」

同期の加賀君は意外にも気が利く人で、オリエンテーションのときも少しおどおどしていた私をフォローしてくれたことを思い出す。もしこの後課長さんが一人きりになったらカットバンを渡す勢いで話しかけようか、それともやっぱり終業後に捕まえようかと考えているうちに、課長さんたちは食器を片づけにいってしまった。
どうせもう私の気持ちはあの日にバレてる。なら日を遅らせる分だけ、もう私が耐えられない。
休憩時間内に見つけることが出来たなら、と食堂近くの化粧室を出て、たまたま近くにいた加賀君をつかまえて課長さんのいそうな場所を聞きだす。
そうして向かった会議室はドアが開いていて、課長さんはテーブルに腰掛けて外を見ていた。
癖なのか、口元にいつものように右手を当てて、どこかぼんやりとした表情だった。声をかけようとしたとき、課長さんが口元に当てていた右手を開いて、先ほど加賀君が気にしていた指をじっと見つめた。その真剣な眼差しに、声をかけるのをためらってしまった。
私の知らない課長さんの表情。最初に思った、この表情を誰も見ていなければいい、という感情は今も健在だった。
そうして課長さんがまた軽く右手を握って、赤くなっていると言

われた指の側を口元に運ぶ。
指が当たって下唇が、歪んだ。眉間の皺は見たこともないくらい深くて、怒っているのかと思うほどの近寄りがたさで。
でも、壮絶に、男の色気が零れていた。
ああもう。
静かに、でも急いでその場を離れる。

誰かを苦しむほど思っている人に、私は告白なんて、できない。

それから、大学時代の友達にも受付仲間にも、「玉砕覚悟だったんでしょ！　頑張れ！」と言われたけれど、頑として告白する事はしなかった。ごめんねと苦笑して、手伝ったのにと少し批判の目を向けられて、それでも動かずに数ヶ月が過ぎたある日。
課長さんが人事の係長と婚約した、という話をどこかから聞いた。
あの表情は、彼女を思っていたのだろうか。

告白もしなかった私の恋は、当然片思いのまま過ぎていった。
不完全燃焼は後悔するよと友達に言われた。
でも、後悔はしていない。
あの表情は、きっと彼女はもう見ているだろうけれど、あの時のあの瞬間は、私だけが知っている。
私だけの、課長さんだった。

貴方が、好きでした。

コネクティビティ―1

現在の時刻は十時十分。

待ち合わせの時間は確か、というより間違いなく十時ジャスト。妙にそわそわして、十五分も前にここに辿り着いてしまった私はいつもより待たされている感に苛まれている。

待ち合わせの相手は、まだ来ない。

初夏はもう少し先のはずだけど今日の日射しは眩しくて、少し早目かと思ったけれど持ってきたレースで縁取られた薄い水色の日傘は、私の汗ばんだ額や掌を陰らせてくれている。来るまで日陰で待てばいいのだけれど、どうにも気が焦って最初に立ち止まった場所から動けない。熱さを逃そうとグレーの七分袖チュニックシャツの胸元を少し煽る。紺色のスキニージーンズはもう少し通気性の良いボトムにしたらよかったかな、と少し後悔する。

はあ、と溜息をついて、先ほどから何度も見ている携帯を鞄から再び出して時計やメールの着信マークを探すけれど、何の振動も変化もないそれを日差しでやられ始めている目でじとりと見つめる。

――――薮田：待ち合わせ場所、駅前であってたよね？

つい五分前に送ったメールの返信はまだ来ない。

風邪？　いやそれはない。今日も朝イチで向こうから「起きた」の恒例メールが届いている。調子が悪いなら、きっとこれ見よがしに伝えてくるはず。

不慮の事故？　彼の家から駅までは徒歩三分。救急車の音はしない。じゃあ起床後自宅で何かあった？　……メールも電話も出来ないほどの何か？

いやいや、考え過ぎだろう。何か急な仕事の電話でも入って対応に追われているのだろう。

でももう十時十五分。暑さにも明日の予定の重さにも押されて、電話してみようと着信履歴から呼び出して発信ボタンを押す。通話中ということもなくコールし始め、三回目のコールの前に相手は出て通話中の表示になった。

「あ、薮田ですけど、」

「……からっ、……おい！……」

「もしもし？　もしもーし」

声が随分籠もっていて、しかも遠くで何か言っているようでよく聞こえない。そうこうするうちに通話が切れ、連続して鳴る切断音だけが私の耳に届いた。電波障害？

もう一度かけ直そうとした途端、着信音が鳴る。表示は「鈴木：自宅」。固定電話からだ。やはり何かあったんだろうかと慌てて通話ボタンを押したけれど何も聞こえてこず、私は「もしもし」を何度か繰り返した。けれど何の反応も無いその電話を、二分後結局切った。

何度目かの溜息を明るい日差しの下に吐きだす。連絡がつかないけれど自宅にはいるようだ。何となく覚えている課長の家まで行って見ようと足を動かした。

＊　＊　＊

真珠の指輪を渡され返事という名の騒動を起こしてから約一ヶ月半。最初こそゴタゴタしたけれど、まあ何と言うか……落ち着いて幾度か二人で外出を重ね、つい先週、課長は私の実家に約束を取り付けたあと、挨拶に来た。あまりの急な話に両親は驚いていたけれど、貞広が何気なく話していたらしく、課長について何かを心配さ

れるような事は無かった。ただ式までの時間があと半年も無い事については不安がっていたけれど。

「私だってこんな展開になるとは思わなかったわよ……」

何とか覚えていた課長のマンションに辿り着き、エントランス前で思わず呟く。汗ばんだ額を軽くハンカチで抑えながら部屋番号を押すと、インターフォンから声が聞こえる事のないまま、マンション入り口の自動ドアが開く。

開いたと言う事は課長はまだ部屋にいるということで、詰まる所これは、

「……部屋まで来いってこと？」

暑さと少し歩いたおかげでかいた汗が、背中を伝う。一瞬停止していた脳に閉じ始めた自動ドアが早くしろと訴えかけてきた。思わず慌てて入るとコンクリートで囲まれて影になっていたそこはひんやりとしていて、再度思考が乱れる。

どうしよう。部屋！？

今日は、明日課長のご実家に行く為の手土産を買いに行く約束だったはず。部屋に行っても何の用事も、無い。……私は。

じゃあどうしたんだろう。救急車を呼ぶほどの怪我？　急変した体調？　それとも……。

未だ触れられる事に恐怖で震える身体は健在で、自分でも呆れるけれどやっと手を繋ぐ事になれてきた所だ。それだって私から率先して手を出す訳でもない。何とも遅い進歩だ。

それでも待つって、待つから気にするなって言ってくれた。

週末あちこち行って楽しんだ帰りはいつも課長が家まで送ってくれる。そして去り際に見せる課長の目は表現しようもなく瞬いて揺らぐ。その視線は塞いだ私の何かを掘り起こすようで、怖くて怯え

て目を逸らしてしまう。それでも「大丈夫だから」と、彼のしかめっ面が思い出せないくらいいつも柔らかな表情で、少しだけ苦笑しながら言ってくれた。だからずっと離れず繋がっていた課長の手が最後に熱く感じても、その熱を手放す時は少し寂しかった。

私はそれに甘え過ぎてた？

ぐるぐると回る思考を抱えながら、でもこうしないと駄目だと言わんばかりに足は進み、エレベーターは課長の部屋の階に止まる。

鈴木、と書かれた表札。玄関ドア前に立つ私の顔は恐らく青ざめている。嫌なことばかり想像して、怖くなって、それでも何かに押されるように自分を叱咤して玄関前のインターフォンを鳴らす。

少し柔らかめの機械音が外に響き、聞こえてきたインターフォンからの声。

「はーい、ちょっと待ってねー」

聞こえてきた女性の高い声に、思わず目を見開いて一歩後ずさり部屋番号や名前をもう一度確かめる。

……間違えてない。そうか！　なーんだ勘違いか、他の女性がいたのか。部屋に呼び出されてどうなる事かと思ったけど、とホッとしようとする脳に、また信号がいく。

他の、女性？　……課長の部屋に？　これってもしかしてお約束の鉢合わせ？　私以外の人が、課長にいて？　そんなドラマチックな展開！？

余りの緊張と追いつかない理解に昼ドラ悲劇のヒロインのような気分で立ち竦む。でもこれが真実だったら、私、どうしようか。

冗談抜きに暴走し始めた思考が脳内をぐるぐる巻きにして涙腺だけを緩めようとした時、ドアが開き、想定通り現れた女性。

肩の上で切り揃えられて揺れる黒髪、少し焼けた肌に印象的な大きな瞳。そんな彼女に黒のボートネックシャツと白のチノパンはよく似合っていて、夏が似合う人に見えた。そんな彼女の綺麗に弧を

描いた唇の微笑みが、さらに深くなった。少し年を重ねた人の、その余裕のある微笑みが、口を開く。

「き、」

聞いて彼の事を本当に愛しているのはワタシなの！　という今時ドラマでも言わないんじゃないかという台詞が駆け巡りそうになったけれど、聞こえてきたのは叫び声だった。

「きゃー！可愛い系ー！　よくやったユキ！　やったー、ワコちゃん上がって上がってー！」

予想も思考も超えた展開に、手首を掴まれてぐいと引っ張られるままに部屋の中に入る。早く早くと靴を脱がされて入った覚えのあるリビングで見た構図は、昼ドラか昔読んだマンガでよくある話かのようだった。

コネクティビティ―2

「ちょ、お前愛人に思わせて反応見るとか何とか言っといて自分でバラしちゃ意味ないだろ」
「もー無理無理無理無理。見て。この子見てもそれ言えるー！？」

うふふ、と聞こえてきそうな笑い声の女性に手を引っ張られて入ったリビング。
何とコメントしてよいか分からない発言をする彼女の肩の向こうに見えたのは、男性に羽交い絞めされて嫌そうな表情をした課長。散々暴れた後なのか随分水色のシャツと髪は乱れていて、まだ午前中だと言うのに随分くたびれて見える。

「わー、こりゃまた。雪久、こういう子が趣味だったんだなあ。道理で爽子（さわこ）の友達からアプローチされてもなびかなかった訳だ」
「でしょー、私だって吃驚よ。でもこういう大人し目の子の方がユキは一緒にいて落ち着くんでしょ。分かる気するわあ」
「……和隆（かずたか）さん、もう手は離せって」

課長と同じ位の背丈で和隆と呼ばれた男性は「そうだなあ」と言いながらも、課長を離そうとはしない。課長よりも筋肉質な腕をした人にぎゅっと首の後ろで手を組まれたらどうしようもないだろうなあとぼんやり他人事のように思う。実際他人事だけど。
でもぐったりなすがままの課長は……何だろう、ちょっとそのボサボサの髪を撫でてみたい。

「だめよカズ、まずはワコちゃんにじっくり馴れ初めを聞いてからじゃなきゃ。ユキが邪魔し始めたら何も聞けなくなっちゃうから」
「でも俺もう腕疲れたから雪久抑えんの無理かなあ」

和隆と呼ばれた男性が笑顔で答えるやいなや、課長は回されていた腕を思い切り振り払った。眉間に皺をよせながら軽く肩を回し、これ見よがしに溜息をついて近くにあったソファにドサリと身体を沈める。

「和子、悪い。これうちの長女とその旦那」

紹介されて振り返った女性は朗らかに「はじめまして、姉の爽子です」と笑い、デートを邪魔してごめんねとウィンクしてきた。……ウィンクはともかく、言われてみればどことなく課長の笑顔に似ていた。

＊　＊　＊

課長と付き合う以前に食事をした時、家族の話になって上にお姉さんが二人いるという事は聞いていた。それぞれ七つと五つの年の差があり、末っ子長男かと思った記憶がある。

それでも課長からはあまり末っ子という雰囲気はせず、この一ヶ月半の間にお姉さんたちの話も特に出なかったので気にもしていなかったけれど……。

「課長がこんなに弄られるの、初めて見た」

「……だろ」

私が呟いた小さな声はちゃんと課長に届いたようで、嫌そうな声で返事が返ってきた。ソファに沈み込んだままの課長の横へは爽子さんに問答無用で座らされ、彼女たちは今キッチンで何か騒ぎなが

らコーヒーを入れている。
　コーヒーを待つ間に聞いた話をまとめると、この３ＬＤＫは元々和隆さんたちご夫婦の持ち家だそうだ。和隆さんが海外へ転勤になったため、この家をどうしようかと半年ほど放置していた所へ課長が転勤になることを知り、どうせ当分帰れないから管理がてら住んだらいい、という話になったようだ。道理で課長が一人で住むには広すぎると思った。
　その海外赴任中の和隆さんとそれに同行していたはずの爽子さんがどうして日本に、そしてこの部屋にいるのかというと、課長が私を連れて挨拶に来るということがご実家のご両親から洩れたようだった。「結婚するって話だけは仕方ないから言ってもいいがそれ以上は洩らすな、ときつく言い渡したはずなのに、あのボケオヤジ……」と言う低い声を、まあまあととりあえず宥める。まだお会いしていないお義父さんだけれど……明日は無事に過ごせるのだろうか。
　結果、和隆さんたちご夫婦は日本への出張日を私と会うために合わせて帰国し、この部屋に朝駆け。二人の連携プレーで携帯を奪い……今に至る、らしい。
　課長のこのぐったり感から判断すると、必死にお義姉さんたちに隠していた理由が分かる気がする。お義姉さんたちからの扱いは昔も今も変わっていない、ということだ。ザ、末っ子。

「でも前も言いましたけど、私はお姉さんが欲しかったから羨ましい」
「こんなのが二人もいてみろ……あれ買ってこいこれ買ってこい、肩もめ足もめ……家庭内パワハラ、いやもうあれはＤＶに近いか……」
　途中から説明というより愚痴に変化して眉間に皺を寄せてぶつぶつと言う課長は、何というか“課長”には見えなくなった。初めて見る“弟”としての表情は微笑ましくて、私も貞広の事を思い浮か

べる。当たり前だけど誰にでも小さな頃があって、三十になっても子どものように扱われる課長がどこか可愛らしくて笑いが込み上げてくる。

「小さい頃からそんな嫌そうな表情してたんですか？」

「そうよー、弄ると最後には泣きそうな顔してそれでも言われたことをやるのを見るのがもう病みつきで。だから最近のうちの小僧はその頃のユキによく似ているから、まあ可愛くて」

コーヒーと海外のお土産らしいお菓子をのせた器がローテーブルに置かれた。そうして急に話に加わり、にっこりと微笑む爽子さんの表情はどこか懐かし気だ。テーブル椅子をくるりと回してソファ側に向けて座ると、和隆さんもそれに倣った。

「碧（みどり）は今近所の女の子たちに泣かされてるからねー、そうかーそういえばそうだな。雪久みたいになりそうだ」

「……そういえば碧は実家（うち）か？」

「今頃お祖母ちゃんとお祖父ちゃんと水族館でも行って遊んでるでしょ」

話の流れからして碧くん、というのはお二人のお子さんのようだ。課長の小さい頃に似ているなら、是非見てみたい。

「明日どうせ会うんなら今日いきなり来るなよ、こっちの都合考えろ」

「やあよ、ちゃんとあんたがどんな子だったか知ってもらわなきゃ結婚なんてしてもらえないわよ」

まだ見ぬ碧くんに思いを馳せていたけれど思わぬ会話のやりとりに、ぐふ、と口にしていたコーヒーを吹き出しそうになった。え、

両親への挨拶の段階まで来てるのに、その方向の話、します？

「するんだよ」

何を言い出すんだ、と不満を隠す気のない声音の課長がお菓子に手を伸ばす。そんな態度をお構いなしに爽子さんは先ほどと変わらぬ笑顔で話を続ける。

「そんなの途中であんたとの関係に不都合を感じたら幾らでも破棄したらいいのよ。ね、ワコちゃん。あなたが私の妹になってくれたら嬉しいけど、別にユキとは無理だって思ったらハッキリ言うのよ」

「爽子と和子は違うだろ。爽子は和隆さんを振り回し過ぎだ」

「やー、でも俺も本気で最初は無理って思えたからなあ」

「ほら。こんな事思ってる男と結婚なんてできる訳ないでしょ、だから最初の婚約解消だって当然。ワコちゃんとは血縁関係にならなくったって私の妹分にはなってもらえるもの。だから気にしないで、ね？」

「あ、あのっ」

口を挟む間が無いけれどあまりにさも「そうしていいのよ」という笑顔を振られたため、とにかく何かを言わなければならないという妙な使命感で言葉を出した。結果三人は口を閉じたけれど、その急な沈黙に今日予定していた活動しか脳裏に浮かんでこなかった私は、脈絡のない話を振るしかなかった。

「その、お二人にもご実家に持っていく買い物にお付き合いいただいたらどうでしょうか……」

人事で随分鍛えられたと思っていたけれど親族付き合いは経験の範疇外だと、骨身にしみた。

コネクティビティ―3

手土産なんていらないわよ、と言う爽子さんに和隆さんが「その後四人で夕飯一緒に食べようか」と言うと、「それもそうね！　じゃあ今すぐ行きましょう」と名案とばかりに立ちあがり、やっと予定していた計画を始める事が出来た。緊張していた朝が懐かしい。

でもまずは近所で軽めの食事を取ってからにしようという和隆さんの提案により、少し早目の昼食を食べることになった。

「へえ、弟君と二人なんだ。それで、和子ちゃんはどんなお姉ちゃんなのかな」

「和子はかなり弟に甘い」

食事中に家族の話になり、私が答える前に課長が口を挟む。

「え、厳しいですよ。弟は小さい頃からのんびり屋だったので、私はどうしても苛々しちゃってよく怒ってます」

「ハタチ過ぎた弟が用も無く一人暮らしの姉の家に泊るか？」

「泊りますよ。私の高校の同級生だって、」

「あー和子ちゃん、これはただの雪久の嫉妬だから気にしなくていいよ。弟にまで嫉妬って、雪久は案外心狭いのな」

「違うって」

課長がいつものように私を追い込む台詞を言うけれど、私が言い返そうとしても誰かが間に入ってくる。そうして話は結局課長を弄る方向に向かうこと数回。二人の兄姉にいいように振り回されている課長を見るのは、案外面白い。ざまーみろ、という満面の笑顔を向けてやると、テーブルの下から軽く足を蹴飛ばされた。足癖、悪い！

「ユキ、もう食後のコーヒー飲みたいから言ってきて」

私が軽く課長を睨んだ時、早々に食べ終えた爽子さんが課長に指示を出す。課長は「自分で行けよ」と眉をひそめながらも案外あっさりと箸を置いて席を立ち、遠くにいた店員に声を掛けにいった。思わずその背中を見ながら感嘆の声を上げる。

「すごいですね……」

「そうでしょ、あの子よく動く子でしょう。重宝したのよねー、使い走りに」

確かにパシリは決定だ。でも同じ動くにしても、社内で見聞きする課長の雰囲気とは違うのでやっぱり不思議な感じがする。

「でもそのせいかあんまり人に甘えることを知らないのよね。こればっかりは弊害っていうか。母親と私と妹が揃うとあの子を顎で使っちゃったし。それにまたあの子も応えちゃったから」

「……社内でも本当によく動かれるようです。多忙を極めておられるので少しは周囲に仕事を振ったらいいと上の方からもそう言われてるようなんですけど、つい自分でやってしまうみたいで」

「でしょうねえ、想像がつくわ。でも周りが思ってるほど本人は苦に思ってないわよ。それにどうせ言っても聞かないんでしょ、だったら潰れるまでやらせればいいのよ。自分が潰れた後の事後処理の方が大変だって経験したらやり過ぎたって気付くでしょ」

突き放すような発言をする爽子さんの表情は裏腹に、弟を信頼しているという感情が読み取れた。サラダバーから追加の野菜を手に戻ってくる課長に微笑みを向ける爽子さんを見て、羨ましさと複雑さが絡んだ声で呟く。

「そうやって分かり合えてるのって、いいですよね」
「――和子ちゃんは、雪久とこれから分かりあって行けばいいんじゃない？」

和隆さんの言葉に返事をしようとしたけれど、課長が席に戻ってきたのでその話題はそこで立ち消えた。

＊　＊　＊

「本当にこれが手土産でいいんでしょうか……」
「いいのいいの。ね、ユキ」
「気にし過ぎなんだよ和子は」

私が想像していた手土産は銘店などのお菓子詰め合わせだったのだけれど、姉弟の意見は両親にはお酒とのことで一致していた。

「和子ちゃんも結構イケる口だってさっき聞いたけど」
「否定はできませんね」

苦笑して和隆さんにそう答えると、「じゃあ和子ちゃんが好きな銘柄教えてよ」と手土産のお酒を入れたカゴを課長に手渡しもう一度リカーフロアへ誘導される。自然と二手に分かれて、和隆さんと少し距離を置きながら歩く。

「向こうじゃビールが多くてね。やっぱり帰ってくると日本酒か焼酎が飲みたくなるねえ」
「そうなんですね。じゃあ焼酎で好きなのは、」

陳列棚をざっと見て気にいっている蔵元のパッケージを探す。これかなと一瓶手に取り、横にいた和隆さんに手渡した。

「ねえ、ちょっと不躾な質問かもしれないけどごめんね。さっき言ってた分かり合うって話なんだけど、雪久はどう？　自分の事とか和子ちゃんに話してる？」

手渡した焼酎のラベルに目を落としながら和隆さんは何気なく聞いてきた。その横顔を一瞬見つめて、問われた内容を考えながら陳列棚にやった視線を彷徨わせる。話していないように見えたのだろうか。

課長は細かくは言わないけれど最近仕事の愚痴を少しだけ洩らしてくれるし、側にいても以前ほど緊張しなくなった。今までの自分にしては随分慣れたつもりでいたけれど、周りから見たら結婚する二人という雰囲気ではないのだろうか。

「……傍（はた）から見て何か不自然でした？」

「いや、特に」

これ買おうかなあ、とのんびりと言う和隆さんの声に変化はなかった。トラウマがあることなどを話した方がいいのだろうか、それとも何気なく聞かれていることで真剣に答えるものでもないものなのかと思案して、目の前の瓶を選んでいるように人差指を振る。

「鈴木のご両親からちょっと聞いたけど、二人は付き合い始めてまだ数ヶ月なんでしょう。それでこの展開だから、和子ちゃんは雪久に自分の気持ちを話す暇あるのかなって、単純に想像しただけなんだけど」

「ご心配おかけしてすみません。大丈夫ですよ、ちゃんとよく話し

てますから」
「式の計画話とか仕事の話とか、そういう事務的な話じゃないよ」
言われた台詞に指が止まる。そんな私の反応を見た和隆さんはもう一度ゆっくりと尋ねた。
「ちゃんと雪久に和子ちゃんの気持ちは、話せてる？　それとも雪久には話せない？」
やんわりと話しかけてくる和隆さんの言葉は、どこか押し込めていた私の感情を揺さぶる。私の沈黙の答えに、和隆さんは穏やかにでも苦笑しながら言葉を続けた。
「一般的に男は結論だけ見るけど、女性は経過を大切にするって、言わない？　ほら結婚じゃなくても男と違って女性は物事について色々話すし考えるでしょ。その辺のフォローを雪久がちゃんとしてるのか、それとも和子ちゃんが言えないのか、どっちかなって」
そんな風に固まっちゃうって事は、何か思う所があるのかなーっていう将来の義兄のお節介な気持ちです。
そう揺さ振られて押し込められていた私の感情はゆっくりと浮上し出す。
結婚に向けてのこの展開に、異論はない。言い方に差異はあっても私たちの価値観は似ていて、私にとって課長が……一緒にいれる人で一緒にいたい人、という気持ちは忙しい中でも間違っている気はしない。ただ――。
「――うちはさ、爽子とは幼馴染で、」
急に変わった話の方向を、視線を合わせて受け止める。

「ずっと一緒にいたから、学校が変わったっていつもと同じ関係を続けていられるってどこか思ってたんだよ。でもお互い違う友達違う環境で生きていくし、男と女って性別の違いもあるからちょっとずつ物の見方も変わって、久々に会った時には何か違和感があったんだよ。だから爽子と付き合うとか、ましてや結婚なんて考えもしなくなってた」

昔を思い出すような懐かしさの混じる和隆さんの目には、爽子さんへの愛情が浮かぶ。ああ、私には……この視線が無いかもしれない。突き付けられた表情に、胸が苦しくなって走って逃げだしたくなる。

「でも爽子はこんな俺との違和感を埋めようって頑張ってたよ。俺の結論は違っていても、そんなことはお構いなしに。お互い違う人と過ごした時期もあったけど、結局は会う度に引き寄せられてた。会う度、喧嘩して仲直りして気持ちをぶつけてたら、いつの間にか結婚してた」

「……今もの凄い端折りましたね」

「えー、結構きっちり話したつもりだよ」

そう言って和隆さんは笑いながら私が勧めた焼酎を手にレジの方向へ身体を向けた。胸の痛みはその笑顔で鈍くされる。

「まあ、二人のことはこの数時間しか見てないから分からないけど、そういう意味で話しあえてればいいな、と。話してたらごめんね。まあ人の結婚話聞くのも、結婚前の醍醐味だと思って聞き流して。あ、でも和子ちゃんに爽子みたいに喧嘩吹っ掛けろって言いたい訳じゃないからね。まあ雪久のことボロボロにするくらいの勢いが和子ちゃんにあったらそれもそれで見てみたいけど」

「ボロボロですか……」

そんな課長が想像つかなくて、苦笑する。すぐ思い描けるのは、自分の仕事をきっちりこなしていく課長の背筋の伸びた姿勢。厳しい声の中でも的確に指示して、皆を引っ張っていく、そんな課長。

そして付き合い始めてから知った課長は、私のトラウマを気にかけてくれて私の気持ちを優先して、どこか自分を抑えている――優しい人。

「いまでももう結構なってるかもしれません。課長はすごく辛抱強い人だから表に出さないだけで。だから本当は甘えさせてあげたいんですけど、私が怒りっぽいから上手く噛みあわないことが多くて。だから、課長が……雪久さんが、可哀そうだなって思ってるんです」

話しながらレジまで行き、会計の時に和隆さんがお金を出そうとしたのを制して、さっさと支払いを済ませる。

「あ、こら、駄目だよそういうことしちゃ」

「駄目なのはこちらです。私に話させた代金は高いです、大人しく奢られてください」

笑って清算し包んでもらった品を和隆さんに手渡す。高い買い物しちゃったなあ、と苦笑した後、ニヤリと意地悪そうに笑って問われる。

「じゃあ、あいつが可哀そうだから、和子ちゃんはどうするの？」

「それはこのお酒代では絶対足りませんよ。それに、それは彼しか聞いちゃ駄目です」

ですよねー、と言いながら見せてくれたその朗らかな笑顔は、彼

の愛する妻の顔によく似ていた。
私の笑った顔が、課長の笑顔に似てくる日は……いつだろう。

コネクティビティ―４

もう一度課長と爽子さんと合流して駅ビルの中を適当ぶらついて、二人からまた課長の小さい頃の話から高校時代に告白された話までを聞いては笑い、時に冷やかしながら過ごした。

夕飯は、駅ビルの上層にある少し雰囲気の良い店を和隆さんたちが選んで入った。席に着いた所で爽子さんが化粧室に向かい、和隆さんがやっぱり手荷物をクロークに預けてくる、と入口に戻って行った。

二人でメニューを見ながら四人分ならこれにしようと話していると、課長の携帯が振動した。

「――やられた……」

携帯を開いてメールを確認した課長が呆れた声を出した。どうやらお義姉さんたちからのようだ。見せてと言っても中々見せてくれないので痺れを切らせて立ちあがって奪おうとすると、溜息をついて「後悔するなよ」と言われる。お義姉さんたちからのメールでどうして後悔なんてするんだろう、とあまり考えもせず向けられた携帯画面を読んでいく。

――――爽子：ワコちゃんへ。ダブルデート、楽しかった！　ここからは二人でゆっくり時間を過ごしてね（ハート）　清算は済ませたから婚約祝いと思ってお値段気にせず飲んじゃって☆　本当は上のホテルも取ってあげたいけど、明日絶対また会いたいからやめておく、ごめんね　　ｂｙ　ｋａｚｕ＆ａｍｐ；ｓａｗａ

ごめんなさい、後悔しました。課長が見せるのを嫌がったわけだ……。というか、ホテル云々の内容は明らかに、その。

「てことだから、和子は高い酒頼んでいいぞ」

課長は衝撃の画面を見て固まった私の額を携帯で軽く小突いて正気に戻し、何事もなかったかのように再びオードブルを選び始めた。

……気にするなという意思表示だろうか。意識し過ぎる反応も課長の好意を無駄にすることになると思い、私も動揺を内側に押し沈めて気になった料理の名前を指しながら会話を続ける。

「なんで私だけ飲むの。課長だって少しくらい飲んだらいいのに」

「俺は今日はいい。飲むなら立てないくらい飲みたい気分」

それくらい精神的に疲れた、という重い声は昔振り回された記憶でもよみがえっているのだろうか。でもさっき聞けた小さな頃の話はいいネタになりそうで、忘れたくないな。クスリと笑いながら思い出した気分をそのままに、浮かれて何気なく口走る。

「立てなくなったら支えて帰ってあげますから。一人で飲むなんてつまんない」

口を尖らせてそう言うと、課長は軽く溜息をついて額に手を当てた。ちらりとこちらを窺うように黒い目が私を射る。

「――支えれんのか？　ていうか俺の事支えられるほど、大丈夫、なら」

妙に区切って言う台詞の続きを聞く体制でいたけれど課長はその後の言葉をうやむやにして、メニューに再度目を落とし、何を奢られようかなと呟いた。

とつとつとしたその言い方に疑問符が浮かぶ。どういう意味かと

問おうとして、瞬間思い当る。……そうか、支えるっていう事は彼に触れるって事で、密着もあり得るってことで、課長はそれができるなら、ええと。どうしたいんだろう、と疑問に思うほど疎くもない。

自分の言った言葉の意味を反芻して、メールにあった“ホテル”という言葉まで掘り起こしてしまい、穴があったら入りたくなった。居づらい。

お義姉さんたち、戻って来てー！

＊　＊　＊

奢って頂いたディナーはおいしくて、とにかく妙に明るく振る舞った気がする。つい先ほど聞いた課長の小さな頃の話を振り返っては冷やかし、一、二杯のアルコールで珍しく饒舌になった私に課長も呆れながらも付き合ってくれた。この雰囲気は飲みすぎたらまずいと思っていたのに、沈黙を避けるようにお酒を頼んでいたら結局四、五杯のグラスを空けてしまった。結構度数が高いものを連続して口にしてしまったかもしれない。少しふわふわする。

そうして微妙な空気に思えた夕食を終えて駅に移動すると、外は昼間とは打って変わって酷く雨が降っていて、休日ということも相まってその時間帯の乗客の人数も多かった。いつもの私としては嫌な混雑具合だった。

「大丈夫か？　タクシー使って帰ったほうが、」

「ううん、そこまでしなくても大丈夫。でもドア側に立ちたいかな」

私の事を考えて言ってくれた事が嬉しくて、大丈夫と繰り返す。無理するなとも何度か言われたけれど、いつの間にか繋いでいた手

に安心していた私は大丈夫ですよとふわふわした気持ちのまま答えた。
各駅停車の電車に乗り込み、何とか課長が窓際を確保してくれた。昔味わったことのあるラッシュ時のぎゅうぎゅう詰め程ではなかったけれど、それでも私がいつも諦めて乗らない人との密な距離感。でもアルコールの力と手を繋いでいる安心感が私の緊張感を弛めてくれていた。
目の前の、今日見慣れた色褪せたような水色のシャツ。片手を繋いだままかつてなく近くに向き合って立つ課長との間に空いている片手を添えていたけれど、なぜか目の前のシャツの透明ボタンが気になった。よく見ると何かが刻印してある。こんな距離じゃなかったら気付かなかった模様。
人差指でその刻印をなぞったら、直接身体に触れたわけではないのに課長に気付かれた。

「……何？」
「このボタン、何か書いてある、なんだろ」
「ブランドの、名前じゃないか？」

車内は人々の会話や漏れ聞こえる音楽、地下鉄ならではの籠った音で満ちている。それでも、課長の声はきちんと私の耳に届いた。
そう？　よく見えない、と依然課長の胸元で呟いたら、目線の少し上で課長の喉仏が上下した。ここも骨かと不思議に思って目線を上げる。
私と課長の身体の間に腕を動かせるほどの隙間が出来たのを見計らって、手を伸ばしてそれに触れる。
指先に感じた、ごつりとした感触。

「これも骨、だよね」

思っていた言葉を口にも出す。ギッと電車が揺れて少しだけあった二人の隙間が埋まり、喉仏に伸ばしていた指先がまた意図せず触れた。課長から返事はなくて、代わりにまた喉仏が上下した。その動きが妙に面白くて笑ったら、車内で笑うとおかしなヤツと思われるぞ、と小さな声で揶揄される。

「課長に隠れて周りには見えないから、いーの」

そう呟いてまた笑うと、繋いでいた手をきつく握り返された。痛いんですけど、と返す前に、電車が摩擦音を出して揺れ、いつも降車している駅名のアナウンスが流れ始める。少しして私の背中側のドアが開いた。

人波に乗って混雑する構内を移動し、改札口を通る為に繋いでいた手を離す。

いつもなら歩いて帰る道はどしゃぶりで、傘を持っていない私たちには結局タクシーしか移動手段が無かった。駅前のタクシー乗り場で列に並び、湿気で広がる髪を持ち歩いていたシュシュで結わえる。雨の不快感と普段よりも多いざわめきに、あっという間に酔いが醒めてくるのが分かった。

「今日はもうここでいいです。こんな天気だからどうせ課長も駅からタクシー乗りますよね、行って下さい」

「もうここまで並んだんだ。和子のマンションからそのままタクシーで帰るから気にしなくていい」

「気にしなくていいって言われても、人って気にするものですよね」

「そうだな」

笑い声が同意した。今の会話は笑う所だっただろうか。ふと横を見上げる。

「気にするなって言われるほど、気になる」

湿気で課長の前髪は全て降りていて、風が部分的にまとまった髪を揺らしていく。いつも見ている黒い目は今日も優しくて、でも雨のせいか少し潤んでいるように見えた。

数秒後コクリと何かを呑みこんで、課長と比べるまでも無く小さな私の喉も、少しだけ上下したのが分かった。

コネクティビティ―5

タクシーがバシャバシャと等間隔に水音をたてながらマンション前に停車した。
手土産の袋を抱え込んで急いでタクシーを降りる。打ち合わせ通り私はすぐにマンションの玄関に入り、そのまま課長を乗せたタクシーを見送る予定だった。でもいつまでたってもタクシーは発進しなくて、マフラーから出る排気ガスが雨のはね返りを受けて闇に紛れていく。
何かあったのだろうか、もう一度タクシーに戻るべきだろうかと思案していると、課長がタクシーから降りてきて雨を浴びながら私の立つ玄関前に辿り着く。

「忘れ物！？」

雨音が大きくて思わず声を大きくして尋ねる。課長の返事の声は小さくて、その唇の動きで否定だと分かった。ならどうしたのだろうか、と訝しがりながら自分の頬に纏わりついた髪を払いのける。
タクシーが走り去っていくのが見えたと同時に、課長が左の掌を見せながらゆっくりと私に伸ばしてきた。
その指先から、雨が一滴流れて落ちたのが、見えた。

「手……繋ぎたい」

唐突なその希望に、一気に顔に熱が集まる。

「な、ななんで今！？」
「どうしても」

向けられた掌から見えない圧力でも加えられたように身体を後ずさらせると、玄関の自動ドアが反応して開く。
その音に驚いて、でも開いたそこへ逃げるように入るともちろん課長は付いて来る。
そうして掌を向けたまま、駄目か？　ともう一度問われた。
駄目じゃない、けど。急に改めて言われると、怯む。

「……どうしたの？」
「理由を言ったら引くだろうから言わない」
「……その言い方、ちょっと怖い、よ？」

無理に笑って言って場を和ませようとしたけれど、課長の硬い表情は変わらなかった。少しの沈黙の後、深く息を吸った課長は私に向けていた掌を自分の顔を覆うように掴んで、俯いて苦しそうに息を吐いた。
小さな小さな声で、どうしようもない、と聞こえた気がした。

「何か私、した？」
「……した」

掌の間からくぐもった声が漏れ聞こえる。
急に変わった課長の雰囲気に押され、普段通り言葉を出したいのに緊張が私を覆ってうまく言葉が出て来ない。

「話、するの、明日じゃ、遅い？」

遅い気がする、とこもった声が答える。
辛そうな課長の状況は私が何かしたからで、その理由をちゃんと聞いてあげればいいのだろう。でも先ほどまでの言動を振り返ろうとしたけれど、緊張のあまり上手くいかない。

拒否してしまうのは簡単だ。でもこれが課長のあまり人には示さない甘えの部分で、今私がこの手を掴まなければこの人が伸ばした手は誰が掴むんだろう。そう考えたら、心が痛んだ。だけど急な課長のこの変化には戸惑いと……恐ろしさの方が先に立つ。

この雰囲気は、嫌だ。駄目だ。自分の中の何かが警鐘を鳴らす。

でも、今この手を伸ばさなかったら、私たちはどうなるのだろうか。

不安、焦燥、恐怖。それらが入り乱れて私の胸を掻き乱していく。心臓の鼓動が、早まった。

「じゃ、じゃあ、とりあえずエントランスの中で……」

何とかそれだけ言って、課長に背を向けて集中インターフォンのボタンを押す。

自分の背中が、焦げるような気がした。

＊　＊　＊

エントランスを通り過ぎて、一階のフロアの手前に申し訳無さ程度に置かれたベンチに課長を座らせる。一応マンションの、公共の場所だから人目はあるけれど……とてもじゃないけれど、私は座れない。状況が似すぎていて、一歩間違えば泣き叫びそうだ。

あれから何も言わず俯いたまま沈黙し続けている課長がどうしても怖くて、でも何故なんて問えなくて、とにかく以前聞いた課長の言葉を信じようと何度も唱える。とにかく最初の課長の望みを、と震える手を伸ばして膝の上に置かれた手を取る。

お互い手はしっとりと雨で濡れていて、冷たい。その指先を暖めるように両手で包みながら持ち上げたけれど、寒さ以外が理由の小

刻みな震えが止まらない。怖い。

「俺が、怖いだろうに、何やってんだか……」

課長の自嘲気味な乾いた声が笑った。ホントどうしようもない、と溜息と共に言葉が床に落とされる。

俯いていた顔があげられて、青ざめているだろう私の顔を見た課長の方が泣きそうだった。

「どこまで言っていい？　どこまでなら耐えられる？」

「……何が？」

「何も言わずにいるつもりなのか？」

「ごめんなさい、今、頭働いてなくて、課長の言いたい事がよく、」

「いつまで俺は和子から課長って呼ばれ続けるんだ。俺には名前がある」

責めるような視線と言葉に、より緊張が高まる。心臓を掴まれたように、呼吸がしづらい。

ごめんなさい、という言葉を出そうとしたけれど、喉が固まってしまったように動かない。

「抱きしめたいし、キスだってしたい。でも和子が慣れるまで待つつもりでいる」

課長の言葉が頭のどこかを素通りしていく。

「だけど、和子はそれをどう思ってるんだ？　俺が以前こういうことを話したって、ありがとうしか言わない。……俺と一緒に生活できるって、本当に思ってるのか？」

唐突に語りだした課長の気持ちは、私がうやむやにしておいた言葉を問うものばかりだった。
和隆さんの声がよみがえる。
――雪久に和子ちゃんの気持ちは、話せてる？
――あいつが可哀そうだから、和子ちゃんはどうするの？
ポツ、と課長の手に、滴が落ちる。震える指でその滴を拭っても、それはまた私の目元から落ちて、大きな手を濡らしていく。
「いつもこの話になると俺が尋ねるばかりで、無性に苦しくなる時がある。形だけ物事が進んで言ったって意味が無いんだ。……だから、こうして押したってお前を怖がらせるだけだって分かってるのに……」
掴んでいた冷たい指先に力が籠った。それを握り返すけれど、何も掴めていないようで堪らない気分になる。
伝えたい言葉はあるけれど、ここまで雰囲気的に追い込まれたら縮こまった私は怖がって、思うように動いてくれない。
「俺から動かれると怖いなら、和子が……和子から動くのを、」
その先の言葉は課長から聞こえては来なかった。少しの沈黙の後代わりに聞こえてきた、小声のごめんという溜息。握っていた指先が遠ざかっていくのを引きとめることは出来なかった。
しばらくの後、課長が立ち上がって出口に向かって歩き始める。
「……頭、冷やす」
冷たい声でそう言って、私を見ることなく帰ろうとする。

待って。お願いだから、待ってよ。
声が出なくて、涙で課長の背中も滲んで見えて、立ち竦んだまま時間が過ぎていく気がした。さっきまで課長の指先を掴んでいた感覚はあっという間に消え去って、自分の指先の冷たさだけが後に残った。
コンクリートに遮られて、課長の背中が見えなくなった。そうして、自動ドアの開く音が聞こえてくる。
いやだ。
やだ。こんな、今日という一日の終わり方。

「ゆ、きっ！　ひさ、さん！」

コネクティビティ―6

身体が動かなくて、絞り出すようにただ名前だけを掠れた声で呼ぶ。
自動ドアが閉じる音がした。それでももう一度、
「雪、久っ！　もう、馬鹿ぁ！」
最後は涙を飛ばすように身体を折って勢いで言葉を紡ぐ。
胸の前で繋いだ両手を白くなるほどきつく握りしめた。公共の場所だと分かっていても、詰まったように途切れ途切れ出てくる嗚咽を止められない。
こんな風に一人で泣くのは、何年振りだろう。
あの時のように何も触れられていないのに、胸がつぶれるほど苦しい。何で、何で、
「誰が馬鹿だ」
行ってしまったと思った気配が反論を出す。私の声が聞こえていた、届いていた。
「……っ、なん、っ、でっ！？」
折り曲げたままの身体全体から気持ちを吐き出すように、言葉を出す。叫んでいるつもりだけど、きゅうと締められたような喉からは掠れた声しか出て来なかった。
「っ、っく……何でっ、自分だ、っけ、言いたいこと、言ってっ！？　どっか、っく、行くの！？」

こんな台詞、こんな子供じみた台詞、泣かずに言いたい。嗚咽を挟んで伝える言葉ほど、言っている本人が苦しくてまどろっこしいものはないのに。それでも雪久さんには聞いて欲しくて、分かって欲しくて、感情を爆発させたまま言葉を発する。

「分かったから、ちょっと落ち着け」

「おお落ちっ、ついてっ、ひっく！　るっ！」

嗚咽が止まらなくて、苦しい。言葉が思うように出せなくて、叫んで出す声は妙に裏返って、耳に入る自分のおかしな声に余計にフラストレーションがたまる。そして雪久さんの平然としたその話し方に、余計に苛立ちが増す。

呼吸が苦しい。深呼吸して落ち着かせる為に、何度もしゃっくりのような呼吸を繰り返しながら身体を起こして、息を吸う。折り曲げていた身体を伸ばしたら、二歩先に雪久さんが口元に手をやって立っていた。

上を向いたら、また涙がぼろぼろと頬を伝う感覚がした。

「一気、にっ！　追い詰めっ、てっ、っく……こたえっ！　決めっ、け、ないでっ！」

肺を押しつぶしそうな勢いで呼吸を繰り返し、目の前の人間を睨みつける。私の言いたい事、分かった！？

無表情で硬く見えた雪久さんの表情は、涙を振り落とす様に私が幾度か瞬きをしている間に歪んでいった。その表情を更に睨みつけていたけれど、どんどん歪んでいくその表情は……間違いかと思ったけれどやっぱり歪んだその口角は笑うのを堪えている歪みで、そうして堪え切れないように吹き出して笑い始める。

何でこんなに私は怒ってるのに、笑ってんの！？

「なん、で！　笑っ、って！　るのっ！」

目の下を拭って、涙を振り落とすけれど、拭っても拭っても涙は零れてきて、手の甲を、指先を濡らす。頭が、酷く痛い。

「ご、ごめんな、和子」

こんなに私は苦しい思いをしているのに、目の前の人間は笑いをこらえようと必死らしく、堪え切れなかった息が喉で断続的に鳴っている。

「くはっ……っ、でもお前、酷く、かわいい」

馬鹿にしてるの！？　こんなに泣いて怒れて、苦しいのに！　しかもきっと顔だってぐちゃぐちゃだろうにそんな私を可愛いって言いながら笑うってどういうつもり！？

「なあ、冗談抜きに抱き締めさせて？」

「うるっ、さいっ！　もう、帰って！」

私が睨みながら一歩後ずさると雪久さんは苦笑しながら一歩前進してきて、歩幅が違うからすぐに間を詰められる。でもいつもの恐怖よりも怒りが勝ち、雪久さんを睨みながら近づいてきた胸元を勢い任せにドンと押して後退させる。もちろんビクともせずかえって自分の身体が後ろに下がる。悔しい。

そうしてまた間を詰められて、ドンと押して、叩いて、そうして、

「なあ、おいで」

困ったように、でも優しく笑った顔で、
両手を広げられて、
おいでと言われて、

「う、っく」

最後にもう一度胸元を叩いた手をそのまま温かなそこに置いて、嗚咽を漏らして。
少し前に電車の中で見ていたボタンに目をやりながら、私より一回り以上広い肩に涙でぼろぼろになった目を近づけて押し当てて、片方の手で彼のシャツの裾を握った。
彼の笑い声と優しい腕が、私の背中に回った。

＊　＊　＊

明るい玄関前から移動して、少し陰になった通路の角。ベンチの横。
課長が背中を壁に付けて、じわじわと泣き続けている私の背中をとんとんと幼子をあやす様に軽く叩く。
時々、酸素の巡りの悪くなった身体は思い出したかのようにしゃくり上げて脳に酸素を行き巡らそうと跳ね、目の前のボタンから身体が離れていきそうになるけれど、やんわりと背中に回った腕がそれを引きとめて、また元の位置に戻らさせる。
そんな動作に目の前のハンカチ人間はくすくすと笑って、宥めるように緩く結ばれた髪や背中をゆっくり撫でていく。

「……落ち着いたか」

ここまで泣いて肺を潰した人間が、そうそう簡単に回復すると思うんじゃない。第一、小さい頃より回復は遅いんだから、気遣いが足りない！

唸り声だけで文句を言うと、苦笑の交じった声が溜息を出した。

「わーるかった。俺が悪かった」

喉が詰まって、声を出すのが億劫だ。握っていたシャツを軽く下に引っ張って、それで何、という返事のつもり。

「俺が待つって言ったのにな。短気なのは、俺の悪い癖」

そんなこと言ったら、私だって怒りっぽいのは悪い癖。

「さっきな、電車の中で。好きな女が目の前でいつになく密着するのを許して、しかも喉だとしたってそっちから身体に触れられたら、どーしようもなくなるものなんだからな。

言い訳だって分かってる。飲ませなきゃよかったわけだし、地下鉄なんか乗らずに無理やりタクシーに押し込んで帰せば良かったんだよ。

――全部俺のせいだから、俺のせいにしていいから……ごめん。もう泣くな」

背中と腰に回された腕が、一瞬強く私を抱きしめる。頭にも何かが当てられる感覚。そのどれもが優しくて、また涙が零れる。

そんな“たら”“れば”なんて仮定を言われたくない。しかも自分が決めて飲んだり乗ったりしたことの責任を人に押し付けて謝まってもらうなんて、そんな不条理なことはない！　と言いたいのだけれど、まだ回復していないのでとにかく首を振って否定することで自分の意思を伝えるしかない。

どうしていつも自分が我慢すればいいって思ってるの？　これからずっと一緒にいるんでしょ？　それなのにずっと片一方が片一方のためだけに自分を抑えて生きるなんて、そんなの――苦しい。

「我慢、っ……やだ」

まだ長文は口にできそうになくて、とにかく伝わるように掠れた声を出す。随分ハスキーな音しか出て来ない。

「まだいいから。その声でしゃべったらのど壊すぞ」

優しい手が背中の真中から項（うなじ）に向かって上下し、撫でてくれる。一度味わってしまったこの安心感は、私に付きまとう恐怖感を覆ってくれるのだろうか。……今の私には、明日の私ですら想像がつかない。でも。

「言えるわけ、なかった」

また軽くしゃくり上げて、でもちゃんと伝えなきゃいけない事は分かっていて、握りしめたシャツと指ごと彼の腰にぎゅうと押しつける。喉が落ち着くまでまた少し待って、言えなかった言葉を吐き出す。

「もう、沢山待ってもらってるって分かってる。我慢だって、きっと……雪久さんの方が、一杯、してる」

こめかみは熱を持っていて軽く脈打つ。もう治まったと思っていてもまたじわりと涙が浮かんで、水色のシャツをまた濃くしていく。

「もう十分、私のこの身体の反応だって分かってくれていて、なの

に改めて自分勝手な我儘とか愚痴とか、聞かせて、負担になりたくないの。……仕事だって、忙しいでしょう？　そういうことだって、分かってるつもり。

――だから雪久さんにだって我慢させたくないのに、甘えてもらいたいのに、身体に触れずにどうやってそうしてあげたらいいのか分からなくて、どうしていいのか……分からなくて、」

こんなの言葉に出さず、相手に“やってあげます”なんて分かる仕方じゃなく、さり気なくしてあげたいことなのに。

また小さく身体が跳ねると、なるほどね、という声がすぐ近くで聞こえた。密着しているから身体に低い声が響いてくる。

「あのなあ和子」

ぐす、と鼻をすする。こんなぼろぼろな顔、もう絶対上げられない。

「そういう言葉を受け止められない男だって言われてるようで、逆に俺はそっちの方が嫌だけど。大体言葉に出さずに分かるだなんて、無理だからな。何でも思ったことを言わずに我慢してたら、それこそストレス溜まりまくりで、一緒になんて暮らせない」

暮らせない、の言葉が重く身体に響いた。目をもう一度肩に強く押し付ける。

「お前の内側の言葉も受け止められない程度の器だって、俺をお前が判断するな」

低い声が、少しだけ厳しい声が私を正す。

そうか、私、勝手に課長の事を計ってたのかな。知らずに、課長

の限界を定めてたのかな。
私の知らない課長を、私はいつの間にか知っていたような気分になっていたのかな。仕事のモードで、課長の……雪久さんのプライベートまでも、推し量っていたのかな。

「ごめんなさい」

雪久さんの身体にも私の言葉は響いて伝わっているだろうか。押し付けた目からまた涙が少し滲む。
もういいよ、と私の涙に対してなのか謝罪に対してなのか分からない言葉を優しく言って、彼の腕はもう一度私の背中を穏やかに撫でた。

コネクティビティ―7（最終話）

やっと気持ちも呼吸も落ち着いたと思った頃に感覚機能も戻ってきた。雨に濡れたままコンクリートで囲まれた所に立ち続けたせいで、寒い。

「ごめん、これじゃ風邪引きそうね」

密着していた身体から少し身を引いて、鞄からハンカチを出そうと動く。後ろに回っていた腕はするりと離れて、熱が前後から失われていく。その温度差にぶるりと身体が震えた。

ハンカチを広げてボロボロになっているだろう顔を軽く抑えて、それで顔の半分以上を隠しながら見上げると、寒いなといって苦笑する雪久さんの目元も、少し赤かった。

うちで着替えてく？　そんな台詞が頭に浮かぶ。でも、その、それって。

「何一人で妄想して赤くなってるんだ」

「妄想じゃない！　……言ったらどうなるかって先を考えた発言をするのも、大人としての責務の一つです！」

「まあモノは言い様」

「言いようじゃないから。――もう、気にするだけ私が馬鹿みたい。……散々雨で濡れたし、私もそれだけ肩を濡らした責任はあるし、明日以降風邪を引かれて仕事に差し障っても困るし、」

「取ってつけたような理由をあげつらわなくていいから、何」

「分かってるんなら口挟まないで！　……うちで着替えてけば！？　それですぐ帰ってね！」

乱暴な口をきかずに言えようか。また顔が熱くなる。ああもう、

泣いた後の頭にはそれすらも頭痛の種になる。

「あーあ、色気のないお誘い」

「色気なんて、ないから」

「あるけど、ないってことにしておく。じゃあ遠慮なく貞広のシャツでも借りて帰るよ」

笑った顔と目を合わせて、そうしてください、と照れもあって小さく言って、少し激しさの収まった雨の音を聞きながら、エレベーターに乗り込んだ。

＊　＊　＊

小さな洗面所に雪久さんと貞広の着替えを押し込んで、私も台所でぼろぼろになったメイクを落とす。お湯が、凝り固まった緊張した顔と手指を解(ほぐ)していく。

ホットタオルを顔に当てながら、洗面所から着替えて出てきた雪久さんを出迎えて、タオルと傘を準備する。

「きっとまたすぐずぶ濡れになるだろうけど……気をつけて帰ってね」

「今度は傘もあるから大丈夫だろ」

濡れた靴を「気持ち悪ぃ」と言いながら履いた雪久さんに傘を手渡す。

でも渡した後私が傘を手放さなかったので、どうした、という目で雪久さんが問う。

「その……ごめんね？」

言わなくてもこの意味は伝わっているだろうと思う。泊らせてあげれなくて、ごめん。

下を向いて言った私に、苦笑した声が返ってくる。

「明日、寝坊すんなよ」

「課長こそ……雪久さんこそ、風邪引かないように帰ったらお風呂入って下さい」

「ためるの面倒臭いな。そういえば和子はシャワー派？　お風呂派？」

「断然シャワー派です」

「説得力ないな」

笑いながら傘から手を離し、目の下から口元までを覆っているタオルを両手で支える。それはあっという間に冷えてしまって、でも泣いて熱をもった顔の温度を下げてくれた。

「明日、緊張するかな」

「爽子たちがいるから、少しはましなんじゃないか」

「じゃあ今日一足先に会えて、良かったかも」

タオルの下で、笑う。気持ちが弛む会話。

こんな会話をいつまでも続けてたら、どんどん時間が経過して、どんどん離れがたくなる。でも私は話だけで嬉しくなるけど……きっと男の人は、雪久さんはそれだけじゃ済まないだろうから、今はまだこういう気持ちは言ったらまずいんだろうなと思う。

そう考えて切ない気持ちで雪久さんを見つめた。

「……その視線、今は見たくないな」

「どんな視線よ、普通です」
「帰って欲しくないって目線」
「……事実ですけど、ごめんなさい」

事実は認めるのか、なんて言ってまた笑われて、一歩下がった雪久さんが背中を玄関ドアに当てた。

「謝る言葉なんて欲しくない。待て、って言え」

にやりと笑ったその意地悪そうな顔は、悔しいけれどそれすらも……愛おしく思える。

「……待ってて。私も……私だって気持ちの上では待てないから、同じだね」

自分で言っておきながら照れて俯く。タオルで顔半分が隠れていて良かった。小さな声で言った後半はくぐもって聞こえなかったかもしれないから。

一歩下がっていて見えなかった雪久さんの靴が、不意に視界に入る。

あれ、と瞬いているうちに俯いている私の視界に入ってきた、いつもなら見上げないと見えない、顔。

雪久さんの、黒い、目。

射るようなその目が、俯いている私が影になってより暗く見えて、近過ぎて、表情はぶれて見えて、

タオルごしに、

「――もしこれで俺に恐怖を感じても、また回復するまで何度でも付き合うから」

下から押し上げられるような感覚。

「これに懲りたら振り切れるようなこと、言うな」

すぐ鍵閉めろよ、と言う掠れた声とドアの閉じる音。

同時に、持っていたタオルが玄関に落ちた。

――とりあえず指示通りに手を伸ばし、カチャリと音をたててロックする。

起きたことが衝撃的で動きが止まるほど、子どもじゃない。

こんなこと、何でもない。付き合ってるん、だから。

落ちたタオルを拾って洗面台に向かう。これを軽く洗って洗濯機に放り込んで、私もシャワーを浴びて雨で冷えた身体を温めよう。

洗面所の電気をつけると、鏡に映った自分の顔が見るでもなく目に入る。

震えていない手で素肌の頬を抑える。

「……待てって言った意味、ないでしょ」

酷く赤くなった頬は熱くて、冷たい手の温度がやけに鋭く感じた。

タオルごしに押された口元を、冷たい指でなぞる。鏡に映った私は……見たことのない、女の顔をしていた。

ゴツ、と鏡に額を当てて、暴走しそうな思考を冷やす。

自分が思っている以上に私は大事にされていて、壊されそうなほどの情を向けられている。

どうしても癖のように事務的なやりとりを続けてしまうけれど、時折向けられる雪久さんの感情に同じように素直に返した後が怖くて、臆病になっていた。

彼の愛情と同じほど、私は彼に返してあげられるのだろうか。

そうやって追い詰めていたのは、自分自身。

初めて抱いた、一緒にいれる人で一緒にいたい人という感情。そんな感情以上に彼への気持ちが膨らんでいくのがこの期に及んで怖かった。

時折近づきすぎて怖くなるのは、条件反射。だけど他の人とは少しずつ違っていく怖さが交じって、私の反応に融けていく。

そんな変化を表わして変わってしまう関係に妙にビクビクして距離を取っていたのは、私。

不安をぶちまけて我儘を言って、そんな私を雪久さんに丸ごと受け止められたらどうなるんだろうかと怖かった。

「――すき、って言ったら楽になるかな……」

でもきっと相手が言う所の“振りきれる”台詞になりそうだから、悪いとは思いつつも当分この台詞は、封印。

翌日。

泣いて少し腫れた瞼をメイクで何とか誤魔化し、一時間半ほどで着いて出迎えて下さった鈴木家のご両親はかなりさばさばしていた。

爽子さんたちも一緒に温かく迎えてくれて、噂の碧くんも人見知りしながらも挨拶をしてくれた。照れた表情がどこか雪久さんと似ていて、しゃがんでお土産の小さなおもちゃを手渡して微笑んだら、ありがとうと微笑み返してくれて自然な動作で頬にキスをくれた。

どっと沸いた周囲の声と、面白くなさそうな顔の雪久さんに、また笑った。

お暇する直前に仕事から帰宅した次女のお義姉さんはあっさり挨拶だけして、雪久さんにセレクトショップで買ってこいリストを渡して一人黙々と食事を取り始めた。その態度が気に食わなかった雪

久さんと喧嘩になって。
冷戦状態になって苛々している雪久さんを帰る道中ずっと宥めて、その最中にまた色々と慣らされたのは、別の話。

こうして何でも話して喧嘩して、分かりあって。
そうして彼と私は、意識したりしなかったり、触れたり距離をはかったりということを繰り返して、当たり前のようにお互いの側にいる二人になれる。
それを続けていったら、いつの間にかそれが自然になる。

きっと。

ずっと。

Fin

Connect

翌日の仕事に合わせて鈴木家から慌ただしく帰宅している最中の新幹線、雪久と和子は指定席に座っていた。

指定席を取ってまで座る人たちは多くなく、二人の周囲に客は見られない。

結婚の挨拶、という緊張の中にも喜びがあるはずの二人の雰囲気は、あまり芳しくない。帰り際に会った次女の路(みち)が原因だ。

「路さんってああいうクールな性格なんでしょ。私が気にいるとか気に入らないとかそういう間も無かったし、もういいってば」

次女の路はクールと評されているが、実は大事な弟が急に結婚すると聞いて内心ショックでどうしたらいいか分からなかっただけなのだが。三十になっても可愛がっていた弟は弟ということらしい。

「仕事で疲れてたんだよ、きっと」

「……」

「ねえ、機嫌、直して」

不機嫌な表情の雪久をそのままにしておけない和子は必死に話しかける。雪久もそろそろ路の件はどうでもよくなって来たのだが、こうして和子に構ってもらえるならこのまま我儘を言ってしまえと継続する。

「……手」

「はいはい、どうぞ」

雪久は通路側に視線を送ったまま左手を和子の前に差し出すと、

やれやれやっとご機嫌回復ね、と和子はすんなり手を繋いだ。雪久と比べれば小さな指が雪久の指に絡まる。
そんな和子のあっさりとした行動に雪久は、貞広にもいつもこんなことしていたんじゃないだろうなと眉をひそめ再び苛立ちを募らせる。

「……随分余裕だな」
「よ、余裕なんてないから」
「の割にこういう手の繋ぎ方をあっさりしてくれるわけ」
「こっ！　これは最初に課長がこうじゃなきゃって」

指摘された行為が恥ずかしくなった和子は絡んだ指を離そうとしたけれど、その指を追いかけて雪久は少し強めに握りしめる。
窓の外に視線をやってこちらから顔を背けている和子の横顔は赤い。雪久はその表情に満足したけれど、身体はいつまでも満たされない。だから今夜はまず一歩。

「和子」
「……何」
「あとでキスしたい」

唐突な希望に、和子は息をのむ。雪久の望みはいつだって唐突だ。そうやって追い込まれたら怯えるって分かってるはずなのに。

「突然されるのが怖いんだろ、だからこれから前もって言うから、慣れて」
「や、やだ」
「考えたけど、突然は駄目、言っても照れて駄目、なら言葉くらい慣れてもらうしかないだろ」
「……」

「克服に協力体制は」
「もういいから！　ちょっと黙ってて」
「返事もらうまで無理」

今日雪久は引く気は無かった。追い詰めない程度に、追い詰める。そんな視線に若干怯えた和子は、また何かしただろうかと困惑する。

「……なんでそんなに困らせるの」
「碧」
「え？　碧君？　あ」

海外生活中の爽子は女性には感謝のキスをと碧を絶賛訓練中だ。そんな碧が日本に帰国したらしなくてもいいという考えにならないのは子どもだから当たり前で、するのが当然だと分かってはいても、雪久は奥底で苛立っていた。突然されるのが駄目というわりにはあっさりと、しかも自分の目の前で甥っ子に先を越された。

器が小さいと言われようが、どうにも納得がいかなかった。大体自分の名前だって呼ばれるのは貞広に先を越されている。あんのバカ貞広。

そんな不満げな感情が表情に表れている雪久に、何と言ったものかと和子は笑うしかない。子どもが突然何をしてこようが、怖いなどの消極的な感情は全く無い。大体どこで線引きをしているのかだなんて和子からしても自分の身体に問いたい話だった。

「あ、あれは、さすが海外生活よね、はは」
「あれだって唐突だった」
「小さい子ども相手に嫉妬しないでよ」
「タオルごしの俺にそれを言うか？」

和子はその瞬間を思い出して熱が上がっていく顔を伏せた。

外の闇が新幹線内の光により鏡のようになった窓に艶めきだした和子の表情は映し出され、それを雪久がじっと見つめている事を和子は気付かない。

「唐突が駄目っていうのも、和子の中で何か条件があるとして」
「……」
「俺を排除する条件ってなんだろうな。俺に足りないもの」
「……」
「無邪気さ？」
「っ、ごめんそれ笑っていい？」
「もう笑ってるだろ」

吹き出して堪える事もなく笑う和子に雪久は呆れた声を投げる。こちらは正直真剣な悩みだというのに。まああまり怖がらせても意味が無いので最後の台詞は場を和ませる為に言ったけれど。

「っ、無邪気な、課長……、っ……そういえば爽子さんに聞いた課長が泣かされた話で、」
「……」
「お母さんの膝の取り合いをわざと爽子さんが仕掛けたら、本気で怒って最後は泣いたっていうシチュエーションが聞いててホント、い、いたたたた！」

雪久は絡めていた指に力を入れて和子の言葉を封じる。いつの間にか子どもの頃の、しかも情けない話を和子に話されているのが気に食わない。大体そんな子どもの頃の癇癪だなんて一々覚えていないのに、過去の自分がそうだったという事実も気に食わない。

「これすると目が覚めるらしいぞ」
「次したら絶対もう手なんか繋ぎません！」

力を弛められたけれど鈍痛が指の付け根に残ってじんわりと痺れる手は若干熱を持ち始める。

「じゃあ腕でも組んでもらおうか」

「今時……」

「偏見」

「違います。それをしてる自分を想像すると激しく違和感」

思わぬ和子の話に雪久は大人しく耳を傾けることにした。

「大体手を繋ぐのだって怖いとかそういう問題じゃなくても、歩いてて正直面倒なんです。分かります？　何か鞄から出したくても気になって言いだせないっていうか」

和子なら気にしそうなことだなと冷静に雪久は受け止めていたが、沈黙を保つ雪久の雰囲気を不機嫌ととった和子は慌てて否定の言葉を出す。

「べ、別に！　したくないって言ってる訳じゃなくてっ」

「じゃあしていいか？」

「……いいですよ」

「言質取ったぞ」

「え？」

雪久はニヤリと笑って繋いでいる手を振る。和子は今後手を繋ぎたくないと言いたいわけじゃないし、今手を繋いでいるのに何の確証を取りたいのだろうかと疑問の視線を送った。

「キス、するからな」

その話はまだ続いていたのかと呆れて和子は冷静に答えた。

「主語がなかったでしょ」

「俺の中ではあった」

「屁理屈」

「今ここでするか？」

「結構です！」

きっぱりとはね付ける和子の言葉に、表向き平然としながらもやっぱり今日も無理かと雪久は内心落ち込む。でも和子は「今」という言葉に思い切り反応してしまっただけで、いつするのだろうかと軽く視線を彷徨わせる。

隣の人間は何の動揺もないように見えた。このまま話を流すこともできたけれど、つい先日喧嘩した後に気になる事はお互い話そうと言ったのだからと、和子は恥ずかしさを堪えて尋ねた。

「……ど、どこで？」

小さな声で問われた内容に雪久は目を瞬かせた。どこで。ならば同意するということか。

「……我慢がきくところ」

思わず正直に答えたけれど、自分らしくない言い方に雪久は頭を抱えたくなった。

「……もう前もって言わん」

「や、やだ」

「どんな羞恥プレイだ……くそ」

「ごめん、なさい」

口元に手をやって通路側に顔ごと向けてしまった雪久に、また上手く伝えられなかったと和子は軽く落ち込む。どうしたらもっと自然にお互い過ごせるようになるんだろう。

「慣れ、慣れれば、さ、いいんだろうけど、ね？」

ビギナーを自負する和子にリードを取れというのも本来難しい話で、でも和子の感情を思うと動けなくなる雪久にとっても慣れさせにくいというのはジレンマで。

でも以前雪久がしてくれた指へのキスでもして慣れてみよう練習練習と思った和子は、勢い繋いでいた手を持ち上げる。

手を引っ張られた事に何だろうかと顔を和子に向けた雪久の視線に映ったのは、ほんのりと頬を染めた和子が軽く目を伏せて、自分の親指の爪先に口づけた瞬間だった。

その感触と映像に、雪久の思考が、飛んだ。

「和子」

掠れた声で呟いて、呼ばれて顔を上げた和子にゆっくりと近づく。怯えてくれるな。

息を止めた和子は一瞬目を見開いたけれど、黒い目を揺らしてじわじわと近づいてくる切なげな雪久の表情に、少し顔を引いて睫を震わせながらためらいがちに目を閉じた。

半分目を閉じながらそれを確認した雪久は、繋いでいない方の手で自分の右膝を握りしめる。

怖がらせてまで奪いたい訳じゃない。自分の衝動だけで、手に入れたい訳じゃない。

和子が怖がっている時、その思考のどこかにトラウマの原因になった男の影がちらついているかと思うと、いつだって腸が煮えくり返る。
和子が目を閉じた時に脳裏に映し出されるのは、怖がる相手も怒る相手も愛情を向ける相手も、全て自分だけになればいい。追いかけて切なげな声で呼ぶのは、俺の名前だけでいい。
だから、どんなに俺が望んでも「キスが欲しい」なんて言わない。
和子から動くよう仕向けるのは簡単だ。でもそれじゃ意味がない。
誰よりも近づいて密着して身体に腕を沿わせてくるのが、いつだって当たり前に俺だと、他の誰でもない俺でしかあり得ないと和子が身体で覚えるまで、慣らせるまでは。

心底望む場所には触れずに、雪久は少し青ざめた頬に唇を当てる。びくりと震える和子の反応すら、次への一歩と思えば悔しくもない。
ぎゅっと目を瞑っていた和子は雪久が離れていった空気を感じて薄目を開く。雪久は既に通路側に顔を向けてしまっていて、やはりまた態度なり表情なりに怖がっているのが表に出ていたのかと気落ちする。でも繋いだままの雪久の手は宥めるように優しく手の甲を撫でていて、また次頑張ろうとほっとする。

「……名前呼んでからなら、怖くないかもな」
「……う、ん」

雪久はほっとしたような和子の返事の声にちらりと視線を戻す。ごめんねという表情と目が合って、まだまだこれからだなとと思う。でもいつまでもこんな空気じゃやっていられない。
わざとからかうようにニヤリと笑って見せ、また名前を呼ぶ。

「……和子」
「タ、ターイム！」

「何、ただ呼んだだけだぞ」
「ま、紛らわしい！」

窓際に目一杯後ずさって真っ赤な顔をして怒る和子の表情が愛おしくて、雪久は柔らかく微笑んだ。こうして繰り返していって、当たり前に触れあって過ごせるようになる日が、きっと来る。それまでは。

「意識してんの」
「……」
「和子サン」
「うるさい」

ぷいと顔を逸らして窓を見た和子の照れた顔はまた鏡のように映し出されて、和子自身にも雪久にもクリアに見えた。
もう少ししたら、柔らかかった頬にもう一度口付けてみようと、心に決めた。

しあわせとおつきあい

ぼくがふしぎだなって思ったことを聞くと、おとなは困ったかおをする。

いつも何でも知ってますよってじまんしたかおするのに、すぐ「こどもは知らなくていーの」って。

「ねえねえ、わこちゃんはしあわせって何色だと思う？」

そう聞きながら、がさがさとちょっと音をたてる。たくさんの色がついた折り紙の中からぼくの三番目にすきな色をさがした。さっき見たと思ったのに。見つからなくってちょっと手がもじもじする。

「しあわせの、色」

ちいさい声でとなりにいるわこちゃんがぼくが言ったことばをくりかえした。

「ぼくの名前は、みどり色なんだよ。ゆきにーは白で、」

おとななんだから色の名前は知ってるはずなのに。

がさがさ。ちらばった紙の中にすきな色が見つからない。どこいっちゃんたんだろう！

「ねえわこちゃん、ぼくの三番目にすきな色がどっかいっちゃった！　わこちゃんもってない！？」

「え？　あ、これかな」

ごめんね碧くん、少し折っちゃった、っていう声と目の前にきたきいろにガッカリとうれしいがまじる。じわって目があつくなりそうだったけど、ジェシカがちかくにいたらまた「ミドリの目はすぐみずうみね」ってばかにされるからがまんする。ジェシカが日本にいなくてよかった。

「このきいろでぼくのいもうとにお花をつくったらよろこぶよね」
「そうだね、ぜったい喜ぶよ。ちいさくてかわいかったね」
「ぼくもさいしょ、あんなだったのかな」

きょうびょういんでうまれたぼくのいもうと。
ママ、じゃなくておかあさんがわらってだいてた、ぼくのいもうと。ぼくのように、ほんとうに大きくなるのかな。

「はやくまた、ひなに会いたいな」
「そうだね、陽菜ちゃんに会いたいね。明日お父さんが迎えに来てくれるから、そうしたらまた一緒に見に行けるからね」

にっこりとわらってくれるわこちゃんが、ぼくはだいすきだ。ジェシカみたいにいじわるしないし、いっしょにあそんでくれる。あたまをぽんってなでてもらうと、くすぐったいようなうれしさでいっぱいになる。
うれしい、は何色かなあ。

「da……おとうさんはピンクなんだよ。ピンクがすきなんだって。わこちゃんのかんじ、ぼくわかんないから何色かわかんない、ごめんね」
「和子、は色がない名前なんだ。でもそうだなあ、ミルクティ色、かな？」

ほら髪の色と一緒、ってふわふわのかみのけをわこちゃんが指でくるくるとまわした。うん、そっか。やさしい色。

「じゃあしあわせの色は？」

「う、うーん」

「なまえに色をつけれるなら、しあわせにも色、つけたいな」

きいろの折り紙を花のかたちにしながら、かんがえる。

「おかあさんがね、しあわせって言ったんだ。おとうさんとぼくとひなを見て。だからぼく、それに色をつけたいの」

おかあさんはよく、しあわせって言う。ぼくのほっぺにキスして、しあわせって。おとうさんにだきついて、しあわせって。たくさんたくさんしあわせなら、それに色をつけておかあさんに折り紙を折ってあげたい。

「ジェシカのおかあさんもね、おとうさんとはじめてキスしたときしあわせだったんだって。でもさいきんはそうじゃないってジェシカは言ってた」

いつもいじわるを言うジェシカがちょっとかなしそうなかおして言ってた。ジェシカはいじわるだけど、ジェシカがわらってないと、ぼくもかなしい。

がんばって折り紙のかどをきれいにあわせて、折る。これを見て、ひなもしあわせって思ってくれるかな？　まだ泣くだけかな。

そうだ。わこちゃんがしあわせって言うときはいつかな。

「ねえわこちゃんは？　わこちゃんはゆきにーとはじめてキスした

とき、しあわせだった？」

折り紙を折りながらきく。うん、きれいに折れた。きいろのお花。

わこちゃんに見てほしくってかおをあげてわこちゃんを見たら、白い折り紙をくちにあててうえをむいてる。おそらになにか見えるのかな？　でもおうちの中じゃ、おそらは見えないよ。

「わこちゃん、きいてる？」

「う、うん。聞いてるよ。そ、そうだなあ」

「おとうさんとおかあさんはおうちでキスしたんだって。わこちゃんは？　わこちゃんもおうち？」

白い折り紙をばさばさとふりながら「どうしてこどもってそういうことを聞くのかなあ」ってちいさい声でわこちゃんは言う。ジェシカはぼくが聞かなくてもおとうさんとおかあさんのことをおしえてくれたし、ぼくもおかあさんに聞いたらうれしそうにおしえてくれた。ぼく、おかしいことを聞いてないよ？

「えーとね……し、新幹線かな」

「しあわせの色、見えた？」

「……えーと、その時はちょっとびっくりしてね、しあわせっていうか驚いてそれどころじゃなかったって言えばそれどころじゃなくてでもそれってこどもに話す内容かな夢がないかな、どうかなどうなんだろう」

「……わこちゃんのいってること、ぼくには分かんない」

そうだよね、って言うわこちゃんの困ったかおをみて、ぼくも困る。でもきいろの折り紙を見て「じょうずに折れたね」ってあたまをなでられたら、うれしくなって、かおがあったかくなる。うれしい、はおとうさんといっしょのピンクにしよう。

それからもたくさん折り紙を折ったけどおなかがすいたから、わこちゃんとふたりでごはんをたべた。ゆきにーはまだおしごとなんだって。「今日は早く帰ってくるって言ってたのに、ごめんね」ってわこちゃんが言ったけど、おしごとならしょうがないっておかあさんがよく言うから、ぼくだってしょうがないって思うことにする。ぼくはおにいちゃんになったんだから。だから。

「……やっぱり一緒にお風呂入ろうか？」

「だいじょうぶ……」

おふろに一人で入れなくない。ぼくだってもう六才。もうすこししたら小学生になるんだ。おにいちゃんなんだ。おとうさんがいなくったって、おかあさんがてつだってくれなくったって。

「わ、わこちゃんもおふろはいりたいなら、いっしょにはいってあげてもいいよ」

そうおふろのまえで言ったとき、ゆきにーがかえってきた。

「あ、おかえりなさい、雪久さん。今から碧くんとお風呂入るから、ご飯自分で温めてもらえる？」

「……ただいま。いい、俺が一緒に入る」

ゆきにーはおとうさんみたいにネクタイをはずしながら、ちょっとつめたいかおをして「碧、先に服ぬいどけ」って言う。おなかすいててさきにごはんを食べたいなら、ぼく、わこちゃんと入ってもいいのに。

でもなんだかこわかったから、はーい、っておかあさんにほめられる声でへんじをした。

おふろでゆきにーにあたまをあらってもらって、それから目をぎゅっととじながらかおをあらう。いたいの、きらい。
きれいになっておふろにはいって、十を十回かぞえる。そうしないと日本では出ちゃいけないんだっておとうさんが言ってた。

「きょうおかあさんとひなを見たあと、わこちゃんとひなの折り紙折ったんだよ」
「そうか」
「ひなの色はきいろなんだ」
「ふーん」
「わこちゃんはミルクティ色でね、」

うちであそんだはなしをゆきにーにもおしえてあげる。わこちゃん、きいろのお花ほめてくれたんだよ。わこちゃんはゆきにーの白でじょうずにはこをつくったんだ。とってもじょうずなんだよ、あとで見てね。しあわせの色は見つからなかったんだけど、明日ひなにあったらわかるかもしれないから、はやくあいたいな。でもわこちゃんはゆきにーとキスしてもしあわせの色は見えなかったんだって。

「は？」
「しんかんせんでびっくりして、しあわせの色が見えなかったんだって。ゆきにーはしあわせの色、見えた？」
「意味が分からん……」
「なんでわかんないの？　おとななのに。だから、おとうさんとおかあさんはおうちではじめてキスしたときしあわせだったの。でもわこちゃんははじめてしんかんせんでキスしたとき、」
「最初は新幹線じゃないぞ」
「……ちがうもん、わこちゃんしんかんせんって言ってたもん」
「違わない。うちだうち、ここのソファ」

「しんかんせんだもん！」

ゆきにーがうそを言う。それとも、わこちゃんがぼくにうそをついたの？

十を十回かぞえたのかもうわからなくなって、はんぶん泣きながらおふろを出てわこちゃんをよぶ。わこちゃん、わこちゃんしんかんせんって言ったよね！？

「ちょ、ちょっと待って！　雪久さんはまだ出て来ないで！」

「いまさら」

「いーから！　絶対出て来ないで！　はい、碧くん頭拭くよ、はい服着ようね、はい向こう行こうねー」

「わこちゃん、ゆきにーがしんかんせんじゃないってうそついた。ここのソファだって」

「え」

「ソファだろ」

「しんかんせんって、言った、もん！」

まだおふろにいるゆきにーにむかってさけぶ。でももうこえが出なくなる。ほっぺをなみだがながれるのがわかった。日本にきてから、がんばって泣かなかったのに。

泣きだしたぼくにわこちゃんはパジャマをきせ、白いタオルであたまをふきながらだきしめてくれる。でも、いちど泣きはじめたら、ぼく、とまんない。

「碧くん、あのね、新幹線もそうだけど、その、ソ、ソファもあってるんだよ」

「だ、だって、はじ、はじっめてって……はじめては何回もある、の？」

ソファでぼくをひざにのせながらあたまをふいてくれているわこちゃんの手がとまる。
なみだがまたほっぺをながれたけど、じっとわこちゃんのかおを見あげる。

「うう、かわいい……あのね、あの、ほっぺの初めてがね、新幹線なの」
「……ほっぺのキスはあいさつだよ？」
「そ、そっか」
「あいさつのキスは、ぼくもいなかのおじいちゃんちでわこちゃんにしたよ？」
「そう、そうだったね」
「じゃあ、ソファ、が、ほんとなの？」

はなからも水がでちゃった。タオルでかおをごしごしとふく。

「う」
「もう観念して言えよ、それともこどもだから誤魔化すか？」
「うー！」

いきなりぎゅうってわこちゃんにだきしめられる。おふろから出てきたゆきにーのわらい声がきこえる。

「はじめては、ここ、かな……」

ぎゅうってぼくをだきしめたまま、ちいさな声でわこちゃんが言う。

「……しあわせの色、見えた？」
「うん……見えた、よ」

「何色？」
「……きらきらして眩しかったから、白か、光、かな？」
ひかりって色なの？　って聞こうと思ったら、ゆきにーの「ふーん」って言う声といっしょに、わこちゃんがぼくのあたまのうえで「ぎゃー！」ってさけんだから、ぼく耳がいたい。

「光ってたんだ」
「ちょ、ちょっと早くご飯食べてきてよ。いま碧くんと二人で話してるんだから！」
「ほら早く。碧が知りたいって見てるぞ」
「碧くん頭乾かそうかー、ドライヤー持ってくるね」
「わこちゃん、ひかりって何色？」
「うー！」

ほら、ってわらうゆきにーの声に、わこちゃんはよくわかんない声で「うー」ってこたえる。おとなでもわからない色ってあるんだなって思って、わこちゃんにもういいよってかおをあげようとしたら、くびにおいてあったタオルが目の前にきた。
びっくりしてどかそうと思ったけど、大きな手がタオルのうえからぼくのかおをつかんで、ぼくのおなかもくすぐってきた。ゆきにーだ。やめてよって言いたかったけど、くすぐったくてわらい声しか出なかった。
ゆきにーの手からにげてわこちゃんのひざのうえからおちそうになったけど、やっぱりゆきにーの大きな手がぼくをだきしめてとめてくれた。タオルがかおからずれて、やっとわこちゃんとゆきにーが見える。

「和子、いま何色だった？」
「……知らない」

わこちゃんはおふろにはいっていないのに、きゅうにあかいほっぺをしてぼくのあたまをタオルでふいて、ゆきにーはぼくなんて見てなくて、じっとわこちゃんを見てわらってた。

「碧、お前が大きくなったら自分で確かめたらいい。そうしたら何色だったか、俺と和子に教えて」

「ぼくもう大きいよ、おにいちゃんだもん」

「もっと大きくなったら」

「でもぼくいましあわせだよ。おとうさんとおかあさんにぎゅってしてもらうとしあわせだもん。あしたひなを見たら、もっとしあわせだもん」

そう、しあわせって言うおかあさんとおんなじ。

「じゃあそれ何色なんだよ」

「……わかんない」

わかんないからおとなに聞いてるのに。なんだか手がもじもじする。ほっぺをふくらませてゆきにーを見るのをやめる。でもそうしたらわこちゃんのひざからゆきにーにだきあげられた。……ゆきにーにだきあげられると、おとうさんといっしょでたかいから、すき。

「しあわせは何回もあるんだから、つぎに碧がしあわせだって思った時、何色か考えればいい。分からなかったら、また次のしあわせがくるまで楽しみにとっとけ」

ゆきにーをうえから見おろす。わらったゆきにーのかおも、すき。

そっか。つぎまでまてばいいのか。小学生になったらわかるかな。わかったらいいな。

「わかった」

うなずくとせなかをとんとんとなでられて「髪乾かしてもらえ」ってソファのよこにおろされた。

わこちゃんにかみをかわかしてもらって、はみがきをする。はやくねて、あした、はやくひなにあいにいくんだ。きいろのお花をあげるんだ。

ひなのきいろ。ぼくのみどり。おかあさんのみずいろ。おとうさんのピンク。

いろんな色があるけど、ぼくにはまだしあわせの色はわかんない。ひなにあえてしあわせだけど、まだ何色かはこたえられない。けど、大きくなったらひなにおしえてあげよう。だってぼくはおにいちゃんなんだから。

だけど大人になった僕は、困った顔をする。

和子さんが答え辛かった意味を知って、雪にぃに「しあわせの色、分かったか」ってにやにやした顔で追及されて、子どもの頃の無邪気な自分に面映ゆい気持ちになって。

いまも僕はしあわせの色を考えてる。これかなって思った色もあったけど、結局分からなくて。

でも、しあわせの意味が幼い頃とは違っても、しあわせの気持ちはいまも続く。

そうやってしあわせ探し、しあわせ見つけ。

むかしもこれからも、おつきあい。

しあわせとおつきあい（後書き）

拙い文章で、しかも視点が唐突に変わる作品でしたのに、最後までお読みいただきありがとうございました！
これで本当に完結、です。（多分、いや本当に。恐らく）

お気に入りや評価のお礼になるかは分かりませんが、挫折して放置していた番外編を上げてありますので、お暇な方はどうぞ～。
ではまたどこかで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3864o/

コンタクト

2011年9月20日07時43分発行